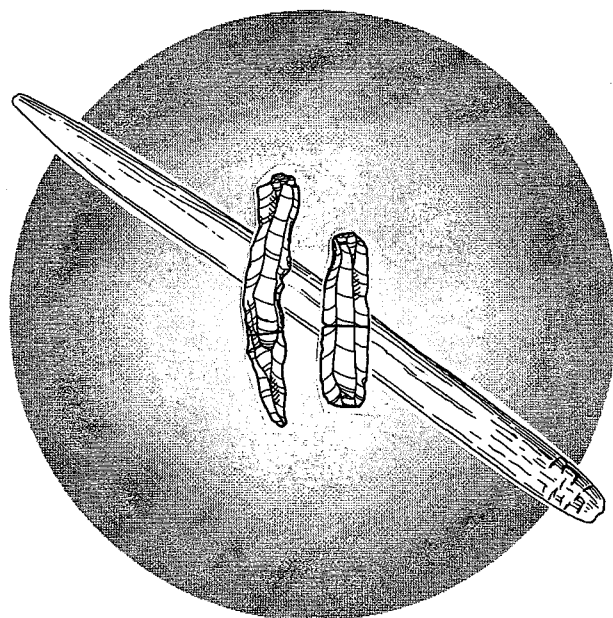


更新世末における人類の行動パターンとその領域の研究

*Study on Human Mobility Pattern and Territory
in Terminal Pleistocene*



文化学専攻有形資源論分野

芝 康 次 郎
SHIBA Kojiro

はじめに

細石刃石器群は、日本列島においては旧石器時代と縄文時代の移行期に盛行する（盛行時期を以下では細石刃期と呼称する）。こうした時代背景から、当該石器群研究は、その移行期の人類の居住活動や資源開発およびその変化を考える上で重要な研究として注目されてきた。現在日本には約 1800 ヶ所の細石刃遺跡が存在しており、特に密集して分布しているのは、北海道、本州中央部、そして九州である。九州にはこのうち約 720 ヶ所の遺跡が分布しており、その多さは、当該石器群の盛行を如実に示している。

九州の細石刃石器群は、多様な石材利用を背景とした細石刃製作技術が認められるところに特徴がある。これが結果的に多様な細石刃核形態となって現れているわけだが、従来の研究では、こうした多様性をもつ細石刃核が研究の中核をなし、この違いをもって編年や集団関係が描かれてきた。しかしながら、本来われわれ考古学研究者が明らかにするべきなのは、更新世末という環境変化の顕著な当該期における資源開発状況やこれに支える行動パターンなどの、集団関係の実態である。

本論では、これを明らかにするために、九州の細石刃石器群を研究の対象として、細石刃核のみでなく、細石刃石器群を総体として捉え、細石刃製作技術の大きな変化を明らかにし、その技術と石器石材利用の検討から集団の行動パターンおよびその領域を明らかにする。

結論的には、九州の細石刃石器群は、大きく 2 つの時期に分けることが可能で、この変化は行動パターンの変化とも関連している。その変化とは、画一性の高い技術とコア・リダクション型の石材消費戦略に支えられた長距離移動を基盤とする前半段階から、製作コストの抑えられたより柔軟な細石刃製作と、ネットワーク化された遺跡間関係を有する後半段階への変化である。

初出一覧

第 1 章 新 稿

第 2 章 「細石刃石器群の到来とその変遷について」『九州旧石器』第 11 号 九州旧石器文化研究会 2007 年 9 月
をベースとして、第 2 節に「九州細石刃石器群編年の再検討」『古文化談叢』第 56 号 九州古文化研究会 2007 年 9 月 を訂正、加筆して使用。

第 3 章 第 1 節 「非削片系細石刃石器群における行動論的考察」『阿蘇における旧石器文化の研究』熊本大学文学部
考古学研究室 2007 年 3 月 に加筆。

第 2 節 「細石刃核の型式間関係」『九州旧石器』第 10 号 九州旧石器文化研究会 2006 年 11 月
の一部に加筆。

第 3 節 「東南部九州細石刃石器群における石器石材利用とその特質」『熊本社会文化研究』第 4 号 2006 年
3 月 に加筆。

第 4 節 新 稿

第 5 節 「第 4 節総括 1. 高畑乙ノ原遺跡Ⅷ層遺物群について」『高畑乙ノ原遺跡・高畑前鶴遺跡・高畑宮
ノ下遺跡』山都町教育委員会 2007 年 3 月 に加筆。

第 4 章 第 1 節 新 稿

第 2 節 「九州細石刃期における行動領域」『日本旧石器学会第 5 回講演・研究発表・シンポジウム予稿集』
日本旧石器学会 2007 年 に加筆。

第 3・4 節 新 稿

第 5 章 新 稿

本文目次

はじめに

第1章 日本旧石器時代における行動論研究史	1
第1節 旧石器時代における行動論研究の進展	1
第2節 細石刃石器群研究における行動論研究	5
第3節 方法論的課題と今後の展望	8
第4節 対象時期と地域	9
第5節 用語の整理と研究の方法	13
第2章 九州における細石刃石器群の編年	15
第1節 九州における細石刃石器群編年研究史	15
第2節 九州における細石刃石器群の分類	17
第3節 各石器群間の関係	38
第4節 九州細石刃石器群の編年と変化の背景	46
第3章 九州における細石刃石器群の構造	50
第1節 中部九州地域細石刃石器群の構造と集団の遊動領域—熊本県阿蘇郡西原村河原第3遺跡の分析—	50
第2節 中部九州東西の集団関係	74
第3節 東南部九州地域細石刃石器群の構造と集団の遊動領域—石器石材利用から—	80
第4節 南九州における細石刃期の領域内集団関係	98
—石器石材利用と「畦原型」・「加治屋園型」の遺跡内でのあり方から—	
第5節 細石刃期後半段階の石器群構造—高畑乙ノ原遺跡におけるⅧ層遺物群の分析を中心に—	61
第4章 更新世末における人類の行動パターンとその領域	124
第1節 行動パターンとその領域の変化	124
第2節 石器石材入手過程に関する理論的検討	128
第3節 細石刃期の環境	131
第4節 行動パターンとその領域の変化の背景	135
第5章 結 論	143

付表

脚注

引用・参考文献

挿 図 目 次

第1章 日本旧石器時代における行動論研究史

第1図 砂川遺跡における石器搬入形態 (安蒜 1992)	1
第2図 削片系細石刃石器群研究における居住形態の一例	6
第3図 日本列島における細石刃石器群の2つの構造	7
第4図 本論における地域区分	10
第5図 九州における石材環境	12

第2章 九州における細石刃石器群の編年

第6図 細石刃核形態と技術との関係	16
第7図 鈴木忠司による野岳・休場型誕生模式図およびその分類	18
第8図 亀石山遺跡に認められる打面再生関連接合資料	20
第9図 亀石山遺跡における細石刃製作関連遺物	20
第10図 亀石山遺跡における打面再生剥片のあり方	20
第11図 河原第3遺跡における細石刃製作関連遺物	21
第12図 河原第3遺跡における打面再生関連資料	22
第13図 野岳遺跡の細石刃核 (1) <トーン部は打点の欠落する剥離面>	23
第14図 野岳遺跡の細石刃核 (2) <トーン部は打点の欠落する剥離面>	24
第15図 百花台遺跡出土細石刃核	26
第16図 吉武高木遺跡における同一母岩資料中の細石刃核	27
第17図 桐木耳取遺跡における層位的出土事例	28
第18図 F群関連資料 (松山遺跡)	31
第19図 F群関連資料 (銭亀遺跡)	32
第20図 I群関連資料 (上: 中尾二ツ枝遺跡・下: 東山I遺跡)	33
第21図 織笠による西海技法模式図	34
第22図 S群関連資料 (泉福寺洞穴7~9層)	36
第23図 S群関連資料 (茶園遺跡IV層・高畑乙ノ原・阿蘇原上)	37
第24図 茶園遺跡における細石刃石器群の層位的事例	40
第25図 亀石山遺跡における細石刃石器群の平面分布	41
第26図 亀石山遺跡におけるブロック間関係	41
第27図 亀石山遺跡細石刃石器群の平面分布と接合状況	42
第28図 中部九州東西の細石刃石器群における単体搬入石器	44
第29図 帖地遺跡2A区におけるF群とS群との共存	45
第30図 上場台地における細石刃幅の変異	48
第31図 九州の細石刃石器群編年	48

第3章 九州における細石刃石器群の構造

第32図	河原第3遺跡第6文化層における石器出土状況	52
第33図	細石刃と剥片との形態比較	54
第34図	黒曜石A製細石刃核の出土位置	55
第35図	河原第3細石刃石器群における石器製作構造	56
第36図	使用痕類型模式図	57
第37図	河原第3遺跡出土細石刃とその使用痕	59
第38図	石材搬入から搬出にいたるプロセス	60
第39図	遺跡内石器分布の比較	61
第40図	細石刃期における黒曜石製石器の分布範囲(1)	64
第41図	細石刃期における黒曜石製石器の分布範囲(2)	65
第42図	中部九州西部の細石刃石器群の分布	66
第43図	河原第3遺跡と亀石山遺跡における打面再生剥片の形態の相違	68
第44図	中部九州西部の細石刃石器群における細石刃核作業面の長さ	69
第45図	頭部調整実施率	71
第46図	河原第3遺跡占有集団の行動経路	72
第47図	中部九州東西における単体搬入石器	76
第48図	中部九州東西における石器石材組成の構成の比率	78
第49図	中部九州東西における石器石材組成の構成の比率の減少	78
第50図	南部九州細石刃石器群に入る腰岳系黒曜石の入手過程モデル	80
第51図	桐木耳取細石刃石器群の平面分布	82
第52図	層位的出土状況	84
第53図	桐木耳取遺跡第9エリアにおける細石刃石器群の分布(1)	85
第54図	桐木耳取遺跡における細石刃形態	86
第55図	桐木耳取遺跡第9エリアにおける細石刃石器群の分布(2)	87
第56図	第9エリア出土腰岳系黒曜石製細石刃とその使用痕	87
第57図	第18遺物集中部の使用痕を有する細石刃とその使用痕	89
第58図	南東部九州細石刃石器群の位置	90
第59図	南東部九州細石刃石器群における西北九州産黒曜石製石器	93
第60図	上場遺跡における腰岳系黒曜石製細石刃	96
第61図	東南部九州における遠隔地石材入手パターン	97
第62図	南九州における桑ノ木津留産黒曜石製細石刃核の分布	100
第63図	南九州における上牛鼻産黒曜石製細石刃核の分布	101
第64図	南九州における三船産黒曜石製細石刃核の分布	102
第65図	南九州における畦原型と加治屋園型細石刃核の分布	104
第66図	畦原型細石刃核の遺跡内でのあり方	105
第67図	加治屋園遺跡における黒曜石製石器と凝灰岩質頁岩製石器の分布	107
第68図	加栗山遺跡における黒曜石製石器と凝灰岩質頁岩製石器の分布	107
第69図	畦原型と加治屋園型の遺跡内構造	108
第70図	細石刃期南九州における集団の行動パターンとその領域	109

第71図	高畑乙ノ原遺跡Ⅷ層における遺物分布	111
第72図	高畑乙ノ原遺跡における細石刃製作に伴う調整剥片類	112
第73図	高畑乙ノ原遺跡出土の爪形文土器	114
第74図	高畑乙ノ原遺跡と周辺の縄文時代草創期遺跡	116
第75図	泉福寺洞穴第3洞9層下部における石器密集分布(田中1997)	118
第76図	石器密集分布中の細石刃の出土状況(田中1997)	119
第77図	朽堀遺跡における遺跡内分布と針尾産黒曜石製石器	120
第78図	九州におけるS群と石器群に占める西北九州産石材の割合	122
第79図	細石刃期後半段階の遺跡間関係概念図	123

第4章 更新世末における人類の行動パターンとその領域

第80図	九州細石刃石器群における腰岳系黒曜石の石器群内比率	126
第81図	レンフリューによる交換モード	131
第82図	交換モード1～4の減少パターン	131
第83図	気候変動と九州細石刃石器群の存続年代	132
第84図	日本列島における最終氷期最寒冷期の植生図	133
第85図	移動頻度と道具多様性の理論的關係(Shott1986)	138
第86図	九州細石刃石器群における石器率と石核率	138
第87図	九州細石刃石器群における石器組成	139

第5章 結 論

第88図	更新世末における九州細石刃期集団の行動パターンとその領域の変化	144
------	---------------------------------	-----

表 目 次

第2章 九州における細石刃石器群の編年

第1表	九州における細石刃核型式の理解と変遷	17
第2表	九州細石刃石器群の技術類型(石器群別)	39
第3表	亀石山遺跡における接合資料一覧	41

第3章 九州における細石刃石器群の構造

第4表	河原第3遺跡第6文化層石器組成表	52
第5表	河原第3細石刃石器群における石材搬入の形態	53
第6表	細石刃の石材別微小剥離痕類型	57
第7表	細石刃の線状痕類型	57
第8表	利用石材からみた河原第3細石刃石器群の二相	62
第9表	亀石山石器群における石器組成	68
第10表	亀石山石器群における石材別石器生産のあり方	68

第11表	中九州東西における腰岳系黒曜石と流紋岩の石器群内比率	79
第12表	桐木耳取遺跡におけるエリア別石器構成	83
第13表	大隈半島における石器石材構成	91
第14表	宮崎平野部における石器石材構成	94
第15表	南九州における石器石材構成	109
第16表	高畑乙ノ原遺跡Ⅷ層石器群における石材利用状況	113
第17表	泉福寺洞穴における石器組成表	117

第4章 更新世末における人類の行動パターンとその領域

第18表	中国北部における細石刃遺跡出土の動物遺存体	134
第19表	民族誌から得られた骨角製および石製槍の特徴	136
第20表	骨角製および石製槍が使用される民族誌的状況	136
第21表	九州細石刃石器群の石器組成	137
第22表	移動性の高低による石器群の特徴	141

第5章 結 論

第23表	九州細石刃期前半段階から後半段階への変化	145
------	----------------------	-----

付 表

付表1	九州細石刃石器群における石器石材組成
付表2	南九州における畦原型と加治屋園型とその石材構成
付表3	石器石材原産地分析結果一覧

第1章 日本旧石器時代における行動論研究史

第1節 旧石器時代における行動論研究史

1. 旧石器時代研究における行動論研究の進展

旧石器時代人の移動・居住形態に関する研究は、石器群の編年研究と並行して行われてきた旧石器時代研究の中でも研究事例の多い分野である。行動論研究に関する研究史は、これまで幾人かの研究者によってまとめられているが（小野 1989・1995、高倉 1999、野口 2005）、本章では、本論で対象となる細石刃石器群研究との関連を見るために、旧石器時代研究における行動論研究をまとめ、その中の細石刃石器群研究の位置づけと今後取るべき研究の方向性について論じる。

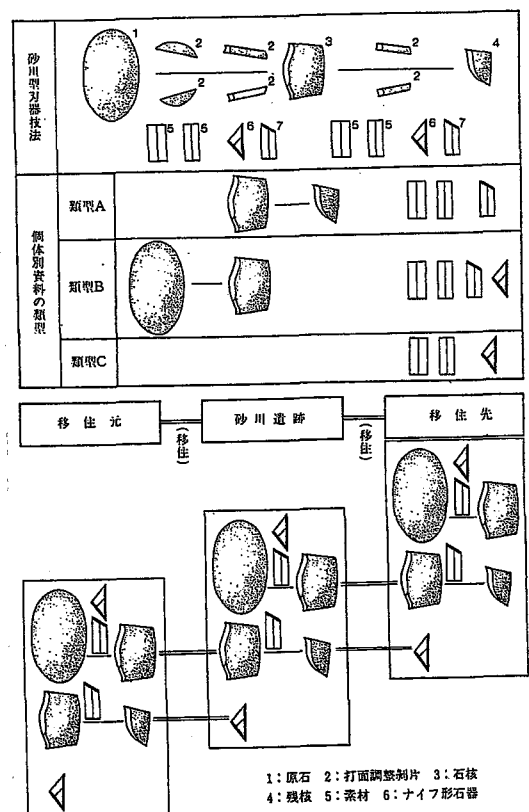
行動論研究の方法について、それが 1960 年代後半の埼玉県砂川遺跡の発掘調査とその研究（戸沢 1967 ほか）を嚆矢とすることは、これまで多くの研究者によって述べられているこの研究法は、一般に、遺跡（石器群）構造分析と呼ばれてきた。遺跡（石器群）構造分析とは、石器素材の搬入から石器製作そして搬出にいたる一連の過程を明らかにするもので、その目的は、遺跡の中の石器分布状態を分析することから、旧石器時代人の集団や集落のあり方を明らかにすることである（安蒜 1992）。

その具体的な研究方法は、石材を母岩別（個体別）に分類し、その母岩分類と接合資料から、遺跡の作業内容を把握、類型化するものである（以下、個体別資料分析）。例えば、安蒜政雄は、残核を含む原石の残滓と製品をもつ類型A、残核を残さない原石の残滓と製品からなる類型B、一切の残滓をもたず製品のみを類型Cと3つに類型化し、これらの類型が時間的な前後関係を有しながら存在すること、その一方で、新しい母岩を補充して消費を開始するという「原料の二重消費と時差消費」を明らかにした（安蒜 1977、1992）。

また、安蒜は、1つのブロックのみに分布する個体別資料（定置個体）と複数のブロックに分布する個体別資料（移動個体）を見出し、前半段階の定置個体が見当たらず、後半段階の移動個体が多いブロックを増設されたブロックとし、前半段階の定置個体が多く、後半段階の移動個体が少ないブロックを廃絶されたブロックとし、これをイエの増設と廃絶に読み替えた。

安蒜の砂川遺跡の分析によって、①石器石材消費が1遺跡の中で完結するものではなく、複数の遺跡にわたって継続していること、②遺跡間だけでなく、遺跡の中のブロックも時間差をもって形成されている可能性が示されたわけである。

これは、2つの研究の流れを生み出した。一つは、石器製作技術の工程の差異に注目し、これを遺跡間で比較して複数遺跡間における集団の移動・居住形態を



第1図 砂川遺跡における石器搬入形態（安蒜 1992）

明らかにしようとする視点、もう一つは、遺跡内部での細やかな石器分布から遺跡内での集団関係、場の機能、石器群形成の要因を探ろうとする視点である。

この石器群構造研究の成果は、小野昭によって次のようにまとめられている。①1遺跡内で相互に離れた石器や剥片類の複数のブロックが結合され、旧石器時代の比較的ルースな同時性という時間幅の世界にきわめて高い同時性の尺度を考古学的手法によって設定することが可能となったこと。②接合関係によって石器製作技法の復元がより立体的になったこと。③石器素材と石核の搬入、使用、搬出があるということを理解させ、遺跡の形成を当時の人間集団の動きの中で把握することを可能にしたこと。さらにこれは遺跡構造の解明へとつながっていったこと。④その遺跡に搬入されたもの、遺跡内で製作されたもの、遺跡外へ搬出されたものという三者の存在は、他の遺跡との関連を想定させ、遺跡外へ展開される集団の規模、定着度、移動のサイクルなどの問題意識を定着させたこと、である（小野 1989）。こうした個体別資料を通した石器群構造分析は、遺跡内の集団の動きと遺跡外の集団の動きを関係づけてより具体的に言及できるようになったことに重要な意義をもつ。

ここで特に石器製作工程の連鎖構造に着目する研究について見ていく。安蒜の研究以後、着実に研究事例が蓄積されている。例えば、南関東地方の槍先形尖頭器段階（島田 1994）、ナイフ形石器終末期（国武 1999）、IV下・V上段階（野口 1995）、VI層段階（吉川 1998、2002、2003）、そして、神子柴・長者久保石器群（及川 2004、2006）という複数時期の石器群に対して適用される。依拠する方法は、細部に相違はあるものの、母岩別資料や接合資料から遺跡での石器製作工程を復元、類型化し、それぞれの石器群の分布状況を検討することで遺跡での工程的差異を抽出することでほぼ一致している。そこでは、砂川期（IV上段階）のような均質的な石器製作の連鎖が行われず、遺跡間で作業内容が均質ではない遺跡間で相互補完的な工程連鎖のあり方が示されている（野口 2005）。砂川遺跡で試みられたいわゆる「砂川型」の遺跡構造論分析が、時期を異にする石器群に適用され、かつ異なる遺跡間での連鎖構造を明らかにした点は、後期旧石器時代の移動形態が時期によって異なるということを示す有益な作業であったといえる。

しかしながら、方法論的な問題点もある。高倉純は、日本旧石器時代の行動論研究に関して、石器石材と石器製作技術との共通性に関する吟味が欠如していること、そして、ある空間的まとまり（例えば台地や河川流域など）を仮想の移動範囲という前提をもって議論を出発させていることをその問題点として挙げているように（高倉 1999）、上記の事例研究は、全てが南関東という限定された空間での移動・居住形態の議論となっている。

こうした問題点を克服する研究として、特定石材やある特徴的な技術を対象とした議論も進んでいる。例えば、近畿地方における瀬戸内技法の技術的展開に関する議論（山口 1983、絹川 1993 など）、北海道白滝産黒曜石の動向に着目した研究（木村 1995）がそれにあたるだろう。前者の議論においては、山口卓也は、原産地遺跡では瀬戸内技法の第1工程が中心となり、遠隔地において第1工程が欠落し、第2工程が中心であることから、これを「石器製作工程の異所展開」と呼ぶ（山口 1983）。絹川一徳は、この考えを肯定しつつ、第2工程が消費地遺跡において様々なアクシデントに対応した臨機的、選択的な技術運用が存在することを指摘している（絹川 1993）。後者において、木村英明は、白滝の開発過程に注目し、白滝産黒曜石の分布や遺跡内への搬入形態を検討し、細石刃石器群出現以前の「現地（直接）調達方式」から細石刃期において分業と交換のネットワークが形成されたとみる。細石刃期にいたって、ネットワークが存在するという根拠は、白滝産黒曜石のひろがり、関連して遠隔地の微量黒曜石の様相、「湧別・幌加沢テクノコンプレックス」と「峠下・新道テクノコンプレックス」における技術的交流、そして「荒屋型彫器」の広がりにある（木村 1995）。木村のように、複雑

な社会的背景を想定するには慎重な議論を要するが、石器石材原産地と石材消費地との間でのモノとモノの動き、または技術的な複合性（木村の言うテクノロジカル・コンプレックス）、集団の移動を想定している点は、「砂川型」の遺跡構造論研究を一步進めて、石器石材分析や技術分析を行動論や集団関係論に昇華させた点で評価できる。

以上のような石器石材原産地と消費地（遺跡）との関係から、集団の移動形態や集団関係を明らかにしようとする研究は、石器が唯一の手がかりとなる現在の日本旧石器時代研究において、その到達点といえるだろう。そして、近年では、特定石材や特定技術だけでなく、石材環境を精査し全石器群を対象とする研究が見られるようになってきている。田村隆や国武貞克らは、下総台地に所在する遺跡の石器石材の所在を岩体調査によって調べ上げ、全ての石材が下総台地へどのように搬入され、廃棄されるかを検討した（田村 2005）。そこで田村は、旧鬼怒川と旧利根川とに挟まれた下野 - 北総回廊を狩猟採集民の往還路と位置づけ、下総台地にある3つの分水界で石器石材利用（各原石産地）の傾向が異なることを突き止めた（田村 2005）。国武は、こうした詳細な石材環境を把握した上で、下総台地における後期旧石器時代前半期（IX層中部～IX層上部VII層下部）について居住行動についての検討を行った。一連の石材消費戦略が発揮された地理的範囲を「生業領域」、訪問した石材産地の組み合わせから復元される移動範囲を「移動領域」とする2つの操作概念を用意し、IX層中部段階とIX層上VII層下部段階とでは、石材構成からみて移動領域自体に変化はないものの、生業領域に大きな変化があることを明らかにした。すなわち、後段階では、生業領域が拡大する。これは石刃のみでの運搬がなされるようになったため、その背景を生業経済に対する予測可能性の高まりと評価した（国武 2005）。国武はその後の論考で、後半期（砂川・東内野期）段階では、移動の単位となる集団が限定された地点に石材や石器をまとめて搬入し、その特定地点を中心に領域内を移動する居住形態になると述べている（国武 2007）。国武の議論では、「移動領域」と「生業領域」という概念がキーになり、これらの一致・不一致に着目し、これを領域の伸縮と捉える。

田村や国武の議論によれば、石材採取が埋め込み戦略を基本とする直接採取であったという前提条件はあるものの、集団の移動生活は狭い台地単位で完結しないことが明らかであり、仮想の地域区分が無意味であること示すものだろう。また、旧石器時代の中でも、「領域」自体に伸縮があることを示した点は、遊動→定住という単線的見方に一石を投じている。こうした議論によって、集団の移動経路や移動領域などに関する情報がこれまで以上に具体性をもって知ることが出来るようになってきている。

2. 九州旧石器時代研究における行動論的研究

九州において、集団の移動や居住に着目した議論には、石器生産活動からの検討（吉留 1984、綿貫 1992、荻 1998a、木崎 2003、萩原 2004）、石器石材消費からの検討（荻 1998a、岩谷 1998、綿貫 2002、宮田 2002、小畑 2007）の大きく2つの流れがある。

石器石材と石器生産との関連性に関して、吉留は、原産地付近では剥片剥離作業の全工程が行われる大規模遺跡が多いのに対して、そこから離れた消費地遺跡では、後半段階の剥片剥離作業が行われることを指摘した（吉留 1984）。綿貫は、原産地（腰岳）周辺遺跡と消費地遺跡との石刃、縦長剥片とその石核の作業面の長さを比較し、原産地周辺遺跡では、大型から小型品まで存在するが、消費地遺跡では、小型品に偏ることを実証し（綿貫 1992）、流紋岩についても同様の点が指摘されている（荻 1998a）。原産地と消費地間で、剥片剥離作業や石器形態が変化するという理解は、九州地域においてもコアリダクションを見出したものとして評価される。

また石器石材と石器器種との関連性については、AT 上位石器群において、両者が地域的なまとまり

を持ちつつ結びつくこと（荻 1998b・c・2000）や、南九州の細石刃石器群において、一部の細石刃核型式が特定石材と結びつくことが述べられている（桑波田 1998a）。こうした議論を一步進めたのが、萩原博文である（萩原 2004）。萩原は、九州のナイフ形石器文化後半期に見られる原の辻型台形石器や今峠型、狸谷型ナイフ形石器、角錐状石器や剥片尖頭器の特殊形態を地域集団のアイデンティティを象徴するものと捉え、この分布が地域集団の領域を示すと考えた。萩原によると、ナイフ形石器文化後半期には、特定器種の分布の共通性と石材利用から西北九州から山口県域までを包括する 20,000～30,000 km²の範囲を地域領域が存在するという。

九州において、石器石材と集団関係に関して積極的に論じているのは荻幸二である（荻 1998a）。荻は、遺跡間での石材の違いが河川流域や平野部に存在する遺跡群でまとまる傾向があることから、隣接する遺跡群間での「在地系石材を中心とする小規模な流通」を想定している（荻 1998a）。この議論については、ある石器石材が出土した消費地遺跡とその原産地との距離との関係をどのように解釈するかが問題となる。そこには当然、①対象とする地理的範囲にどの程度の集団が存在しているのか、②石器石材はどのような入手過程（直接、間接、埋め込みなど）を経て遺跡内に搬入されるか（または廃棄されるか）という問いが生じるが、荻が想定するように、遺跡群（河川流域もしくは平野、台地など）に同時期にこうした各々の地域に別々の集団が居住していたことを実証できておらず、そもそもこうした遺跡群がそれぞれ関連性を持ちつつ、集団の移動範囲と解釈するアプリアリな根拠はない（高倉 1999）。綿貫が述べるように、遺跡内に存在する石材の種類が集団の移動経路と対応する（綿貫 2002）ならば、視覚的な遺跡のまとまり（遺跡群）は、集団の行動範囲を反映するものではない。

これに関して、小畑は、Ingber の石材産地移動のシミュレーション（Ingber1994）を用いて、阿蘇周辺地域における旧石器時代集団（AT 上位石器群）の移動領域を推定した。その結果、阿蘇カルデラ上の遺跡が阿蘇地域内部で完結する閉鎖的な領域内の遺跡ではなく、さらに石器の多様性（石器率・石核率・石器出土率の比較）から、開放的な低地部遺跡（「有明低地」と「別府低地」）と補完的な関係にあることを示した（小畑 2007）。小畑の適用した Ingber の方法は、石器群形成に関する様々な要因（交換、管理性、石質など）を排除した単純なモデルではあるものの（Ingber1994）、遺跡内における石材構成の解釈方法には、単に石材構成の類似によって行動領域を描く方法よりも説得性を持つ。

依拠する方法論に違いがあるが、先に挙げた萩原が西北九州全体を地域集団の領域として捉えたのに対して、小畑は、ほぼ同時期に阿蘇周辺とそこに隣接する低地部との往還移動という相対的に狭い領域を想定している。

3. 小結

1 で述べた日本列島における行動論研究では、個体別資料分析を基礎とする遺跡間関係の解明やこれと石器石材の分布状況から研究が行われている。

日本旧石器時代研究における行動論研究の流れは以下のようにまとめられる。

- ①限定された遺跡単位、もしくは台地・河川流域単位における石器群構造分析とそれに伴う行動論的解釈。いわゆる「砂川」型分析法。
- ②特定技術、特定石材を対象とし、主に石器石材原産地遺跡と消費地遺跡との技術的関係の解明および行動論的解釈。
- ③遺跡出土全石材を対象とし、石器石材原産地遺跡と消費地遺跡との技術的関係の解明および行動論的解釈。

九州においては個体別資料分析が盛んではない。ただ、石器石材原産地遺跡と消費地遺跡との両者

間における技術的な段階差の存在や石器の形態変化を突き止めた点は、両研究において同様である。ただし、九州において集団関係や集団の移動・居住形態を想定する際、いま一つ議論に厳密性に欠けているように思われる。例えば、特徴型式の分布（萩原 2004）や遺跡内での石材利用（萩 1998 など）では前提条件が多い。例えば、萩原は、特徴型式＝地域集団のアイデンティティ、特徴型式の分布＝地域集団の領域と想定しているが、本当にそうか。この前提に立って例えば細石刃石器群を検討材料にすると、各細石刃核型式の分布が集団領域ということなる。これは、後述するが、石材利用や遺跡内への搬入形態などを精査すると必ずしもそうではない。萩の議論では、石器石材原産地の情報に関して問題がある。南九州に存在する漆黒色黒曜石の多くが、実際は南九州産であるものにも関わらず、全て佐賀県腰岳産黒曜石とされているために、集団関係の解釈に問題が出ている。また、石器石材の動きを隣接遺跡群との「交易」を想定しているところもその根拠が不明である。

方法論的には、個体別資料分析に立脚した石器群構造論分析の蓄積が必要である。これと石材原産地の情報を出来る限り整理し、その石材の消費地遺跡への搬入形態を知ることが、現状では集団の移動範囲や集団同士の関係にアプローチできる最も妥当な方法といえる。

第2節 細石刃石器群研究における行動論研究

細石刃石器群研究における行動論研究は、上述のような旧石器時代一般の議論とは別に進展してきた。当該石器群研究では、細石刃製作技術が、ある程度定式化させているためか、基礎となる母岩別資料分析が遺跡の分析においてあまりなされることがなく、そうした資料的特性から細石刃核の比較によって、集団の移動や技術の拡散過程が論じられることが多い。

ただし、個体別資料分析から当該期集団の移動、居住形態を分析する精緻な分析も少なからず存在する。その多くは、削片系細石刃石器群に対して行われており、非削片系細石刃石器群を対象とした行動論的研究は低調である。ここでは両者を比較する形でこうした相違の要因をさぐり、あわせて本論の対象となる非削片系細石刃石器群における方法論的展望を見出したい。

1. 削片系細石刃石器群における行動論研究

まず、削片系細石刃石器群である中ッ原遺跡群（堤編 1991、1995、1996）や恩原2遺跡（稲田編 1996）などの個別遺跡研究例を見てみよう。

中ッ原遺跡群の研究においては個体別資料分析を基礎として、技術分析、石器使用痕分析など多様な研究が展開されている（堤編 1991、1995、1996）。1遺跡G地点（以下、1G遺跡）とそこから500m離れた5遺跡B地点（以下、5B遺跡）という2つの遺跡において、剥片の遺跡間接合が実現し、両遺跡における行動論研究に対して非常に有益な情報が与えられた。

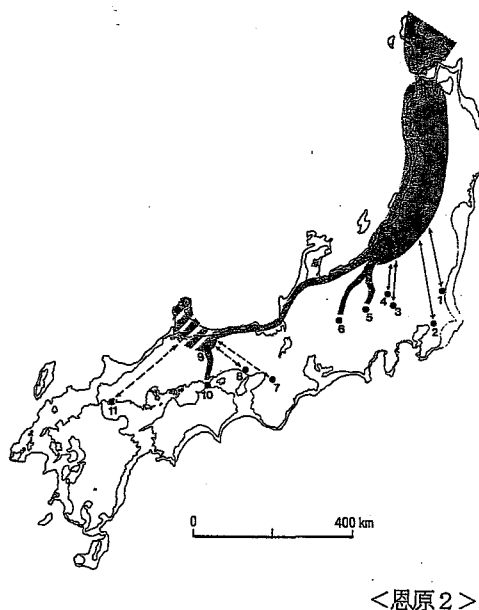
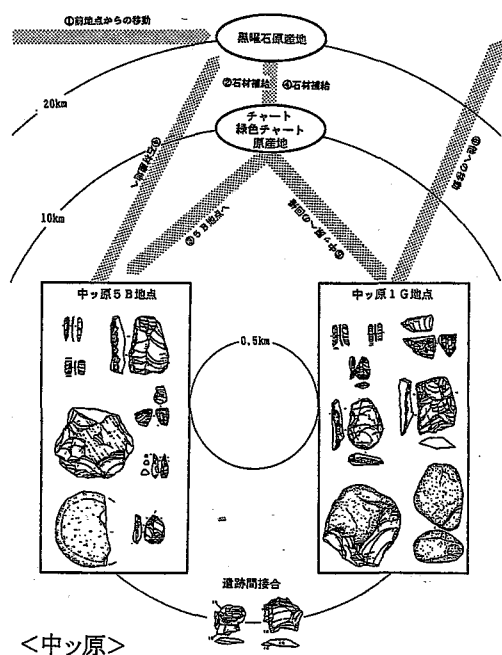
この中で、両遺跡の細石刃製作工程について検討した永塚俊司は、削片系細石刃石器群のひとつとされる荒屋系細石刃石器群では、細石刃核の準備・整形から細石刃製作に至る過程とその他の素材生産とが、「連動システム」として把握されるのに対し、本石器群ではそれらが「別動」しているという違いを見出した（永塚 1996）。加藤学は、そうした両遺跡の技術、石材組成のあり方の類似性、遺跡間接合資料の剥片剥離順序を根拠として、5B遺跡から1G遺跡への一方向的な移動を想定している（加藤学 1996）。本石器群の諸研究を統合し、「技術的組織(Technological Organization)」(Binford 1979、阿子島 1989)の解明へと進んだ堤隆は、本石器群を残した集団が、石材補給を移動の中に組み込み、同じ場所への近距離の回帰移動と他の場所への中・長距離移動をなす遊動形態を有

していたことを描き出した。そして、本石器群の技術的組織の形成は、半径 20 km以内に存在する石材環境を濃く反映したものと結論づけた（堤 1996）（第2図左）。

恩原2遺跡における研究において、絹川は、本石器群がその技術的特徴から東北日本の細石刃石器群の範疇で捉えられるとし、石器石材と技術との関係を検討した上で装備から長距離移動を伴った頁岩製石器群から、新たな瑪瑙・玉髄製石器群への転換が本遺跡において果たされたと理解した（絹川 1996）。この長距離移動に関しては、光石鳴巳による技術分析によっても湧別技法の移動生活での技術的合理性が述べられている（光石 1996）。稲田孝司は、こうした諸分析を統合し、湧別技法細石刃石器群における2者（珪質頁岩主体と在地石材主体）の存在を指摘した。両者は移動の目的を異にした集団によって残された集団で、前者は遊動集団によって残され、後者は在地化することを目的とした「植民」集団によって残された石器群であるとした。このうち、本石器群を残した集団は後者にあたり、東北・北陸地方日本海のある地域から珪質頁岩を携えてきた集団で、長距離移動の過程で頁岩が欠乏し、山陰地方にいたって黒曜石と瑪瑙・玉髄を代替石材として補充したという（稲田 1996）（第2図右）。

両石器群における行動論分析の結論は、対照的な内容となっている。すなわち、中ッ原遺跡では在地石材適応型石器群とされたのに対して、恩原遺跡では長距離移動型石器群と理解された。

一般に、削片系細石刃石器群では、本来的な石材と想定される珪質頁岩が細石刃や他器種生産に「連動」して利用される石器群（恩原2など）が、時間的に先行し、在地石材が細石刃と他器種とは別々に利用される石器群（中ッ原など）が石材適応の結果として解釈され、時間的に後出すると考えられるわけである（佐野 2002）。こうした相違を時間差とみるか（吉井 1991、佐藤 1992、白石 1993）否か（稲田 1996、加藤博 1996）は、それぞれの研究者の解釈によるが、ここで重要な点は、技術的構造性と石材利用とをリンクさせた研究が展開されている点である。こうした議論が展開される背景には、例えば両面調整石器のように非常に規格的な石器製作技術を有しているおり、多くの石器が1つの技



第2図 削片系細石刃石器群研究における居住形態の一例

術によって製作されるという削片系細石刃石器群の特徴がある。この技術的斉一性と石材利用の限定性という特徴が、石器群構造分析を適用にしている可能性がある。

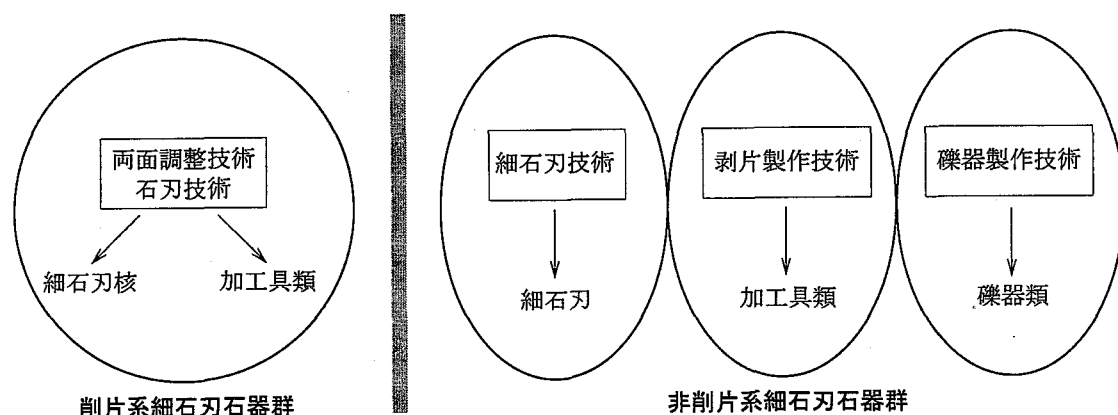
こうした石材と技術との関連を取り上げたものではなく、石器組成や細石刃の形態や使用痕の類似性から遺跡間関係や集団の移動・居住形態について追及したものもある。これには、エンドスクレイパーやグレイバーの微細な属性やその量的多寡から、これが遺跡間の生業活動の違いとして解釈し「常呂パターン」仮説を提唱した加藤晋平らの研究（加藤晋 1970）、細石刃幅の統計処理によって遺跡間関係を追及した藤本強の研究（藤本 1982）などがある。最近では、細石刃の形態の最大幅と最大厚に注目した佐野勝宏は、類似度が高いものを共時的グループとした。そして、その分布と石器製作工程から行動形態を推定した（佐野 2002）。鹿又喜隆は、本州の削片系細石刃石器群を、相対的に幅広で長い細石刃を保有する石器群「角二山グループ」と、幅狭で短い細石刃を保有する石器群「荒屋グループ」とに分け、これらが石器組成や二次加工の点で明瞭な差異を持つことから、この違いを移動性や生業活動の相違と判断した。鹿又は、使用痕分析も含めてこうした相違を想定しており（鹿又 2007）、先の佐野の研究（佐野 2002）と含めて、細石刃製作技術の類似だけでなく主要利器と想定される細石刃を分析の核に据えることで、新たな研究方法として評価されよう。

方法としては、石材分析と技術分析が核になっているが、最近では、細石刃の形態や使用痕に着目した研究が蓄積されている。

2. 非削片系細石刃石器群における行動論研究

削片系細石刃石器群の研究に対して、非削片系細石刃石器群では、個々の石器が個別に生産されることが多いため各々の石器を関連付けて考えることが難しく、石器群構造分析の適用が難しい場合がある（野口 2003）。こうした技術的特徴ゆえに、当該石器群における石器群構造論分析が、削片系細石刃石器群に比べて少ないものと考えられる。ただし、近年、資料の豊富な南関東地方を中心として、当該石器群においても行動論的な研究が徐々に増えつつある。

南関東の細石刃石器群を対象とした行動論的な研究では、仲田大人の研究（仲田 2003）、大谷薫の研究（大谷 2006）、九州では小畑弘己の研究（小畑 2002）がある。仲田は、相模野台地における細石刃石器群に見られる技術系列を3つ（構成1：細石刃製作系列、構成2：一般剥片剥離系列、構成3：礫器状石核系列）に区分し、これらの系列の組み合わせから5つの類型に分け、これらが居住形態を示すと解釈した。時期的にL1H層段階では、遺跡近傍石材によって、大量の石器製作が行われる核集落と小規模な分散居住遺跡とがあり、両者で等質的な細石刃製作が行われる。しかし、BB0層段階に



第3図 日本列島における細石刃石器群の2つの構造

なると、どの技術系列においても遺跡内での段階別消費がトレースされないため、これを分散居住の活発化と石器採取のネットワーク化への変化と解釈した（仲田 2003）。一方、大谷は、千葉県十余三稲荷峰遺跡の接合資料分析を基礎に、接合状況を7つのパターンに区分し、これらが南関東の稜柱形細石刃核出土遺跡にどのように見られるかを検討した。その結果、各遺跡で細石刃製作作業の内容が均質ではなく、特定の遺跡に集中または分散する偏在性が存在していることを指摘した（大谷 2006）。

両者の方法自体が若干異なっており、仲田は、石器群の技術系列の構成と石材構成から居住形態を検討したのに対して、大谷は細石刃製作工程の区切りからこれを検討している。興味深いのは、ともに各遺跡において石器製作作業工程が決して一様でないことを明らかにしている点である。

九州においては、小畑弘己の吉武高木遺跡の分析が挙げられよう（小畑 2000）。小畑の分析は、母岩別資料分析を基礎として遺跡の形成過程や母岩ごとの技術的関連性について検討を加えたものである。指摘された事柄は多岐に及ぶが、居住活動に関しては、石器群中に「orphan」と「ghost」が多いことから、石器群が短期居住の痕跡であることを明らかにした。

一方、細石刃製作技術ではなく、細石刃の使用痕のあり方の遺跡間関係を明らかにしたのは米田寛である（米田 2002）。米田は、多摩欄坂遺跡と横田遺跡出土の細石刃の使用痕とその分布を検討することによって、ベースキャンプ的機能を持つ遺跡（Ⅰ類）とレジデンシャル・キャンプ（Ⅱ類）という遺跡の機能差を見出した。そしてこのⅠ類遺跡の累積性とⅡ類遺跡の1回性という性格から「Ⅰ類→Ⅱ類→Ⅰ類」という循環的活動形態を予測した（米田 2002）。米田は、特に細石刃の機能を検討対象に据えることで、細石刃の機能と遺跡間の関係性を明らかにしようとした。

削片系細石刃石器群の研究状況に比べれば、まだまだ研究事例が地域限定的で単発的であるものの、細石刃製作作業工程の分類や使用痕分析を軸とする遺跡間関係の追及が進めてられており、より具体的な集団関係、移動・居住形態に迫る研究が増えつつある。

3. 小結

削片系、非削片系の研究を対比的に見てきたが、ともに細石刃製作工程の分類を軸とした研究が主体であるといえる。このうち前者の研究では、石材と技術の両側面からの研究が多いが、後者の研究では、石材分析と技術分析との結びつきが弱い。これは、非削片系細石刃石器群に見られる石材利用の多様性があるためと考えられるが、裏を返せば、削片系以上に集団の細やかな移動・居住形態に言及できる可能性があるということである。この点を考慮すれば、出来る限り、石材分析と技術分析を結びつけた研究が行われるべきと言えよう。

旧石器時代一般の議論と比較して、細石刃石器群研究において注目される研究方法は、使用痕分析である。従来、機能推定にとどまりがちであった使用痕分析を一步進めて、行動復元の素材へと昇華させた点は、今後の使用痕分析の取るべき一つの方向性を示している。また、細石刃核主体の細石刃製作技術の分析だけでなく、細石刃や製作剥片類も分析の俎上に上げられるようになっている。特に細石刃核という形態変異の顕著な石器ではなく、細石刃を取り上げて、これらの数量的分析や加工の状況から集団関係を追及する研究は、やはり今後の研究に参照していくべき方法だと考えられる。

第3節 方法論的課題と今後の展望

1. 研究史にみる方法論的課題

旧石器時代における行動論研究の一般的動向と九州における行動論研究を比較すると、以下のよう

な課題が挙げられるだろう。

①個別別資料分析による遺跡分析の必要性。

②①の分析を通した石材ごと作業工程の吟味と遺跡間接続の検討の必要性。

③石材分析の厳密性（理化学的分析の必要性）

また、旧石器時代の行動論研究と細石刃石器群を対象とした行動論研究とを比較すると、以下の問題点が指摘される。

④非削片系細石刃石器群の研究において石材分析と技術分析との結合。

⑤細石刃核だけでなく、その他の石器（細石刃や加工具類）を検討対象に含む必要性。

⑥石器製作技術の分析だけでなく使用痕分析を取り込んだ行動論研究の必要性。

①、②の分析に関しては、1石器群だけの分析でも非常に時間を有する作業であるため、全対象遺跡に対してこの手法を適用できるわけでない。まずは石材分類を軸に分析を試みる。③に関しては、残念ながら、本論で対象とする九州地域では、石材研究の基礎となる黒曜石の蛍光X線分析が進んでおらず、先述のように旧石器時代研究において、詳細な石材研究は一部地域で行われているにすぎない。そこで、本論では、細石刃石器群に利用される黒曜石に関する蛍光X線分析を行った。細石刃石器群では、黒曜石が大量に消費される特徴があり、この消費動向を精査することは旧石器時代の集団の移動・居住に関する議論を行う際、非常に有益な材料となる。

④～⑥の方法論的妥当性については上述のとおりであり、本論で適用していく。

2. 今後の展望と本論の目的

非削片系細石刃石器群の研究においても決して行動論研究が行われていないわけではなく、遺跡間の関係性などの議論が盛んに論じられている。しかし、分析が南関東に絞られており、その他の地域では単発的な議論であることは否定できない。削片系細石刃石器群の研究において、技術拡散や他石器群との関連性が論じられている背景には、技術分析と石材消費分析がリンクした研究が行われていることが挙げられ、この点が非削片系細石刃石器群の研究と決定的な差となっている。つまり、非削片系細石刃石器群の行動論研究において、何が明らかにしたいかという視点が不透明なのである。

本論では、非削片系細石刃石器群である九州の細石刃石器群を対象として、石器群構造論分析から該期の集団の移動・居住形態を明らかにする。九州において、細石刃石器群は考古学的に見て後期旧石器時代終末期から縄文時代草創期前半に盛行する。この時期は、地質学的に見ても更新世末という環境変動の著しい時期にあたる。当該時期の石器群を分析し、資源開発や居住形態を明らかにすることは、移行期における集団の生活実態把握のために必要不可欠である。

第4節 対象時期と地域

1. 対象時期

本論で対象とする時期は、地質学的時期区分によれば更新世末、考古学的時期区分によれば後期旧石器時代終末期から縄文時代草創期前半にあたる。最近の発掘調査成果によれば、放射性炭素年代（較正年代）でおよそ 19,000 年前～15,000 年前の間に該当する。日本列島では、当該期に細石刃石器群が盛行しており、九州もこの例外ではない。本論ではこの時期を細石刃期と呼ぶ。従来、細石器文化、細石刃文化と呼ばれてきたが、これらが、列島内に文化階梯として認められるような統一の実体として存在していない可能性が高いことから（佐藤 2003）、ここでは「文化」という用語は使用しない。

2. 対象地域と地域区分

(1) 対象地域

対象として主に九州内に石器群を利用するが、先述のように、九州という地理的範囲だけが当該期の集団にとっての居住領域とは考えがたい。実際に、西北九州産の黒曜石が現在の山口県域にまで及んでいることから（藤野 2000）、そうした集団の移動があったという傍証になろう。しかし、集団の移動生活を明らかにするために最も重要な素材となる石器石材の分布状況は、九州内にとどまることが多い。よって、九州内の石器群を対象とすることとし、必要に応じて、九州周辺の遺跡を取り上げることにする。

(2) 地域区分

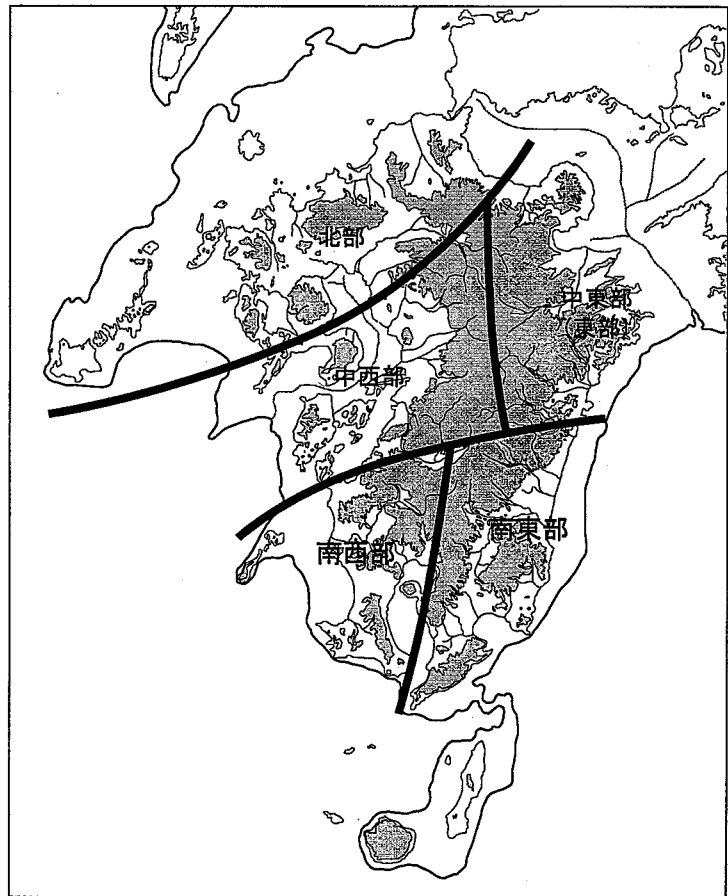
地域区分に関しては、地形区分（町田ほか編 2001）を参照して、九州を大きく北部九州、中部九州、南部九州の3つに分ける（第4図）。この地形区分は、火山フロントと中央構造線の続きと考えられる横連れの断層（臼杵 - 八代構造線）に特徴づけられるもので、地質的に見て、この臼杵 - 八代構造線を境に南側が南部九州、北側南部の火山や断層で特徴付けられる地帯が中部九州、その北側が北部九州と呼ばれている（町田ほか 2001）。この区分は、本来的には考古学的な地域区分とは相容れないかもしれないが、以下に挙げる石材資源の状況と関連性が強い。特に北部・中部九州と南部九州との区分は、後述する考古学的な事象とも多いに関連するもので重要である。したがって、ここでは、この3つの上位概念とし、その下位概念としてそれらを東西に分けることにする。しかしながら、この下位概念に関しては、地質的区分でははっきりと線引きできるものではなく、きわめて曖昧なものにならざるを得ない。よって、本論では、便宜的におおよそ中間付近で東西の区分を行うが、これに関しては、地域細分を行う際に改めて言及したい。なお、細やかな地域の名称は、町田ほか編（2001）にならうこととする。

3. 石材資源

石材は、旧石器時代における道具類の重要な資源の1つである。その中でも黒曜石は、本論で対象となる九州の後期旧石器時代の細石刃期には、最も利用頻度の高い石材である。その黒曜石を中心として、その他細石刃期に利用される石材の分布について整理しておく。

(1) 黒曜石（第5図左）

九州の黒曜石に関しては、これまでに幾人かの研究者によって産状などその詳細がまとめられているので（坂田 1981、橘 2002、馬籠 2002、岡本 2003 など）、ここでは触れない。問題となる



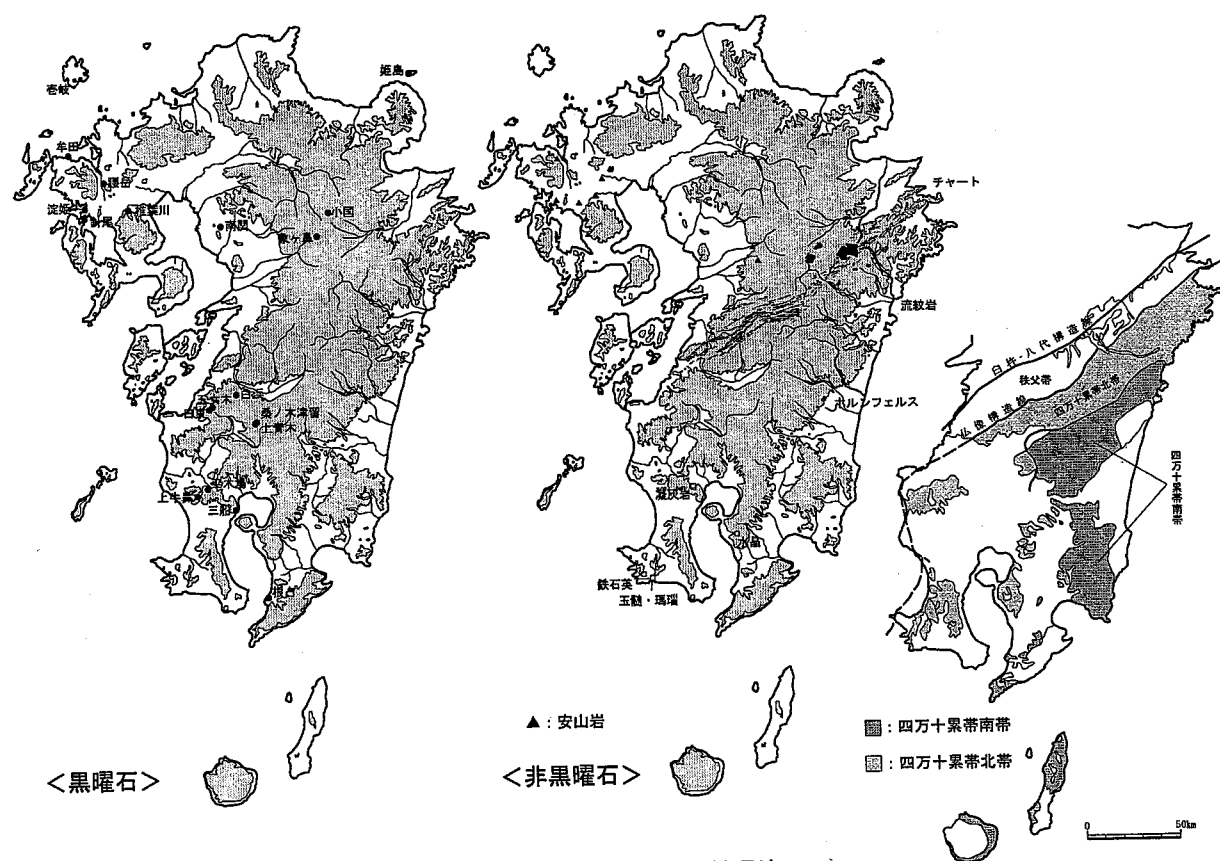
第4図 本論での地域区分

のは、九州に所在する黒曜石原産地がどの程度認識され、これらの区分が可能であるかという点であろう。

現在、九州では30ヶ所程度の原産地が知られる(橋 2002)。ただ、この数値は黒曜石が採取される地点の数であり、厳密な意味での原産地ではないため、この数値にあまり意味はない。現状では、こうした黒曜石原産地を大きく西北九州、壱岐、阿蘇周辺、姫島、南九州の鹿児島県北部、薩摩半島北部の6つの地域に分けることが可能である。このうち、本論の対象となる細石刃期において、利用されるのは姫島と利用実態の詳細の不明な壱岐地域を除く4地域の原産地である。

阿蘇周辺地域で産出する黒曜石は細石刃期の利用は、周辺地域(20 km圏内)に限られる。阿蘇周辺の黒曜石は、阿蘇火砕流堆積物中に含まれるものが多い(岡本 2003、2007)。すなわち、阿蘇4火砕流堆積物中に含まれ、灰色～緑色を呈し良質で、親指大の円礫である阿蘇4系黒曜石、阿蘇3火砕流堆積物中に含まれ、石炭のような黒色を呈する阿蘇3系黒曜石、阿蘇2火砕流堆積物の基底部にあり、黒色を呈し風化すると石炭のような質感になる阿蘇象ヶ鼻産ガラス質溶結凝灰岩がある。山甲川流紋岩中に含まれる小国産黒曜石は、黒色で透明感があり、約2～3mm前後の不純物を多く含むものである。阿蘇4系黒曜石以外の細石刃期における利用は稀である。

重要なのは、西北九州地域の諸原産地と南九州の原産地群である。前者のうち牟田、腰岳、針尾産黒曜石は、おそらく石質の良さから北部・中部九州を中心として全九州的に用いられる傾向がある。このうち、牟田産と腰岳産黒曜石は、漆黒色を呈し、ほとんど不純物を含まないという点でよく類似する。科学的分析上では元素組成が同じであり(藁科 2005)、分離は困難である。ただし、素材の礫形状が異なる。すなわち、牟田産黒曜石は円礫であり、腰岳産黒曜石は角礫である。しかし、礫面が



第5図 九州における石材環境

の黒曜石はやや黒色が弱いものから青灰色～灰色を呈することで、上の2つとは異なる特徴をもつ。ただ、針尾地域には数地点の黒曜石採取可能地点が10数箇所存在しており（米倉1990、橘2002）、1原産地の中でも肉眼観察において特徴の異なる原石が存在している。灰色を呈する黒曜石は、佐賀県嬉野市の椎葉川流紋岩に含まれる黒曜石もその1つであり、数地点で採集されるものであることに注意する必要がある。腰岳や牟田を含めた西北九州産黒曜石の科学的分析値は、ある程度分析値が分かれるものの、その領域が重なるものが多いという点を考慮しておく必要がある（橘2002）。肉眼観察による分離が可能なものもある反面で、肉眼観察では分離できなくても異なる原産地のものである可能性、もしくは肉眼分類が可能であっても、科学的分析値上では分離できないという様々な問題をもつ。こうした問題点は、原石の礫面や不純物の入り方などから肉眼観察によって補われるべきだが、これらの黒曜石のうち一部のものは、単一原産地として推定することが困難であることを示している（橘2002）。

南九州地域の黒曜石には、人頭大から拳大程度の大きさだが、不純物を含むものが多く、繊細な石器製作には向かないものと、良質でほとんど不純物は含まれないが、親指大程度の大きさでしかないものの2つに分かれる。前者には、日東産、三船産、上牛鼻産が該当する。三船産黒曜石は、不純物が大量に含まれるものの、細石刃製作に利用される。上牛鼻産黒曜石は、漆黒で当面感がなく、他の2者よりも少ないものの不純物を含む。細石刃製作に頻繁に用いられ、薩摩半島北部地域の石器群には、しばしば本石材単一の石器群が認められる。一方、日東産黒曜石は漆黒でガラス質は強いものの不純物を大量に含む。細石刃製作にはほとんど用いられず、スクレイパーなどの比較的大型の石器に利用される。これらの黒曜石は、原産地周辺地域における利用が顕著であるが、そこから遠ざかると利用率が一気に減少する傾向がある。後者には桑ノ木津留と上青木産黒曜石が該当する。良質で不純物をほとんど含まないために、細石刃製作には頻繁に用いられる。南九州産石材の中では、細石刃期に最も広域に広がる石材であり、北は阿蘇周辺地域まで、南は薩摩半島南部まで分布する。

南九州地域においては、この他に産地不明の黒曜石が存在している。南東部九州の石器群に散見される内屋敷UT遺物群など産地未詳のものが認識されている。この黒曜石は、その分布範囲が霧島の南部地域一体に広がっているために、「霧島系」などと呼ばれているが、残念なことに明確な産地は突き止められていない。この黒曜石の形態的には小角礫が多く、黒色で透明感が強い。そのため一見すると、腰岳産黒曜石と区別するのが困難な場合がある。これまでの肉眼による石材鑑定で、腰岳産黒曜石と誤認されているものも数多い。蛍光X線分析結果によれば、腰岳との分離が可能であり、肉眼においても礫面の状況、質感、不純物の入り方等である程度の分類は可能である。

（2）非黒曜石（第5図中、右）

非黒曜石に関しては、ほとんど研究が進んでいないのが現状である。北部九州に関しては、黒曜石が大量に利用されているがために、その他の石材については黒曜石ほど理解が進んでいない。北部九州において、後期旧石器時代に使用される主な石材は安山岩、頁岩などがある。安山岩では、多久市の鬼ノ鼻山一帯で採取される無斑晶質安山岩がよく知られているが、この他にも針尾瀬戸、百津、竜頭泉、北松浦玄武岩類の下部中、時津、柏岳、英彦山にも類似した安山岩が存在する（長岡2004）。これらは、外見上の類似から判別は困難だが、蛍光X線分析による分類は可能なようである。残念ながら、分析例が少ないため今後の分析例の蓄積に期待したい。細石刃期には、安山岩は細石刃ではなく、スクレイパーなど加工具類に利用されることが多い。ただし、福岡県吉武高木遺跡や備讃瀬戸地域においては、安山岩利用の細石刃・細石刃核が出土しており、全く使用されないわけではない。この他には頁岩が細石刃に利用される例がある（福岡県金山遺跡）。

中部九州も北部九州と同様に、非黒曜石の理解があまり進んでいない。ただ、安山岩に関しては、最近阿蘇外輪山周辺で採取されるものに関して、蛍光X線分析が実施され、西北九州に分布するものと科学組成的に分離可能であることが示された（芝・小畑編 2007）。これらの石材の細石刃への利用は確認されていないものの、加工具類への利用が認められている。中部九州頭部では、非黒曜石石材である流紋岩による細石刃製作が顕著である。流紋岩は祖母・傾山山系の本谷山から傾山周辺に発達し、そこに端を発する北側の大野川の中流域から下流域、および南側の五ヶ瀬川流域の河床で転礫として認められる（志賀 2005、松田 2005）。特に細石刃期には消費量が多く、船野型を中心とする細石刃製作と、それ以外にもスクレイパーなどが製作される。この他に臼杵 - 八代構造線で認められるチャートや、一部地域では水晶などが利用される。

南部九州では、多種多様な石材が認められる。鹿児島県の非黒曜石石材をまとめた宮田栄二によると、堆積岩であるチャート、頁岩の他に、珪酸鉱物である水晶や鉄石英、玉髄・瑪瑙、蛋白石などきわめて多岐にわたる石材が利用される。このうち、蛋白石以外は細石刃製作に利用されていることから細石刃期の鹿児島県域における複雑な石材利用状況が浮かび上がる（宮田 1994、2002）。宮崎県域において、先に触れた流紋岩とともによく利用される石材がホルンフェルスである。宮崎県のおよそ中央部を流れる小丸川上流部の花崗岩帯周辺の変成帯に産出するホルンフェルスは、その中流域に多量に分布している。この他に四万十累層群中（第5図右）や四万十累層群起源の河床礫で採取される頁岩、珪質頁岩、砂岩の利用も顕著である（松田 2003、2005）。これらの石材は、大型で良質であることから細石刃製作の他、加工具類にもよく利用される。砂岩の利用は本地域に特徴的で、「畦原型」細石刃核とよく結びついている。

第5節 用語の整理と研究の方法

1. 各用語の整理

本論で最も重要な概念である「領域」と「集団」について整理しておく。

近藤義郎は、フランス・パンスヴァン遺跡やロシア・ウシュキ遺跡、マリタ遺跡などの住居址を参考にしつつ、これらが2、3軒ないし、4、5軒で併存している状況を根拠に、日本における石器集中部（ブロック）が2～4群をなすことから、これらを住居とみなす。そして、これらが一団を構成し、居住や移動、生産活動において強固な一体的結合を示す血縁的集団と推測し、これらを「単位集団」と呼ぶ。また、こうした遺跡がある河川流域など特定の地帯に遺跡群を形成することから、相互に何らかの関係性を持つ「集団群」が存在していたとする（近藤 1976）。「単位集団」の考え方はその後、大きく変わっていない。

しかし、「集団群」の考え方は再考を要する。先述のように旧石器時代人は遊動生活を繰り返していたとすれば、ある特定の地帯を占有する「集団群」がいたかどうか疑わしい。彼らが移動範囲とする空間は、河川単位、台地単位で完結しないことは、研究史をふまれば明らかである。したがって、ここでは「遺跡群」＝「集団群」とはしない。しかし、ある程度の地域の中で、石器製作技術や石材利用の共通性が認められる場合がある。この空間を、石器製作に対して共通認識をもった集団が占有していた地域ということができるだろう。とすれば、この地域内の集団は相互に関係し合いながら居住活動を送っていたと推測できる。また、旧石器時代人は、遊動生活を送りつつ、資源（石材・食料など）に合わせて季節的移動を繰り返していたと考えられ、おそらく年間に移動した範囲が、彼らの生活領域であったと考えられる。したがって、本論では、こうした石器製作技術や石材等の資源を共

有している人々を「集団」（「単位集団」とは異なる）とし、この集団によって1年間に居住・移動生活が営まれた空間を「領域」とする⁽¹⁾。

ここで参考になるのが、国武の「生業領域」と「移動領域」の考え方である（国武 2005）。先述のように国武は、前者を一連の石材消費戦略が発揮された地理的範囲、後者を訪問した石材産地の組み合わせから復元される移動範囲とした。領域を分けて考えることは重要であると思うが、この概念を使用する場合、石器製作の起点と終点が分かっている必要がある。残念ながら、筆者が対象とする石器群ではこうした状況がいまひとつ明らかになっていない。筆者の言う「領域」は、ほぼ国武の「移動領域」となるが、分析の中で、概念定義が必要である場合があるものと思われる。必要に応じて概念定義を行いつつ議論を進めることとしたい。

2. 研究の方法

本論では、更新世末細石刃期のより具体的な人類行動の復元を行うことを目的とする。

第2章では、この前段階の作業として、九州細石刃石器群の編年を行う。これは、九州の細石刃石器群を悉皆的に集成し、これまでの細石刃核形態を中心とする編年研究でなく、接合資料や細石刃核以外の製作関連遺物の検討から石器群の技術的変化について理解を深めるものである。

第3章では、細石刃期の集団の移動・居住形態、そして集団関係に関して詳しく検討する。その際、用いる方法は石器群構造分析である。すなわち石器の遺跡内への搬入から遺跡外への搬出にいたる一連の過程を明らかにする方法の適用が必要とされる。具体的には以下のような方法で分析を行う。

①個別遺跡（石器群）の分析

石器搬入：蛍光X線分析に裏付けられた石材産地同定と石材の個体別資料化。

石器製作：接合資料に基づく石器製作技法の復元。

石器使用：使用痕分析によって微細剥離痕、線状痕の検出。

石器搬出：個体別資料化を基礎として、欠落部分の検討。

②周辺遺跡の石器製作技法や石材利用を検討による遺跡間関係の検討。

これを、第2章で明らかにされた細石刃石器群編年を基礎として、時間的変化を明らかにし、また、地形区分にしたがった地域区分から地域ごとの石器石材利用の特徴や技術をまとめ、集団の行動・居住形態や集団関係を明らかにする。

第4章では、第3章で明らかにされた行動パターンやその時空間的な変化について、当該期の環境や石器群における石器組成の検討からその背景について検討を行う。そして第5章において、これらをまとめて結論としたい。

第2章 九州における細石刃石器群の編年

第1節 九州における細石刃石器群編年研究史

1. 研究史

九州における細石刃石器群編年に関して、最初に体系的に言及したのは麻生優である。麻生は、福井洞穴における細石刃核形態の層位的事例「円錐形→船底形」を根拠として、その変遷を「半円錐形→円錐形→半船底形→船底形」と捉えた（麻生 1965）。しかし、その後、小林達雄の生産システムによる分類の提唱によって、細石刃核形態に依拠する研究の限界が示され（小林 1970）、林謙作の福井洞穴出土細石刃核の分析（林 1970a）、鈴木忠司の野岳遺跡の細石刃核の分析（鈴木 1971）によっても、1遺跡の中で「形態」にバリエーションがあることが示され、細石刃核の形態ではなく、細石刃製作技術による分類から細石刃石器群編年がなされるようになる。その後、橘昌信の船野型の技術的解明（橘 1973）、さらに南九州の石材環境に適応した畦原型や加治屋園型の提唱と、1970年代の後半には現在の細石刃石器群研究の基礎となる細石刃核型式が出揃うこととなる。

九州における現在の細石刃石器群編年研究の基軸をなすのは、それらの技術解明がなされた後の橘昌信（1973・1979）・木崎康弘（1981）・小畑弘己（1983）らの研究である。氏らの編年方法は、①細石刃核の観察に基づく製作技術の分類②層位的事例および共伴遺物による時期決定である。分類は3氏ともに若干の差異はあるが類似している。共通して、福井型が土器との共伴事例から終末段階に位置づけられているのに対して、最古段階の石器群には、先行石器群との共伴事例から船野型が、あるいは福井洞穴IV層資料が野岳・休場型（もしくはこれに類する型式）と認識されたことから野岳・休場型が置かれている。

福井洞穴IV層の細石刃核に関しては、その評価が後に大きく変化する。綿貫俊一（1992・1999）や栗島義明（1991・2000）らによって、当該細石刃核が、野岳・休場型とする先行研究から、船野型（岩土原型）とされたためである。氏らは、福井洞穴IV層や大分県上下田遺跡、市ノ久保遺跡などにおける船野型（岩土原型）と槍先形尖頭器や局部磨製石斧という神子柴石器群との共伴事例を根拠に、これらの船野型（岩土原型）を「神子柴文化」並行期に位置づけた。

そうした研究状況の中で、長崎県五島列島に位置する茶園遺跡においてV層とIV層とで異なる技術を有する細石刃石器群が出土し、さらにIV層から槍先形尖頭器や局部磨製石斧が出土した層位的事例が与えた影響は大きい（川道 1998）。この成果は、九州における細石刃石器群編年を考える上でたいへん重要な情報を提供し、V層の「茶園型」と「位牌塔型」を含む野岳・休場型主体の細石刃石器群は、技術的にも、15,750B.P.を示す¹⁴C年代によっても、九州細石刃石器群の最古段階として位置づけられた（川道 2002、杉原 2003）。

以上のように、細石刃石器群編年について、茶園遺跡の層位的事例から、「野岳・休場型」→「福井型」という変遷をたどることは間違いないだろう。しかしながら、九州各地に存在している石器群の関係がこれによって氷解したわけではない。石器群相互の関係性に関する問題は山積している。

これまでの編年研究の中で確実に明らかにされていることは、①「野岳・休場型」から「福井型」へと変遷し、「福井型」が土器と共伴関係をもつこと②細石刃石器群と同一平面上に槍先形尖頭器、局部磨製石器が存在していることである。九州内において、ある単一の細石刃核型式のみで構成される

石器群は少なく、むしろ複数型式で構成されることが多い。もちろん全く異なる時期の石器群の重複等によって石器群が形成された場合もあるが、例えば同一ブロックに同一石材が利用された異型式の細石刃核が存在する場合もある。そうした現象面を評価して、石器群間の関係性や変遷、あるいはその背景に焦点を当てる必要がある。最近の宮田栄二の型式内変遷という考え方（宮田 2004）や、松本茂の同一形態＝同一型式モデルと同一形態・多元発生モデルという2つのモデル設定（松本 2004）は、細石刃核型式の系統的変遷を示しており、従来の議論とはややニュアンスが異なる。しかしながら、これらの議論においても既存の細石刃核型式の遺跡内での構成が議論の根本をなしている。つまり、筆者がより重要と考えるのは、細石刃核型式を単に時間軸上に並べるのではなく、細石刃核型式に付加されている背景を探ることにある。

こうした問題を解決するには方法論的な転換を図る必要がある。残核である細石刃核の型式構成による編年方法は、1980年代から一貫している。確かにこの方法は、個々の細石刃核を仔細に分析すれば編年が可能であるという利点をもつ。しかし、この方法論的限界は、近年の接合資料や母岩別資料分析に裏打ちされた細石刃核の製作過程の解明によって示されつつある。吉武遺跡の報告における小畑の「吉武型細石刃製作技術」の提唱は、こうした限界性を端的に示したものである。これは、北海道細石刃石器群における接合資料を基礎にした木村英明のテクノコンプレックス概念（木村 1995）や寺崎康史の「技術型式」学的視点（寺崎 1999）を応用したものである（小畑 2002）。氏らの研究方法は、石器群中に認められる複数型式の共存関係や型式変化の意味をどのように考えるかという点において示唆に富む。接合資料や母岩別資料分析に基づく技術復元によって、表層的な違い（形態変化）に捉われない有意な型式分類が重要であり、かつそうした型式間の関連性の背景、すなわち集団関係に焦点が当てられるべきであろう。以下では問題点を整理し、本論の分析方法を示す。

2. 問題の所在と研究の方法

九州細石刃石器群の編年研究は以下の4つの段階に区分されよう。

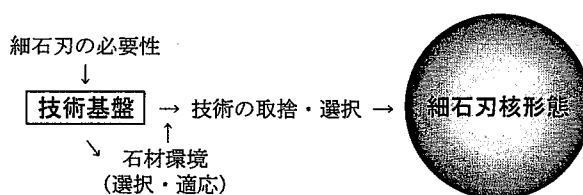
①石核形態による細石刃核の編年

②細石刃製作技術の詳細把握とその分類と型式の構成による編年

③上記の編年方法に細石刃核以外の石器群および土器との共伴関係を考慮した編年

④接合資料を基礎とした石器製作技術の復元と石器群総体の構造変化を捉える編年

④による研究が推し進められるべきであることは上述のとおりである。最近では、南九州において豊富な細石刃石器群資料が得られつつあるし、また中九州の亀石山遺跡（今田ほか 2003）・河原第3遺跡（芝・小畑編 2007）のなど新資料の成果が公表され、これまで曖昧であった細石刃製作技術も具体的に解明されつつある。しかし、④の方法を用いるには基礎分析が未だ少なく困難が伴う。したがって、既存の細石刃核型式も参照していく必要がある。九州の細石刃石器群は、多様な石材利用と細石刃核の残核形態から、表面的には非常に複雑な様相を呈しているように見える。現在の細石刃核型式が林立し、またこれらの型式の認識が各研究者によって微妙に異なっている状況は、このことを端的に示している（第1表）。そこで、筆者は九州の細石刃石器群を大きく4つに区分した。もちろん細分可能であるが、石材への技術的適応や細石刃剥離作業の経過に伴う残核形態の変化、また分類相互の関係を考慮した場合、石器



第6図 細石刃核形態と技術との関係

群の技術基盤の変化に対して、細分は意味をなさないと考えるためである（第6図）。おそらく石器技術は、素材の状況（大きさ、石質など）に応じて取捨選択されながら適用されたものと考えられる。

以下では、各石器群における細石刃生産の技術基盤に着目して、①まず九州における細石刃石器群を分類を行う。そして②各石器群の関係を遺跡における出土状況や石材消費状況で検証し、共伴遺物や¹⁴C年代を参照しつつ編年を行う。その際、型式変化の背景に考慮しつつ分析を進める。

第1表 九州における細石刃核型式の理解と変遷

麻生 (1965)	林 (1970)	鈴木 (1971)	橋 (1979)	木崎 (1981)	小畑 (1983)	小畑 (1987)	橋 (1990)	綿貫 (1992)	松浦 (1993)	川道 (1998)	宮田 (2004)	本論
円錐形			A							II		
			B									
		野岳・休場型	C	野岳型	矢出川型 休場型	B I		野岳型	野岳・休場型	I	野岳・休場型	2型
										III	位牌塔型	3型
										IV	茶園型	4型
半円錐												1型
				船野型	船野型	C	船野型	船野 I	船野型	I II III	船野型	1類
							上下田型	船野 II				2類
								岩土原型				3類
	西海 技法	I			A II	泉福寺型					泉福寺10層	
						門田型					福井型	
						福井型		福井型			門田型	
船底形 半船底形	II		福井型	泉福寺型	A I	石ヶ元型					福井型	
	III					稜柱状型					石ヶ元型	I群
	IV				A II	泉福寺型					福井型	S群
半円錐形					B II	宇久島型		岩土原型			宇久島型	
			畦原型	畦原型	D I						畦原型	F群
					D II						加治屋園型	

第2節 九州における細石刃石器群の分類

1. 九州における細石刃石器群の分類

九州における細石刃石器群分類において、技術基盤をなす技術を抽出すれば、上述のように大きく4つに分類される（第1表）。以下では、各群技術の詳細について先行研究を加味しながら明らかにするが、この中で、野岳・休場型細石刃核は定義が曖昧であり、定義について再検討を要する。よって、まずはこの細石刃核およびこれを含む石器群について、詳細な検討を行う。また、4つの技術基盤が存在しているものの、このうち2つが複合したような石器群や石材によって表面的に異なる（ように見える）ものなどがある。これらに関しては後に触れるが、別の枠組みが必要である。

なお、以下で石器群を指す場合は、「～型」を用いず、「～群」と記述する⁽²⁾。本文中で個々の細石刃核を指す場合には必要に応じて「～型細石刃核」を用いている。

(1) 野岳・休場型細石刃核を伴う石器群（N群）

a. 先行研究

「野岳・休場型」は、鈴木忠司によって提唱された（鈴木 1971）。鈴木は、それまで円錐形細石刃核とされていた一群がその形態の呼称とそれに伴う製作手法上の限定との混乱が見られるという問題意識から、それまで円錐形・半円錐形細石刃核グループに含められていた野岳遺跡の細石刃核を分

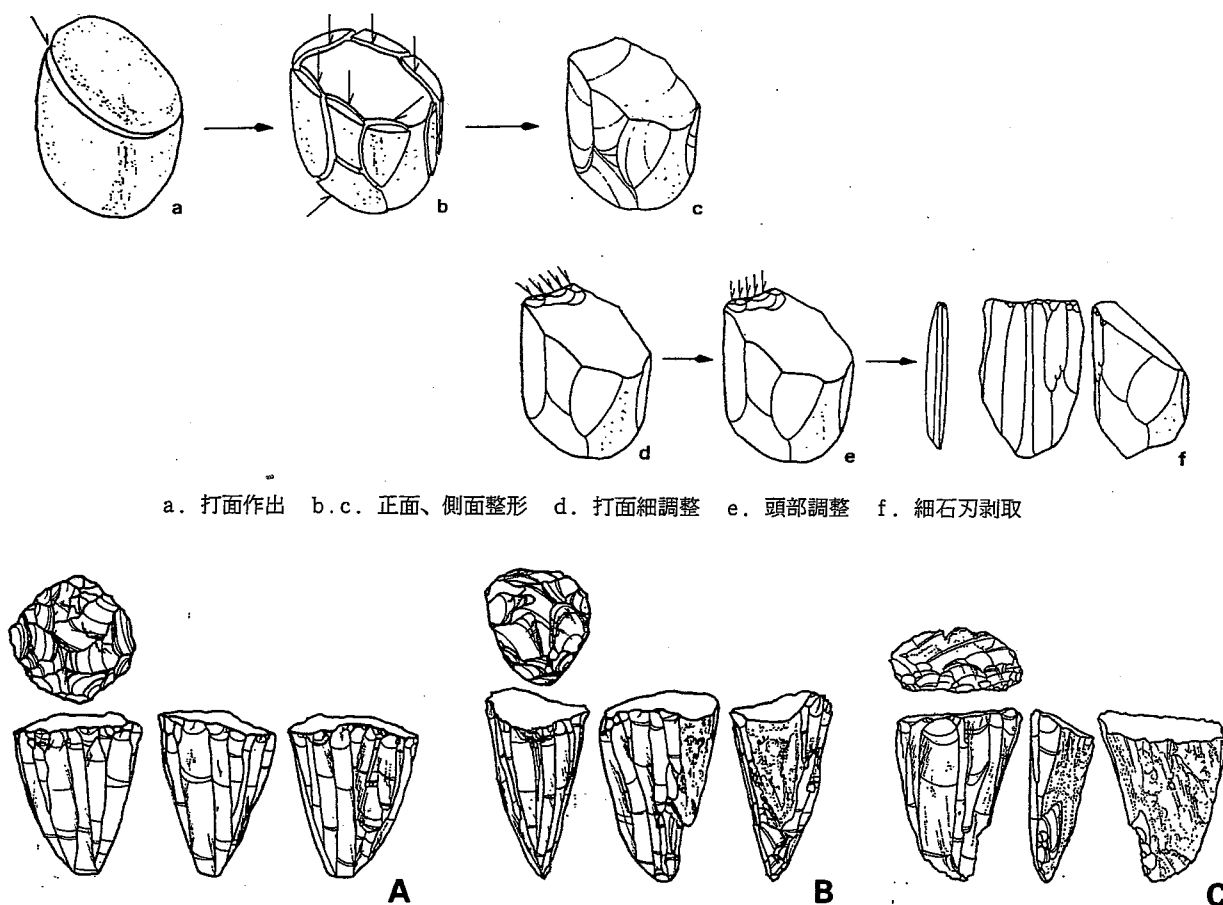
析することによって技術的考察を行った。鈴木は、野岳遺跡の細石刃核をA～C類に分類し、このなかで特にC類が最も普遍的なものであることを示した。鈴木の想定する細石刃核から細石刃が作り出されるまでの過程は、以下のように想定されている（第7図）。

第1段階：角礫または円礫に水平、垂直方向から打撃を加え、大まかな剥離加工をなして素材の体形を角柱状に整形する。この際の作業は傾斜する打面と、ほぼ平行する二面からなる側面を作り出すのが主目的である。

第2段階：基本的な形が整えられた石核に、細石刃の剥離に必要な細やかな調整剥離（打面細調整剥離、頭部調整剥離）が補われ、細石刃の剥取が開始される。この段階がいくども繰り返されて、多量の細石刃が生み出される。この間に便宜打面の再生がなされる。

鈴木は、AからCの分類を形態的バリエーションと見なし、松浦五輪美も同様の見方を示す（松浦1993）。これに対して、この中の扁平形細石刃核を1つのタイプとして認め、これをより古相に位置づけようとする議論がある。下川達弥は、位牌塔遺跡の扁平形細石刃核に注目し、「位牌塔型」を設定した。そして、萩原博文との論文の中で、この細石刃核を野岳・休場型とは異なる一群と捉える考えを示した（下川・萩原1983、1997、萩原1995）。同様に、川道寛は、茶園遺跡の細石刃石器群の分析から扁平形を呈し、背面に礫面を残すものを「茶園型」、同じく扁平形を呈し、背面に横打の調整が入るものを「位牌塔型」とし、野岳・休場型細石刃核とは分離させて理解する（川道1998、2002、2005）。そして、こうした扁平形細石刃核が旧石器時代のメルクマールになると考えている。

結論から言えば、筆者の考えは鈴木に近いが、野岳・休場型の定義自体が広く、後述する型式以外



第7図 鈴木忠司による野岳・休場型誕生模式図およびその分類

の細石刃核は全て本型式に当てはめられることが多いことも事実である。鈴木 of 提唱から 35 年以上が経過し、これを発掘資料から再検討する必要がある。

編年的に見て、野岳・休場型細石刃核単純出土段階を古相に位置づけ、その後、複数型式が共存し、最終的には土器を伴いながら福井型主体の石器群に収斂されるというのが大方の見方である。野岳・休場型細石刃核を主体的に組成する石器群と複数型式を組成する石器群とを分けて論を進める。

b. 資料の分析

<野岳・休場型単純組成石器群>

亀石山遺跡（大分県日田市）（第 8～10 図） 本石器群における出土石器総数は 2 万点に及び、その石器のほとんどが細石刃石器群に属する。石器群は、出土量の多寡や規模の大小はあるものの、視覚的に見て複数のブロックに分けられ、これらのほとんどが腰岳系黒曜石製石器のブロックである。

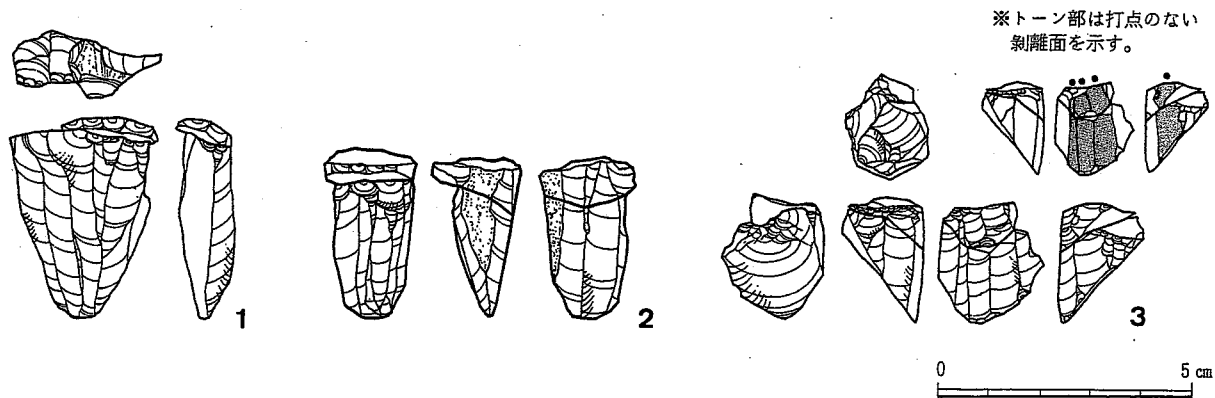
出土石器総数 2 万点のうち細石刃が 12210 点とその 6 割を占める。細石刃関連遺物が非常に多く、中でも打面再生や打面調整に関わる剥片が多いことが本石器群の特徴である。報告者によれば、打面再生剥片と打面調整剥片とをあわせると 184 点に達するという（今田ほか 2003）。細石刃製作技術の検討に際して注目したいのは、細石刃核と打面再生剥片の接合資料、打面再生剥片同士の接合資料である。両者ともに打面再生を繰り返すという製作技術を端的に示すものであるが、とくに後者は本石器群の製作技術を考える上で重要な意味を持つ。

第 8 図 1・2 は打面再生剥片と細石刃核との接合資料である。こうした資料が他にも存在しており、打面再生が頻繁に行われていたことがわかる。3 は打面再生剥片同士の接合資料を示したものである。上下の打面再生剥片合わせて 9 条の細石刃剥離痕うち、両方ともに打点のないものが 4 条存在している。このことは、これらを剥ぎ取る前にも打面再生が行われていたことを直接的に示す。さらに、細石刃の接合資料には 6 cm におよぶ細石刃が見られ、4 cm を超えるものも一定量存在している（芝 2005）。これに対して、出土した細石刃核の作業面の長さは 3 cm 前後が主であり、5 cm 以上の細石刃に対応するような細石刃核は 1 点もない。こうした大量の打面再生剥片や長さ 6 cm の細石刃の存在と、それに対する細石刃核の小ささは、細石刃核が遺跡に搬入された段階から廃棄にいたるまでに、細石刃核が著しく形態変化を繰り返していることを示している。

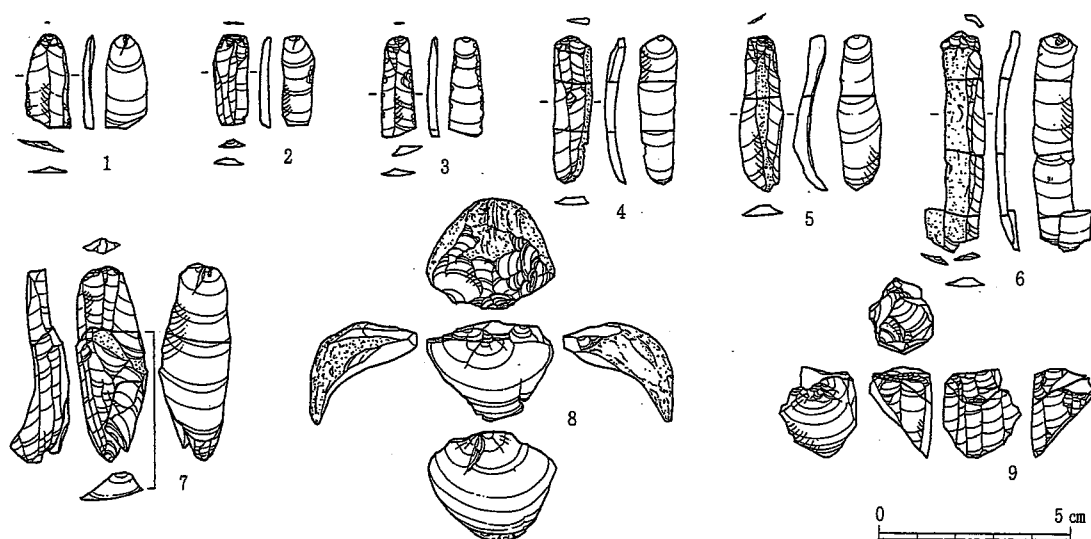
打面再生による細石刃製作の継続に関して、打面再生剥片の長さと幅の関係をグラフ化すると、多少のぶれは見られるものの、相似的に長幅比 1 : 1 であり、最大 3 cm を超えるものから 5 mm 前後のものまで存在している。これは細石刃核の相似縮小を示すものだろう。つまり、3 cm を超える打面再生剥片（第 10 図 1）の大部分が礫面に覆われていることは、この剥片が細石刃製作の初期段階で剥離されたものであり、第 10 図 3 は、細石刃製作の最終段階に剥離されたものとみることができる。こうした打面再生剥片の多さは打面形成およびその維持が重要であったことを示唆する。

河原第 3 遺跡（熊本県阿蘇郡西原村）（第 11・12 図） 本遺跡における調査面積は約 90 m² と狭いながらも、3 つの細石刃石器群ブロックの存在が確認されている。そのうち 1 つの石器群ブロック（石器集中 1）がほぼ完掘されているおり、そのブロックの規模は約 10 m × 6～7 m と推定される（芝・小畑編 2007）。本石器群の石器組成の特徴は、亀石山遺跡と同様に石器総数 2335 点のうち細石刃が 1221 点とその半数以上を占め、その他のほとんどの石器が細石刃製作関連遺物である。

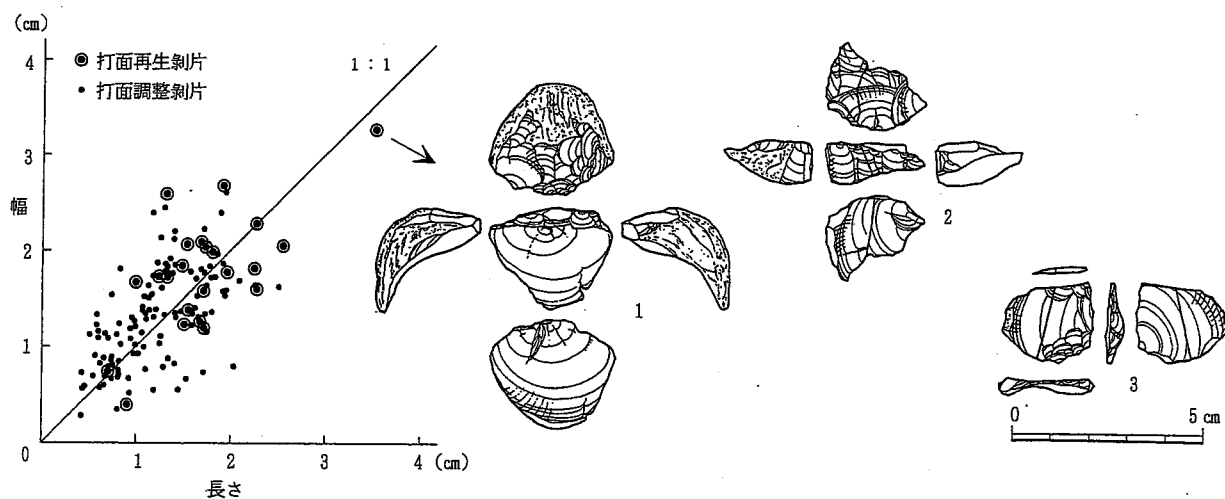
細石刃製作関連遺物では、やはり亀石山遺跡と同様に打面再生剥片や作業面再生剥片が多い。すでに粗割り段階を経た石核から作業を行うものが多いため、細石刃の素材獲得段階からの細石刃製作技術の復元は困難である。しかし、出土細石刃核を観察すると、打面と作業面以外の面には礫面を多く残すことから、細石刃製作に関わる資料のほとんどは、打面作成に伴うものか作業面作成に伴うもの



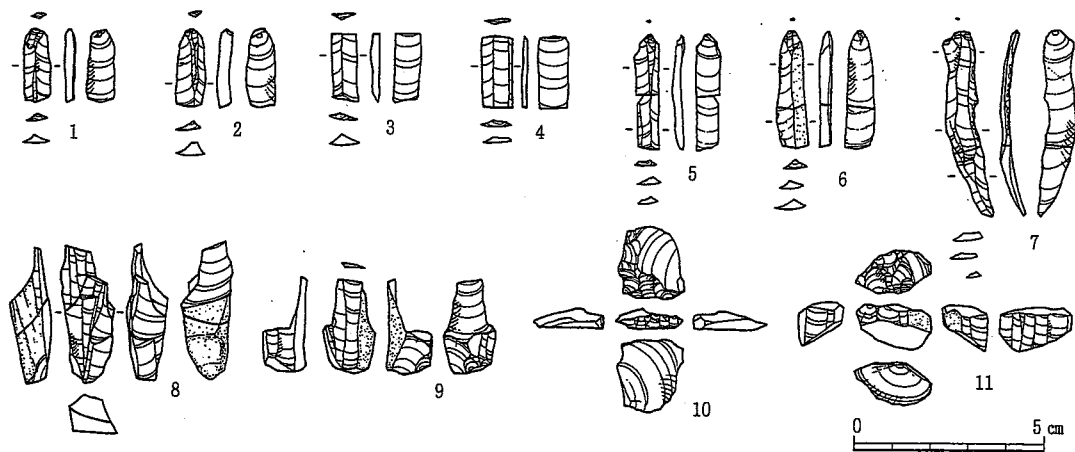
第8図 亀石山遺跡に認められる打面再生関連接合資料



第9図 亀石山遺跡における細石刃製作関連遺物

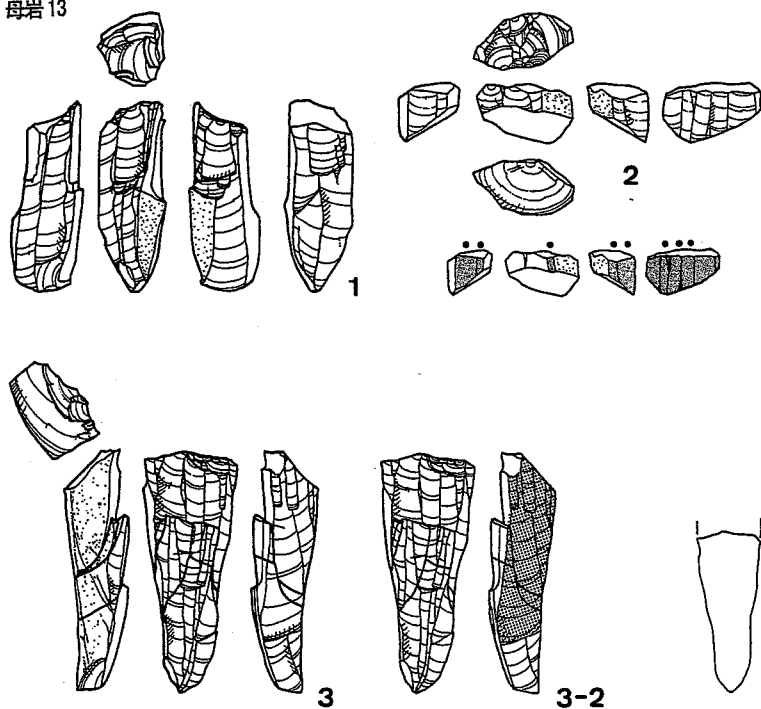


第10図 亀石山遺跡における打面再生剥片のあり方

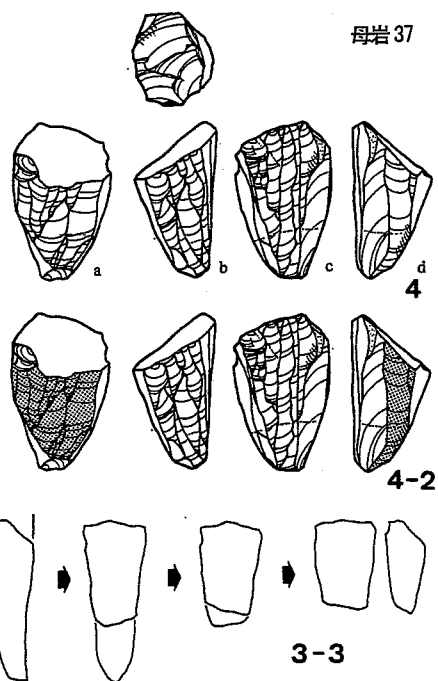


第11図 河原第3遺跡における細石刃製作関連遺物

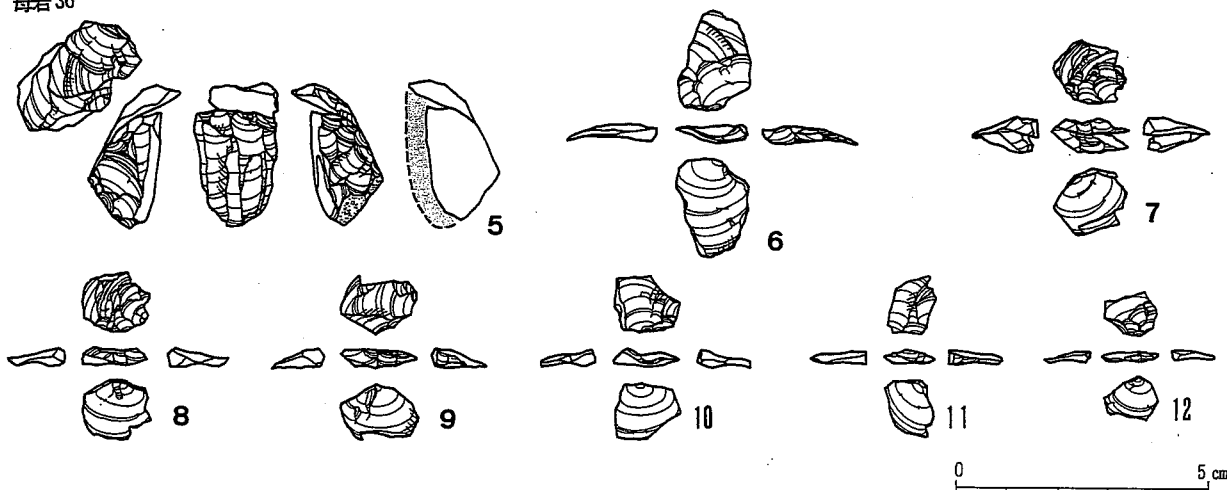
母岩 13



母岩 37



母岩 36



第12図 河原第3遺跡における打面再生関連資料

と見られる。その後の細石刃剥離作業段階に注目すると、細石刃剥離作業面の設定方法と細石刃核の再生方法によって、大きく3つに分類が可能である。

- ①器体を回転させながら剥離作業を行い、打面再生によって作業を続行させるもの。
- ②器体を固定し、細石刃剥離作業を進行させ、作業面再生や打面再生によって作業を続行させるもの。
- ③器体を固定したまま作業を続けていくもの。打面再生は見られない。

本石器群においても、亀石山細石刃石器群と同様の資料が見られる。第12図2の資料は上記の細石刃製作技術①にあてはまるものである。この打面再生剥片の剥離面を観察すると、9条の細石刃剥離痕のうち7条のものに打点が見られない。この打面再生剥片は、同一個体と考えられる細石刃核(1)の上方に乗るものと想定される。そうすれば、残存長で3cmある細石刃核の上に、さらに厚みの1cm前後ある打面再生剥片が加わることになり、この細石刃核の本来の大きさは5cm前後に及ぶものと想定される。さらに、第12図3は細石刃核の大幅な縮小過程を示すものとして注目される。この細石刃核は細石刃核と作業面再生剥片との接合資料で、当初、作業面長約5cmの細石刃核が、2.5cmになって廃棄される。細石刃核の細石刃剥離作業面をみると、打面再生の痕跡(打点のない細石刃剥離痕)が見られることから、当初は5cmを越える作業面の長さをもつ細石刃核であることが推測できる。こうした資料は、残核形態から当初の細石刃核を想定することが困難であることを示しており、細石刃核の縮小過程を端的に示すものと言える。

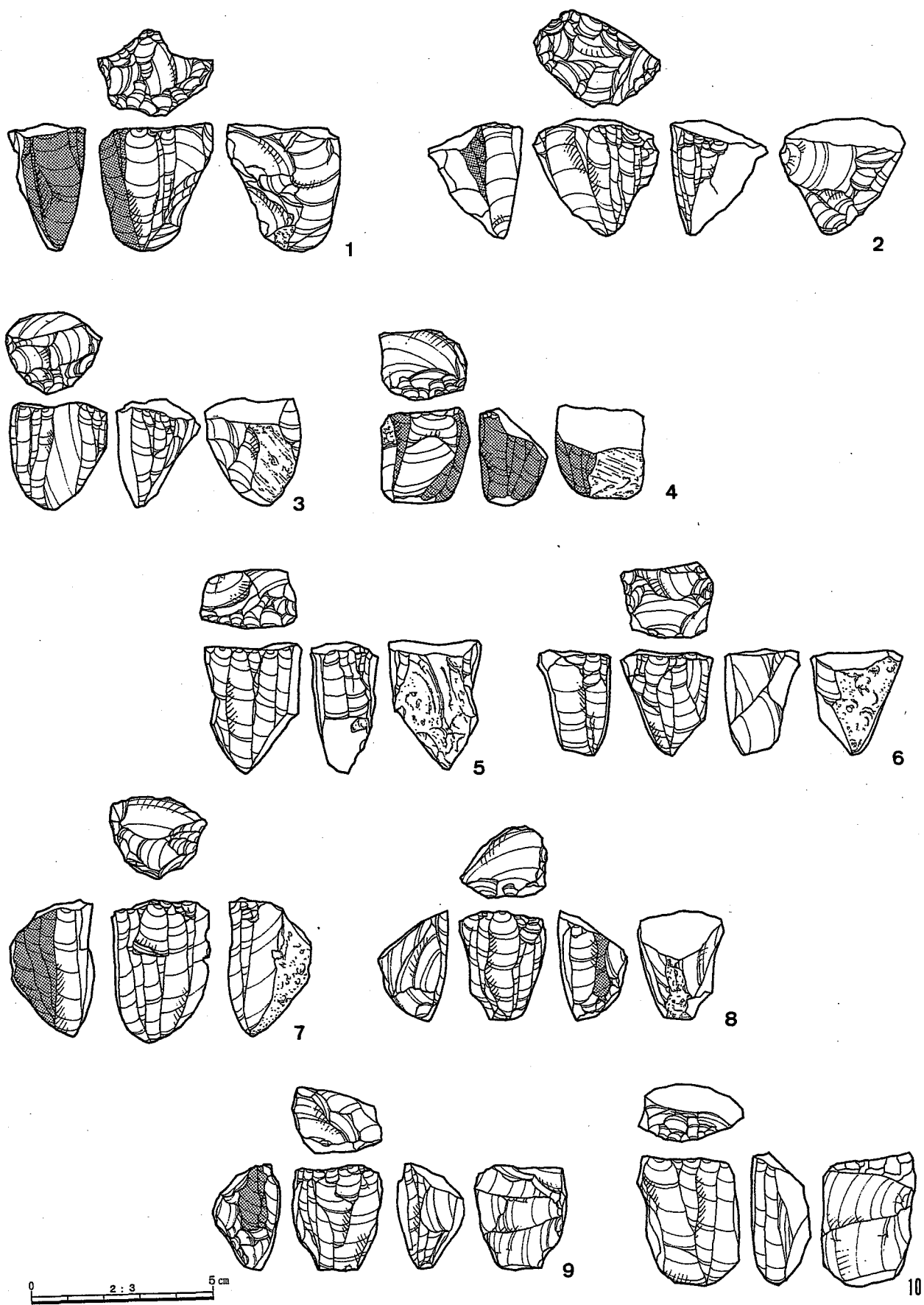
以上の中九州地域の石器群における細石刃剥離技術の特徴は、打面再生による細石刃剥離作業の続行という点とそれに伴う細石刃核の大幅な縮小という点が挙げられるだろう。鈴木というA～Cの分類を参照すると、これらのどれもが石器群中に認められる状況である。ここで、上述の特徴が標式遺跡である野岳遺跡に見られるかどうかを検討しておく。

野岳遺跡(長崎県大村市) 本遺跡の細石刃核は全て表面採集資料である。そのため資料の一括性には疑問は拭えないが、鈴木の提唱した「野岳・休場型」の今日的評価という意味において、再度取り扱うことは重要なことだろう。中九州地域の細石刃石器群における製作技術の特徴は、打面再生による細石刃剥離作業の続行とそれに伴う細石刃核の大幅な縮小であった。この特徴を野岳遺跡でも見出せるかどうかという点に着目したい。

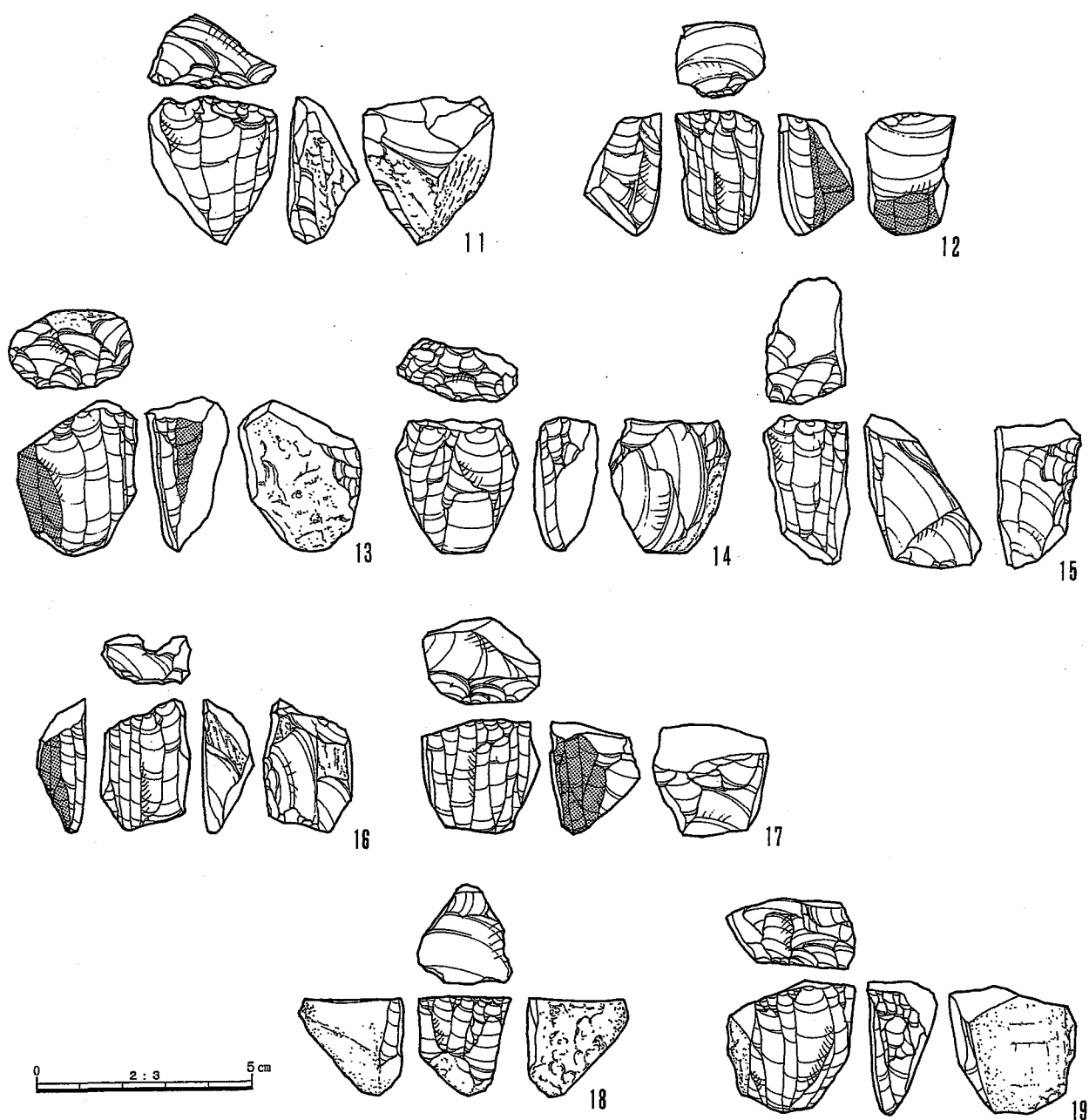
本遺跡で採集された細石刃核は30点以上にのぼる。このうち鈴木論文には24点が掲載されている。ここでは未発表資料も含めて図示した(第13・14図)。石材利用では針尾産黒曜石製のものがほとんどで、腰岳系黒曜石のものは客体的である。素材は礫か分厚い剥片で、石核調整は簡単に施され、打面調整後に、端部から細石刃剥離が行われる。細石刃作業面の長さが3～4cm前後のものが多く(平均:3.3cm)。ちなみに中九州の亀石山遺跡では3.0cm、河原第3遺跡では2.8cmであり、これは野岳・休場型細石刃核出土遺跡の中でも随一の大きさであることが分かる。これは黒曜石原産地からの距離が20km前後と非常に近いこともこの一因であろう。全ての細石刃核ではないが、打点のない細石刃剥離痕が認められる細石刃核が一定量存在する(第13・14図トーン部)。このことは打面再生が顕著であることを示しており、そして、細石刃核作業面の長さが4cm前後のものから2cm前後のものまでであることは、細石刃核の大幅な縮小を示していると言える。この状況は中九州のあり方と非常に類似している。

<複数型式組成石器群>

百花台遺跡(長崎県雲仙市) 細石刃石器群は主にⅢ層から出土し、調査区全体に広がる。しかし、出土量の多寡が認められ、細石刃核・細石刃の両者が出土する範囲は数カ所にとどまる。ここでは、その中でも特にまとまった分布を示す139・140区を取り上げ、さらに分析に関しては細石刃核・細



第13図 野岳遺跡の細石刃核 (1) <トーン部は打点の欠落する剥離面>



第14図 野岳遺跡の細石刃核（2）＜トーン部は打点の欠落する剥離面＞

石刃の出土の豊富な139区の北部に的を絞る。(第15図)。それは、他地点に関しても、この2つの集中区の細石刃石器群と異なる様相を示すものではないためである。

本石器群の編年の位置づけとしては、一時期のものでバリエーションとするか(麻生・白石 1976)、大きく二時期に分けるかという2通りの考え方がある。後者の議論において、下川・萩原は、扁平な細石刃核の欠如を理由に、「位牌塔・野岳→福井Ⅳ層→百花台Ⅲ層」という変遷を想定し、宇久島型細石刃核の存在から、土器出現以後である可能性が高いとする(下川・萩原 1983、萩原 1995)。一方、川道は、旧石器時代段階と縄文時代草創期段階に二分し、前者に扁平形細石刃核を古段階に、西海技法の出現が土器出現と前後することからこの一群を縄文時代草創期に位置づける。百花台遺跡の細石刃文化は、両者が混在することからこれを時期差と捉え、旧石器時代と縄文草創期の二時期の所産と

産とする（川道 1997）。しかし、これらは遺跡内分布や石材利用などを含めた総括的分析からではなく、石核構成を基にした議論である。ここではそれらを含めて細石刃製作技術の検討を行う。

細石刃核は、その観察から大きく野岳・休場型と福井型に分けられる。この他に、薄い剥片もしくは分割礫が用いられ、小口面から細石刃剥離が行われるものがある。小口面から細石刃剥離を行うことを意図したせいか、背縁・下縁調整を行われるため、残核形状の正面形はV字形を呈する。この一群に関しては、福井型や、羽佐島型と呼ばれるものに近い。したがって、本石器群の細石刃核には従来の分類に当てはめると3つに分けられる。しかし、大部分は、形状的に角柱状、角錐状を呈するもので、細石刃核原形が整形剥離によって特定な形態をなさない野岳・休場型の範疇に入るものである。ここではこれに関して検討する。

まず、素材は、礫・剥片素材があり多種多様である。ただ石材の違いによって素材も若干異なる。①漆黒色黒曜石：分割礫・剥片（礫面をもつ）②青灰色黒曜石：礫面をもつ剥片・剥片③灰白色黒曜石：小円礫・分割礫・剥片となる。このように礫を主に素材とする石材、剥片を主に素材とする石材に分けられる。こうした差異は原礫の形状やサイズを強く反映したものである。

打面設定には、ほとんど規則性はなく任意性がみられるが、大きく2つに分けられる。一つは一回の打撃によるもの、もう一つは数回の打撃によるものである。打面を多方向からの打撃によって作出する調整打面も存在するが、多くは作業面側からの打撃によるものである。

図示されている打面再生剥片は1点だけだが、細石刃核の細石刃剥離痕に注目し、打面再生を行ったと見られる細石刃核を抽出した結果、明らかに打面再生の認められるものは11個体存在する。実際には、この数値を上回ると考えられ、さほど稀な技術ではないと思われる。このほかに、打面転移は14個体見受けられる。集中区の出土ではないものの、打面転移の著しい個体もある（第15図11）

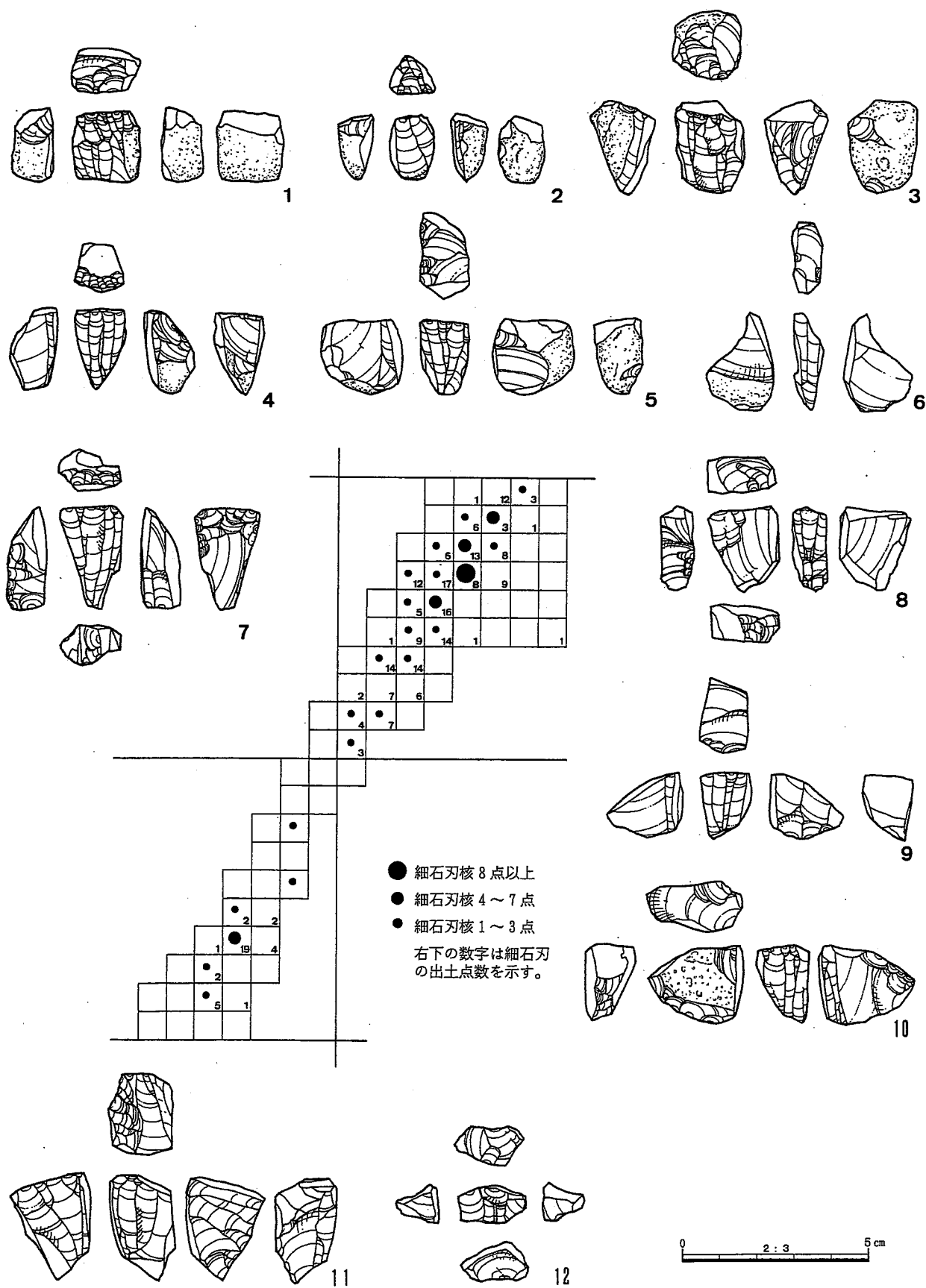
細石刃核の分布に関して、例えば139区35Gr（トーン部）出土の細石刃核13点を見ると、野岳・休場型、福井型で構成される。このことは、分布的にこの両者が分離できないことを意味している。

以上の分析から得られる百花台遺跡の野岳・休場型細石刃核の細石刃製作技術の特徴は、多種多様な素材を用い、素材形状をほとんど変えることなく細石刃剥離作業に及ぶこと、そして、打面再生のほかに打面転移を頻繁に行うことである。ただし、これらの細石刃核の分布と福井型の分布の違いや石材利用の違いはほとんど認められない。

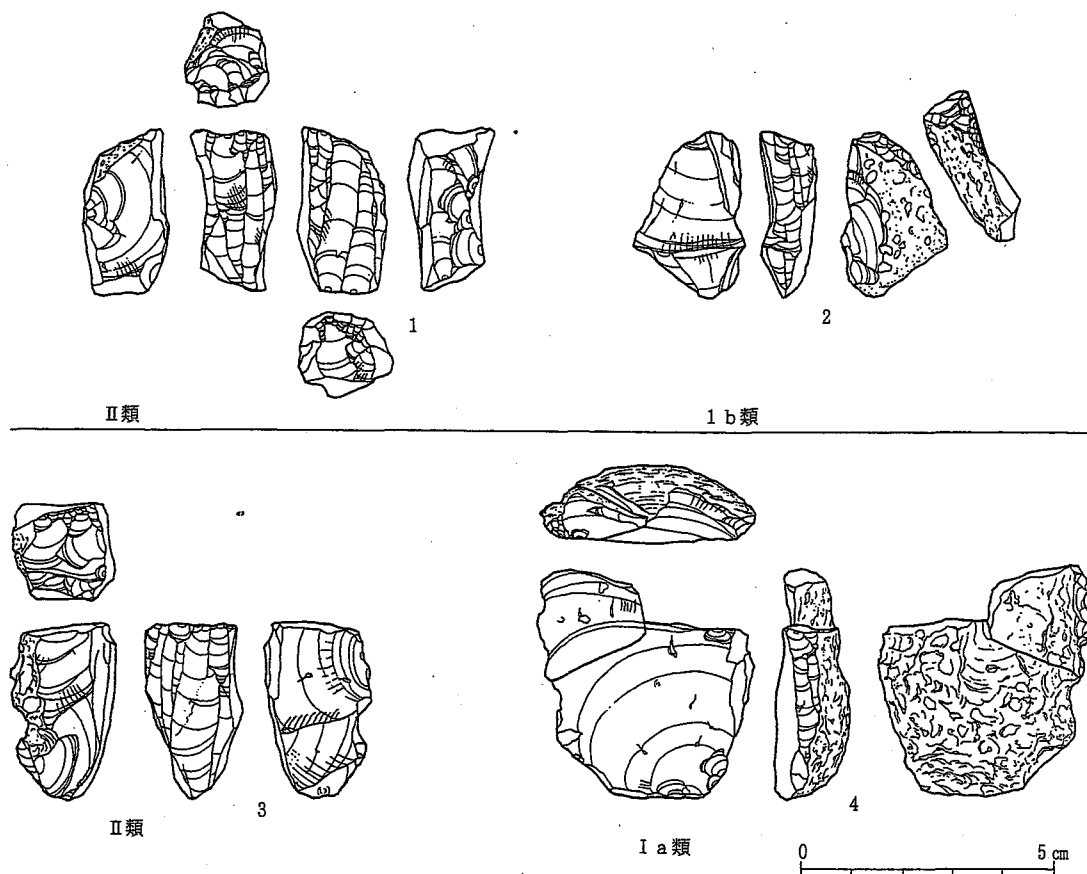
吉武高木遺跡（福岡市西区） 本石器群は624点、点数別では黒曜石331点、サヌカイト293点、石器組成としては細石刃、細石刃核、スポール、細石刃スポール、スクレイパー、使用痕のある剥片、石核で構成される。このうち、細石刃関連資料には黒曜石が、スクレイパーにはサヌカイトが主に使用される。本石器群では個体別資料分析が行われており、黒曜石製石器は大別14種、小別22種、サヌカイト大別6種に分離されている。

本石器群の細石刃製作技術は3つに分けられる（小畑2002）。

- I a 類 - 剥片素材で剥片の主要剥離面を側面に用いて、下縁調整や側辺調整をほとんど実施しないまま、打面を主要剥離面側から数回の側方連続剥離または細石刃剥離作業面側から1回の加撃によって作り出し、細石刃剥離作業へと移行していくもの。
- I b 類 - 石核調整や打面形成法などはI a 類とほとんど変わらないが、より薄い剥片を使用し、小口面から細石刃を剥離するもの。
- II 類 - 剥片・分割礫を素材として、角柱状に石核を整形し、打面は1方向ないし他方向からの剥離で形成される。細石刃剥離作業面が2面以上になるものも存在し、打面調整が認められる。これらは独立して存在しているものではなく、同一母岩から製作されているものも存在する。例え



第 15 図 百花台遺跡出土細石刃核



第16図 吉武高木遺跡における同一母岩資料中の細石刃核

ば、個体別資料8にはI b類とII類、I a類とII類との両者が存在している（第16図）。前章でも述べたとおり、従来の分類に当てはめると、これらは別型式、つまりI類が羽佐島型に、II類が野岳・休場型になる。しかし、こうした別型式の細石刃核が同一母岩中に含まれおり、これを従来の分類からの解釈は非常に難しい。小畑はこうした細石刃製作技術を一括して、「吉武型細石刃剥離技術」を提唱している。こうした個体別資料分析から設定された「型式」は、否定できるものではなく、筆者もこの見解を支持したい。重要な点は、こうした従来の分類での複数型式が、同一母岩中に含まれていることである。この中で、II類とされた細石刃製作技術をみると、野岳・休場型は剥片利用が進んでおり、打面転移の痕跡が見られるものも存在している。こうした資料の存在は、先に見た百花台遺跡での細石刃製作技術と共通するものと捉えられる。

c. 小結

野岳・休場型単純組成石器群における細石刃製作技術の特徴は、①礫素材も用いることが多いこと②打面再生を繰り返しながら細石刃製作を続行させることである。残核形態は円柱（錘）状・角錐状・扁平形など様々な形態になる。この残核構成は、亀石山遺跡、河原第3遺跡をはじめとして、野岳遺跡でも共通している。これは長崎県茶園遺跡V層などにも認められる。これらの石器群においては、打面再生が最も特徴的な技術の一つであるために、遺跡内には打面形成や修正に関わる剥片類が多く認められることになる。さらに細石刃核の形態変化が著しく、遺跡内への搬入時と細石刃製作後とでは、残核形態が異なる場合もある。細石刃の長さや細石刃核の作業面の長さの不均衡さはこうした形態変化を端的に示している。ただし、打面再生が行われない個体も存在することは確かである。打面

打面再生自体は単一打面の維持という点において重要であるが、これが維持され続けられれば、無論打面再生は行われることはない。以上の点を総合化すると、より重要な特徴は、単一打面の維持と同時に単一作業面の維持にあると考えられる。

一方、複数型式共存石器群における細石刃製作技術における特徴は、剥片利用や打面転移を伴う細石刃剥離の継続である。百花台遺跡で打面再生剥片や打面再生の痕跡は認められるものの、それ以外にも打面転移や剥片素材の利用が認められることは、細石刃製作技術における柔軟性として捉えることが可能である。百花台遺跡では接合資料がなく、前節での亀石山遺跡や河原第3遺跡の分析で行ったような接合資料からの綿密な分析が行えていない。しかし、吉武遺跡の出土資料をみると、同一母岩中に数個の細石刃核が含まれる資料も存在している。これは、亀石山遺跡や河原第3遺跡のように、基本的に礫素材を用いて打面再生を行いながら細石刃製作を継続するという方法と、百花台遺跡や吉武遺跡における細石刃製作の継続方法とは異なることを示している。この両者に認められる違いは、素材獲得段階すなわち礫素材であるか剥片素材であるかという違いから、細石刃剥離継続まで一貫した違いであると考えられる。では、両者の関係は時間差によるものであろうか。

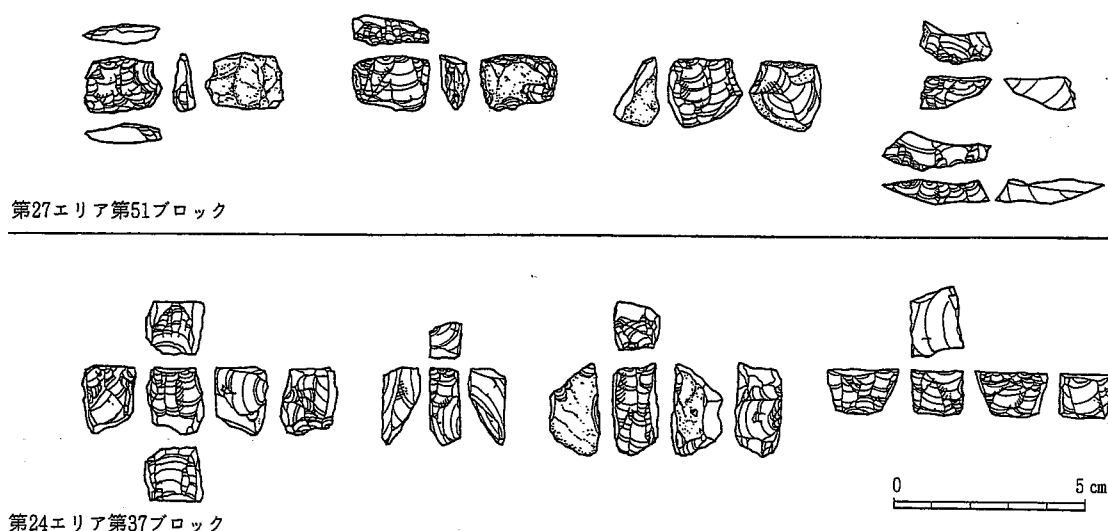
d. 両者の関係性

層位的事例による検討 編年的問題に対して鹿児島県桐木耳取遺跡の事例が参考になる。本遺跡細石刃石器群は層位的に2つの時期に分かれる(第17図)。

- ①下層細石刃石器群(XⅡ層:第27エリア第51エリア、第33エリアなど)
- ②上層細石刃石器群(X層下部~XⅠ層:第24エリアなど)
- ③石鏃主体石器群(X層に出土ピーク:第18・19・20(22・23)・26エリアなど)

この層位的区分は細石刃製作の技術的側面から見ても肯定できる。①石器群の細石刃製作技術は、礫面を大きく残す、礫の一面に作業面を設定し細石刃剥離を進行させる、打面再生を行うという特徴がある。一方の②石器群の細石刃製作技術は、①と比較し考えると、打面転移を行う、剥片素材の利用という特徴がある。さらに、X層中では福井型に非常に近い特徴をもつ細石刃核が認められる。

両者は、これまでの細石刃製作技術の分類に照らせば野岳・休場型に相当する。特にXⅡ層に出土層準をもつ細石刃石器群は、野岳・休場型が主体的に組成される段階に相当するものと考えられる。



第17図 桐木耳取遺跡における層位的出土事例

これに対して、XⅠ～X層に出土層準をもつ細石刃石器群には、野岳・休場型と呼べるものもあるが、技術的特徴から一線を画するものも存在する。この層位的変遷をみると、前者あり方は亀石山遺跡・河原第3遺跡のものに対応する。この技術的特徴は桐木耳取遺跡に近い城ヶ尾遺跡Ⅳ文化層でも見られる。一方の后者のあり方は百花台遺跡や吉武高木遺跡の例に対応する。素材礫の大きさが異なるので全く同様の技術によるものとは言えないが、大枠で捉えればこうした技術的変遷が捉えられよう。

e. 野岳・休場型細石刃核の定義

まず、野岳・休場型単純組成石器群の細石刃製作技術と複数型式共存遺跡のそれとの共通点と相違点をあげてみたい。共通点として、石核整形はあまり施されず、傾斜打面をもち打面調整が施されるという点があげられる。一方、両者の相違点として挙げられるのは、細石刃剥離作業の継続方法である。すなわち、主体となる石器群では、礫素材で打面再生を行いながら継続させるのに対して、他型式共存石器群では、剥片素材の利用（村崎 1997）しながら、打面再生に加えて、打面転移させることによって、細石刃剥離作業を継続させる。これらは素材に依拠し、これを限界まで消費し続けるという細石刃製作技術から、素材に柔軟に対応した細石刃製作技術への移行とも捉えることができる。筆者は、これらを素材依拠型（野岳・休場Ⅰ型）と素材対応型（野岳・休場Ⅱ型）として区別する。野岳・休場Ⅰ型に特徴的な要素は、①礫素材を用いること②打面再生による細石刃剥離の続行である。一方、野岳・休場Ⅱ型に特徴的な要素は、①剥片素材の利用②横方向の打面転移を行うことにある。これらを先の層位的事例や放射性炭素年代を根拠とすると、変化の方向は「Ⅰ型→Ⅱ型」となる。

ここではこうした石器群をN群と呼ぶ。しかし、Ⅱ型に関しては、他技術の要素も多分に見受けられ、純粋なN群とは異なる。これに関しては後に検討する。典型的なN群（Ⅰ型）は、西北九州の黒曜石原産地付近および中九州付近に主要な分布域があるが、基本的にN群技術は九州全体に広がりをもつ。黒曜石とよく結びつき、西北九州産の他に南九州では桑ノ木津留産、上牛鼻産など相対的に不純物の少ない黒曜石が頻繁に利用される。

（2）船野型細石刃核を伴う石器群（F群）

a. 先行研究

船野型は、橘昌信によって技術的解明がなされたもので、分割礫あるいは素材剥片の平坦面を打面に設置し、その打面上から側面調整を施した後に細石刃剥離を行うものである（橘 1979）。

他の細石刃核型式との決定的な違いは、細石刃核打面に素材剥片の平坦面を設置し、打面調整を施さないことである。この視点に立つと、南九州に特徴的な平坦面打面を基本とする畦原型や加治屋園型は、船野型の異石材への適応形態と評価される。

船野型は、その提唱後に船野型と上下田型とに細分されている（橘 1991、多田 2000）。これは、船野型が上述の定義であるのに対して、上下田型が素材剥片の主要剥離面を側面に設定すること、下縁調整が施されることから区分されたものである。橘や多田は、上下田型を福井型との関連で捉え、「船野型→上下田型」と変遷するとした（橘 1991）。この後、綿貫俊一は「岩土原型」を提唱しているが、上下田型の一部を包括する概念になっており、この違いは明瞭ではないが、綿貫が長軸～短軸方向の打面作出を認めている点（綿貫 1992）で若干異なる。ただ、綿貫が、打面が平坦であっても岩土原型と認めている点で上下田型をも含む認定範囲となっている。「上下田型」や「岩土原型」の一部は、素材の主要剥離面を側面に利用するという方法が後述の泉福寺（福井）型で見られる方法であり、この関連で考えたほうが理解しやすい。ここでは、F群技術の典型例の製作工程を見ていく。

b. 資料の分析

松山遺跡（大分県豊後大野市） 本遺跡では、流紋岩を用いた細石刃製作が行われている。ブラン

クを見ると、長さ 12cm 以上、幅 10 cm 以上、厚さ 7 cm 以上の大振りな剥片（分割礫）の主要剥離面を打面として、側面調整が加えられている（第 18 図 17）。遺跡は流紋岩採集可能地点付近に存在していることから、こうした浪費的な石材消費が行われたと見られるが、ブランクと細石刃核との大きさを比較すると、長さ、幅ともに大きく縮小していることが分かる（同図 15・16）。側面調整剥片は、おそらく加工具類として使用されたものと考えられる。これらの剥片の打面が平坦打面のものが多いこともその傍証である。

銭亀遺跡（鹿児島県熊毛郡南種子町） 本遺跡における細石刃核を含む接合資料によると、円礫分割段階から細石刃剥離にいたるまでの過程が復元できる（第 19 図）。それによれば頁岩の楕円礫を分割する過程で生じた分厚い縦長剥片を細石刃核素材として利用している。その後、その素材剥片の長辺側にその主要剥離面側から調整を加え、素材剥片の末端部側から細石刃を剥離している（徳田編 2006）。円礫分割時には、多くの貝殻状剥片が剥離されているが、これに加工痕などは認められず、微細剥離痕のみが認められることから簡易な石器として利用されたものと考えられる。

c. 小結

以上の分析から、剥片や分割礫の主要剥離面もしくは平坦面を打面とし、側面調整を行う製作工程を追うことができる。松山遺跡のように石材が潤沢な地点では、石材が浪費的に利用されるが、あまり大型の石材採取が見込めない銭亀遺跡のような地点では、素材礫から剥離された大振りな縦長剥片のほとんど全てが利用される。しかし、共通して、平坦打面の設置と側面調整という一貫性がある。ここではこれらの属性を重視して F 群と呼ぶ。こまた、宮崎県域で特徴的な砂岩や薄手の頁岩を利用した「畦原型」や鹿児島県域でとくに凝灰岩質頁岩と結びつく「加治屋園型」に関しては「群」とは呼ばず、そのままの名称で呼び、表中では「U」、「K」と記述する。

石材として、東、南九州の流紋岩やホルンフェルス、頁岩とよく結びつく。

大分県大野川流域（松山、上下田、牟礼越など）、宮崎平野部（朝草原、船野など）、薩摩半島地域（加栗山遺跡第 22 ユニット、前山遺跡 3 ブロック⁽³⁾、帖地など）などに多く分布する傾向がある。

（3）石ヶ元型細石刃核主体石器群（I 群）

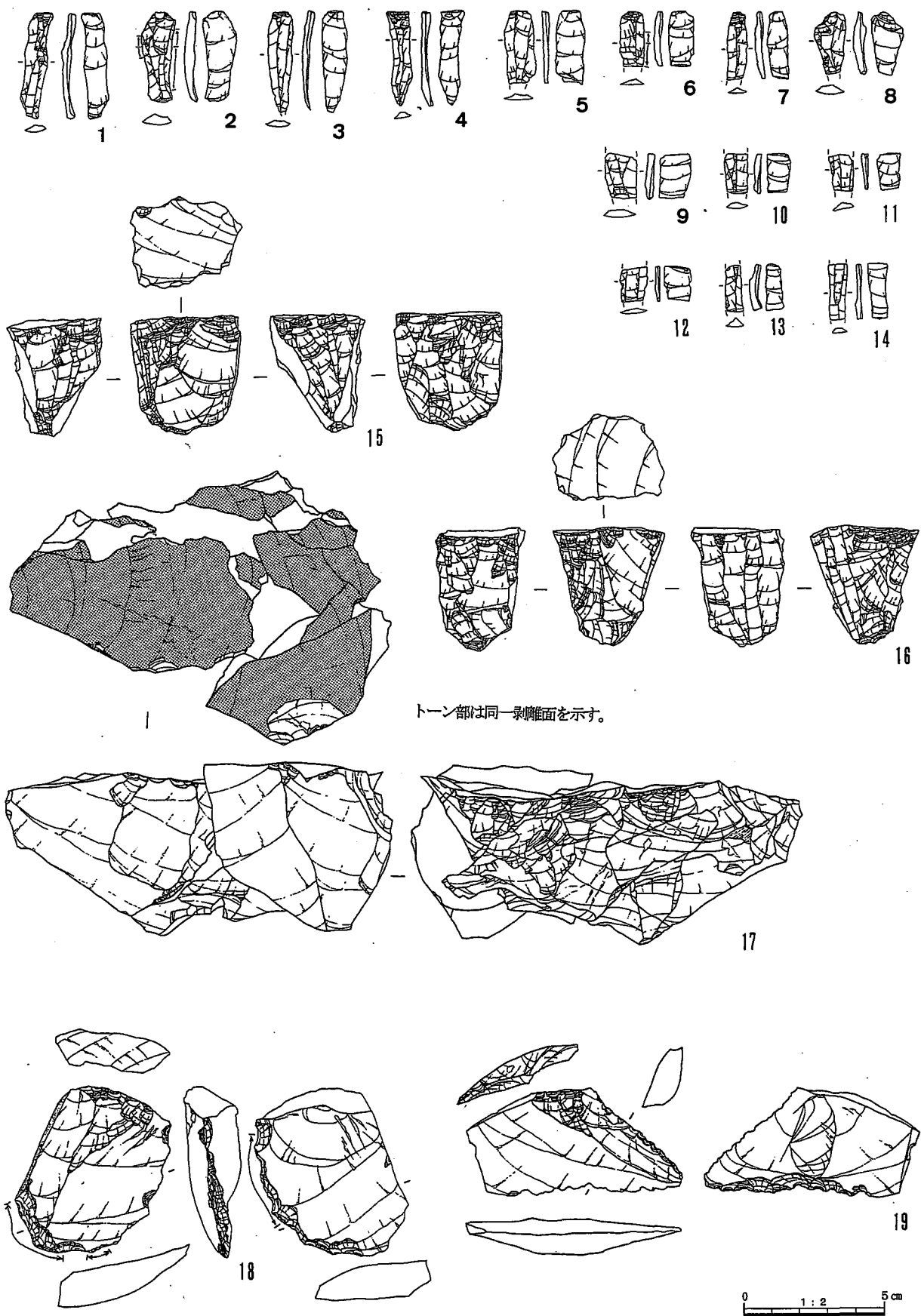
a. 先行研究

唐津市の上場台地に濃密な分布を示す石ヶ元型細石刃核（唐津型とも呼ばれる）を主体とする一群である（第 15 図）。この細石刃核は古くは半船底形と呼ばれ（麻生 1965）、キールドコアとも呼ばれてきた。小畑の定義によると、①細石刃剥離面と背縁の交わる部分が鋭く尖っており、下縁が存在しない、②打面と細石刃剥離面との長さの比が 2 : 1 ~ 3 : 2 と細石刃剥離面が長い、③打面調整がある、この 3 点である（小畑 1987）。小畑はこの後に「両面加工ブランク両側面や稜上の調整」、「細石刃剥離面頭部のスリガラス状擦痕」その定義に付け加えた（小畑 2005）。

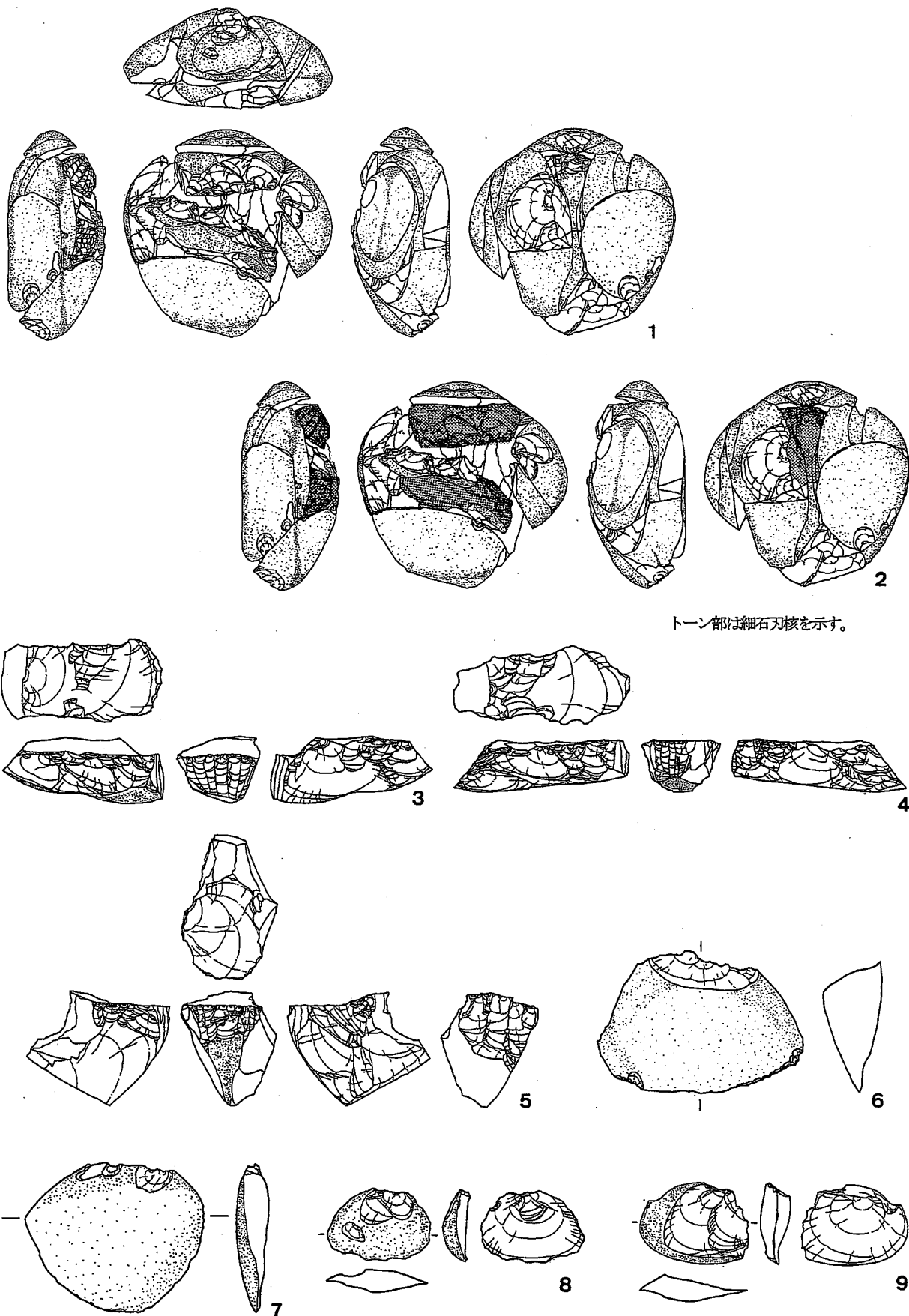
多くの研究者は、これを後述した福井型との関連で取り扱っているが、問題となるのはこの一群の編年の位置づけである。これには 2 つ考え方があり、1 つは、福井型との関連性を重視し土器出現以後に位置づける考え方（吉留 2003b、杉原 2003 など）、もう 1 つは福井型以前に位置づける考え方である（徳永 1996、岡本 2002、小畑 2005）。前者の根拠は、横方向打面形成である福井型とは異なり、土器が伴うことである。一方、後者の根拠は、泉福寺洞穴における爪形文土器段階での縦方向打面形成優勢の状況と、門田遺跡や大原 D 遺跡での出土事例である。この問題は、西海技法の系譜やその展開の問題に関連するため重要であり、慎重な検討を要する。

b. 資料の分析

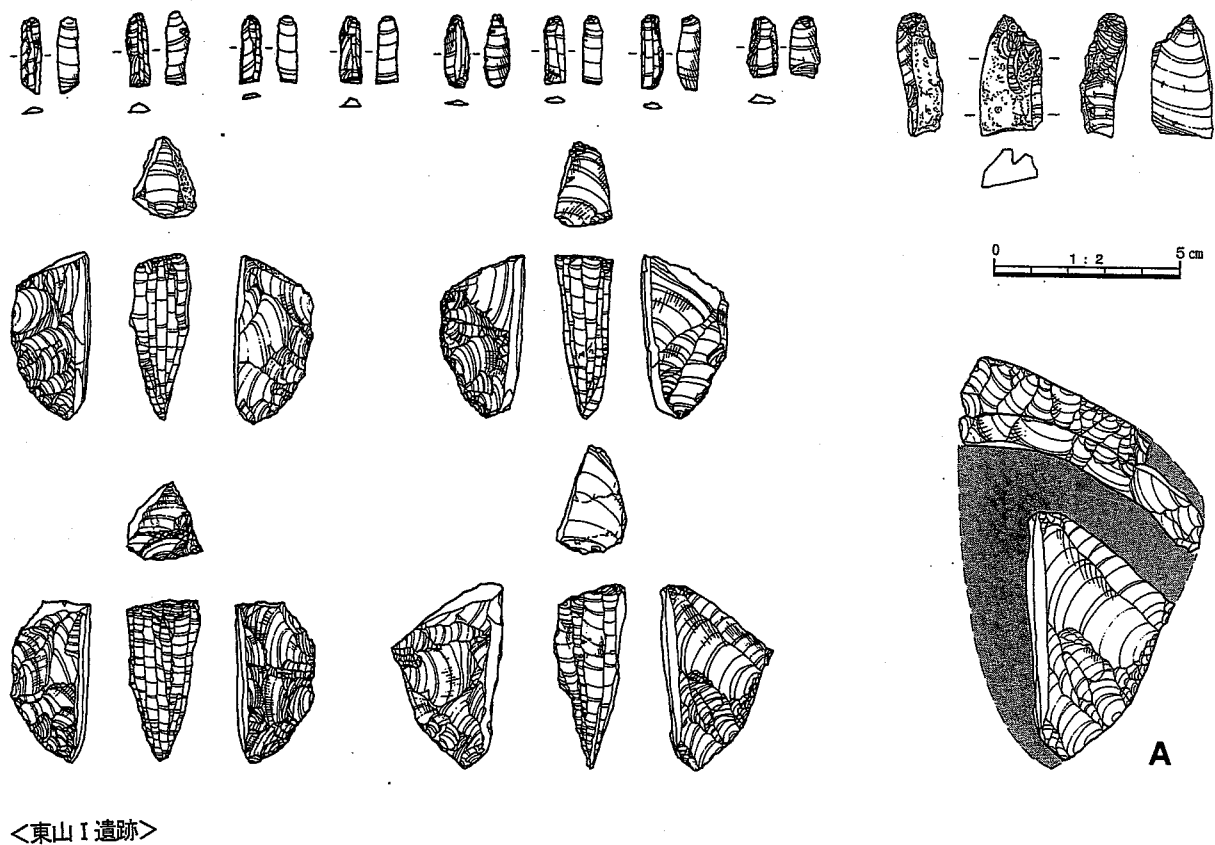
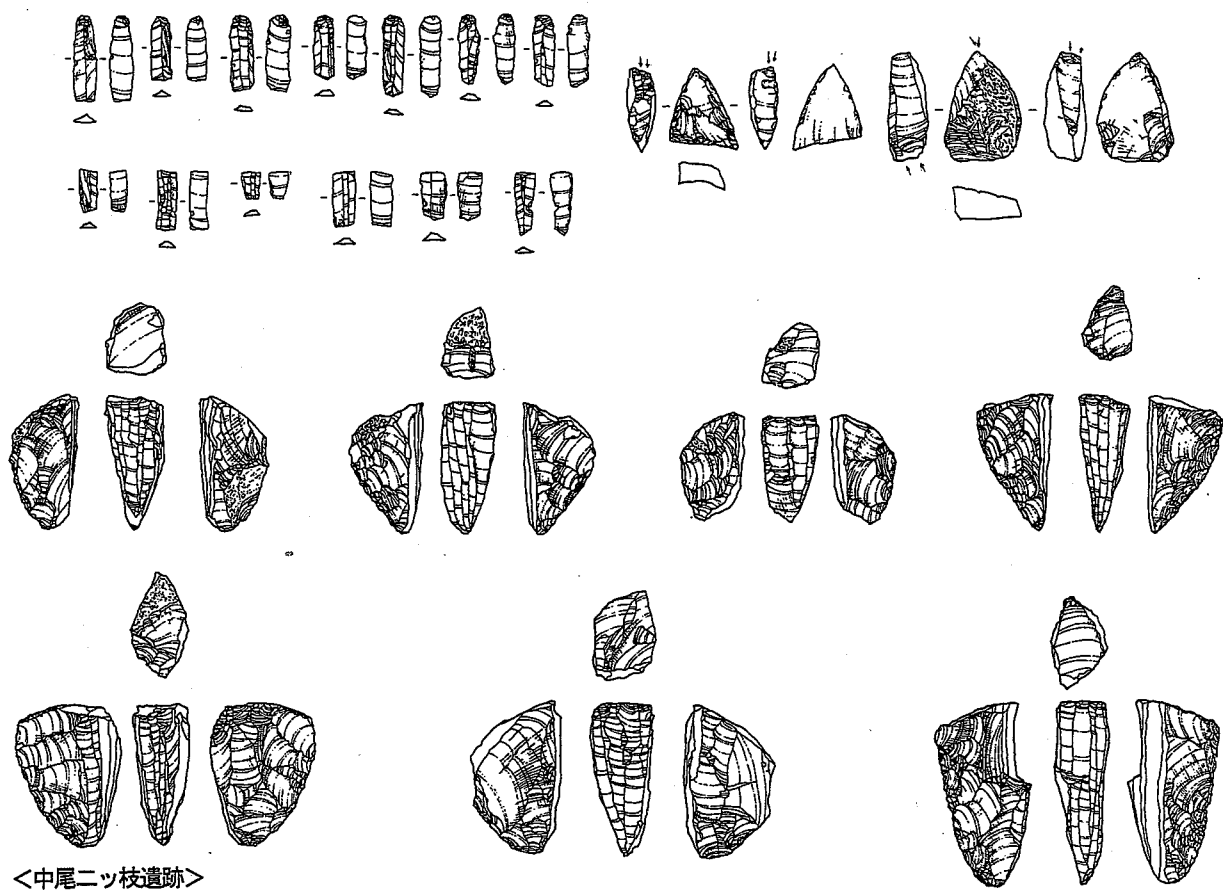
東山 I 遺跡（佐賀県唐津市） 技術分析にあたって、接合資料がほとんど存在せず、原礫段階から



第18図 F群関連資料 (松山遺跡)



第19図 F群関連資料（銭亀遺跡）



第20図 I群関連資料（上：中尾ニツ枝遺跡・下：東山I遺跡）

の製作工程の復元は現在では不可能である。しかし、製作関連遺物からある程度の復元が可能である。本遺跡における接合資料を参考にとすると、まず素材剥片に両面加工を施し、これをブランクとする。その形状は逆三角形となる（第20図A）。その後この一端に打撃を加えてスポールを剥出して打面を形成する。この時、打面形成方向は例外なく長軸方向である。細石刃剥離に先立ち、小畑は打面調整が実施されると述べているが（小畑 1987）、むしろそれは例外的で打面調整を施さずに細石刃製作を行うものが一般的である。

他遺跡の製作技術もおそらくこの製作工程を追う。残核形態に大きさの相違があるもの、相似形に縮小しているように見え、その形態の類似性はきわめて強い。

c. 小結

残核形態が縦長になる点や、打面作出方向が縦方向でかなり固定的であることで後述する泉福寺型（S群）との相違点がある。よって、ここではそれを重視してI群として独立させて分類する。

西北九州産黒曜石が利用されるが、特に牟田産黒曜石と結びつく。佐賀県石ヶ元下道遺跡、中尾二ツ枝遺跡、東山I遺跡、大光寺遺跡、馬川谷口遺跡など九州西北部に局地的な分布を示す。

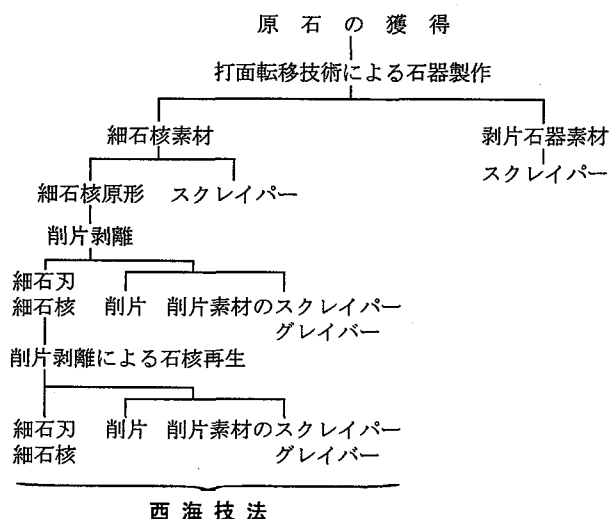
（4）泉福寺型（福井型）細石刃核主体石器群（S群）

a. 先行研究

麻生優によって西海技法として提唱され（麻生 1965）、林謙作、橋本勝雄、織笠昭によって詳細が明らかにされた（林 1970a、橋本 1983、織笠 1991）。麻生の定義はこうである。まず円礫を輪切り上に打ち割って角張った円板状の石核を作出し、その後この石核の一端に打撃を加え細石刃核の打面を作る。このため楕円は多くの場合斜めに傾き、一端に打面調整が集中する（麻生 1965）。こうした定式化された西海技法は、後に林謙作（林 1970a、1974）や橋本勝雄（1983）による福井洞穴出土資料の検討からこの技法一色に塗りつぶされたものではないことが明らかにされ、その後織笠昭によって泉福寺洞穴出土資料から再検討がなされる（織笠 1990）。

織笠昭は、泉福寺洞穴豆粒文土器文化層出土資料を分析し、西海技法の詳細を明らかにした（織笠 1990）。織笠の分析によると、①細石刃核素材作出には打面転移技術が多用されること、②側面調整が省力化の方向にあるのに対して、打面作出は極めて入念に行われ、その大部分が横方向打面形成であること、そして打面調整も入念であること、③さらに細石刃核素材作出、原形作出の段階で生じた剥片類がスクレイパーやグレイバーとして利用されることを特徴に挙げている（第21図）。

これらの研究でもう一つ重要な点は、西海（福井）技法の中で、技術的変遷を認めている点である。林は、福井洞穴遺跡2～4層出土の細石刃核をI～IV式に分類し、これらが層位的に変遷することを明らかにした。すなわち、4層ではIV式のものに限られるのに対して、2層ではII式が集中すること、2、3層通じてI・III式が存在するものの、III式がやや先行することである。IV式にI式が影響を与え、II式が生み出されると述べている（林 1974）。同様に織笠も、泉福寺洞穴資料の中で認めている。すなわち、両端2面に細石刃剥離作業面をもつものが10層に特徴的に認め



第21図 西海技法の技術構造（織笠1991）

られること(10層類型)、隆起線文土器文化層には細石刃核原形を縦位置に用いるものが多いこと(萩原のいう8層類型：萩原 2001)、爪形文土器、押引文文化層には細石刃核が大型化し、縦方向打面形成が増加することである。これらの分析以後、泉福寺洞穴の層位的成果をもとにした縄文時代草創期の細石刃石器群編年がさかんに試みられている(萩原 2001、木崎 2002、桑波田 2006、杉原 2007)。

こうした編年の細分に関しては、細やかな石器群同士の関係を知るには有意義かもしれないが、ただ、福井や泉福寺ほどに資料が得られている遺跡はなく、こうした変遷過程を消費地遺跡側から追求することは困難である。泉福寺洞穴における変遷はあくまで傾向であることに注意する必要がある。

b. 資料の分析

泉福寺洞穴遺跡7～9層(長崎県佐世保市) 隆起線文土器が共伴する層である。両面加工あるいは片面加工のブランクを形成した後に、横方向の打撃によって打面形成を行う。縦方向の打面形成が存在しないわけではないが、石ヶ元型とは製作工程の厳密性や残核形状が異なる。とりわけ横方向打面形成が主体となることが重要である(第22図)。素材は薄い剥片で、ブランクを作成しない場合は、剥片の主要剥離面を側面に設定する(第22図13・14)。また素材獲得時に、両極打法(バイポーラ・テクニック)を用いる場合がある(第22図16)。この技術は、円礫を分割するに用いられるが、楔型石器を製作した後に横方向打面形成によって打面を作出し、細石刃剥離に及ぶこともある。こうした特徴は本遺跡のほかに福井2・3層にも認められ⁽⁴⁾、S群に特徴的なものかもしれない。

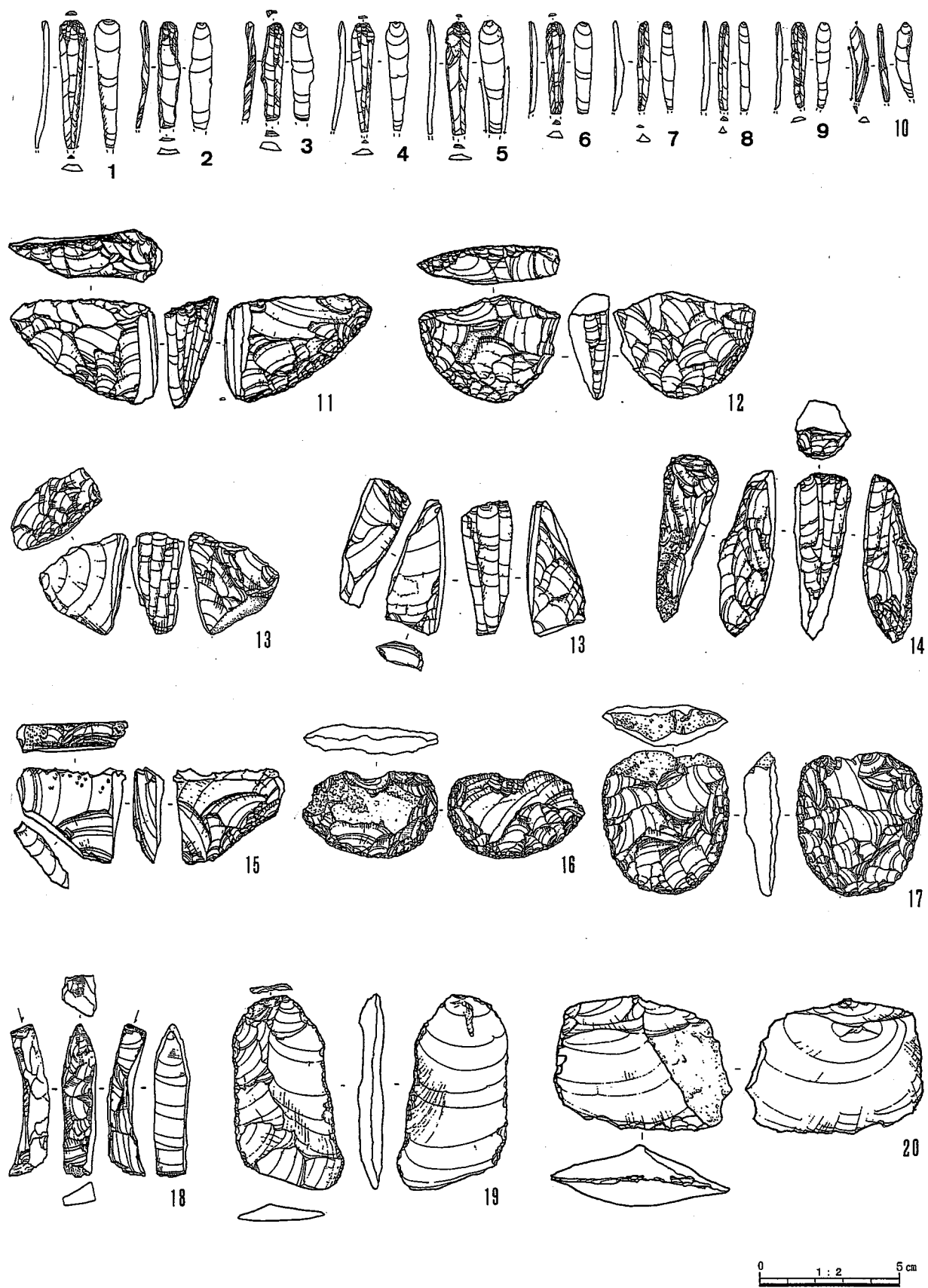
茶園遺跡IV層(長崎県五島市) 両面加工のブランクを準備し、横方向の打撃によって打面が作出された後に、細石刃が剥離される。泉福寺洞穴資料とよく類似しているが、両面体を準備せず円礫素材の薄い剥片をそのまま利用し、ほぼ無加工で細石刃剥離に及ぶものもある(第23図上)。これらは、ブランク形成以外の素材の利用方法や横打打面形成という点で西海技法の範疇に入るものと考えられ、西海技法の簡略形態と呼べるものだろう。本遺跡においても両極打法が見られ、楔形石器が数多く認められる。

高畑乙ノ原遺跡(熊本県下益城郡山都町) 本遺跡VIII層において、細石刃石器群と爪形文土器が共伴している。前2遺跡では西北九州産黒曜石が多用されているものの、本遺跡では遺跡近傍で採取される阿蘇4系黒曜石や象ヶ鼻産凝灰岩によって細石刃が製作されている(第23図中)。細石刃技術は、基本的に素材剥片を横位に用いて横方向の打面形成を行うものである。ただし、本遺跡では、一切両面体ブランクが製作されていない。これは5cm前後という素材剥片の小ささに起因するもので、この大きさでは両面体製作は不可能である。これも上述の西海技法が簡略化されたものと考えられる。同様の遺跡として、阿蘇原上遺跡などが挙げられよう(第23図下)。

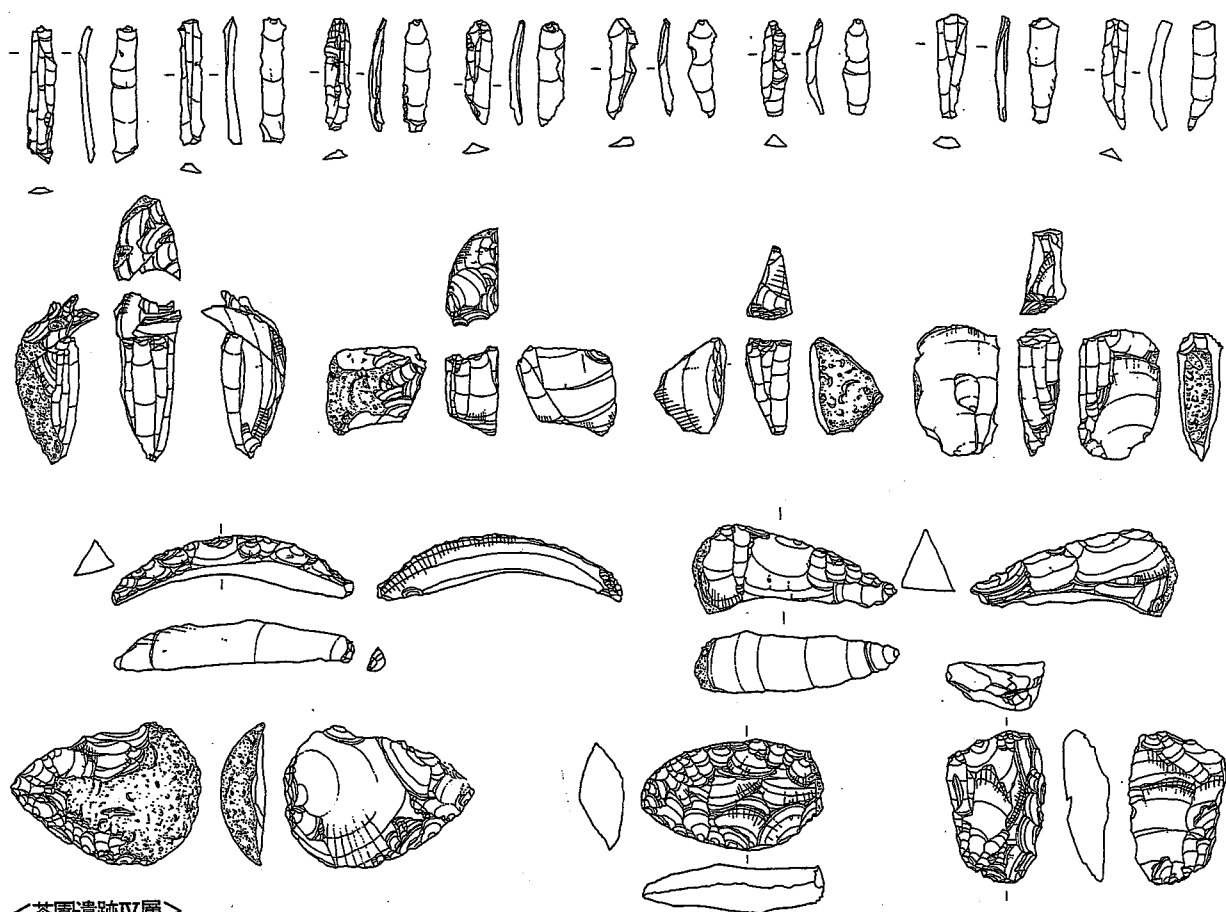
c. 小結

以上のように、これらの石器群の基本的な細石刃技術は、主要剥離面を側面に設定して横方向打面形成を行うということである。両面加工体が形成される場合があるが、こうした技術は西北九州産石材が潤沢に利用される範囲でのみ認められ、石材が枯渇している地域では、技術的に簡略化される傾向にある。ここではこれらをまとめてS群と呼ぶ。縦方向打面形成が行われる場合もあるが客体的で、かつI群とは残核形態が異なる。

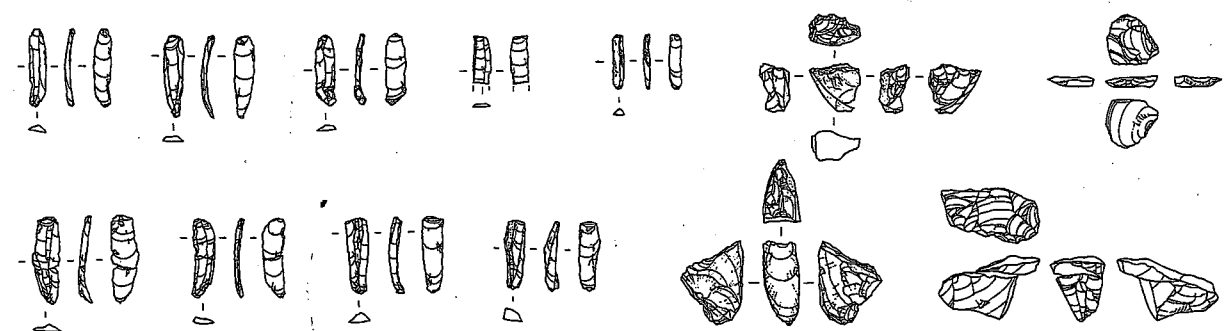
また素材剥片の主要剥離面を細石刃核の側面に設定し、石核調整がほとんど施されず、小口面で細石刃を剥離するものも本群には特徴的で、そうした細石刃核にはやはり横打打面調整が認められる。泉福寺洞穴や茶園IV層など本群を含む石器群にはたいてい認められる。こうした一群は、小畑の「BⅡ型」(小畑 1983)、先に挙げた「岩土原型」(綿貫 1992)、また瀬戸内地域に一定量分布している羽佐島型(多田 2000)として分類されてきたものであり、上述の技術を重視すれば、船野型というよりも



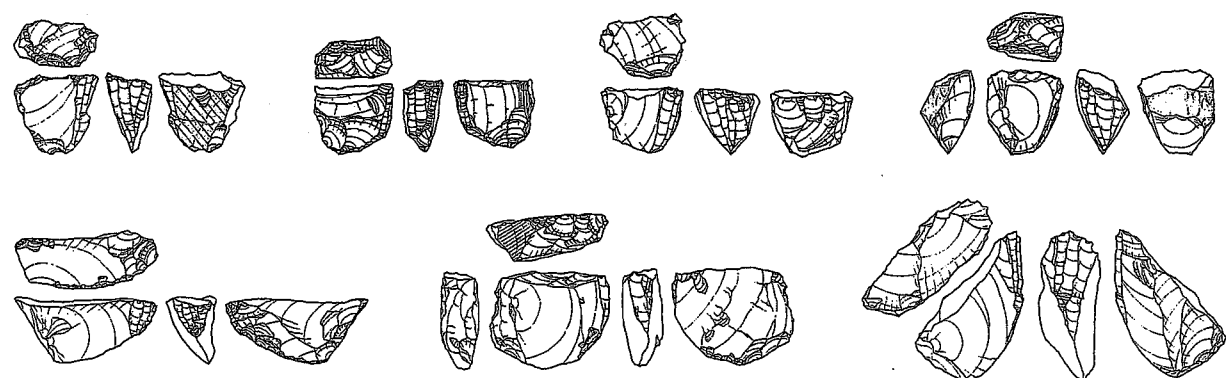
第22圖 S群関連資料（泉福寺洞穴7～9層）



＜茶園遺跡IV層＞



＜高畑乙ノ原＞



＜阿蘇原上＞

0 1:2 5 cm

第23図 S群関連資料 (茶園遺跡IV層・高畑乙ノ原・阿蘇原上)

むしろ福井型の範疇で捉えたほうが理解しやすい。ここでは、これらを典型的な西海技法の技術を簡略化したものと理解したい。先に挙げた「上下田型」は、素材利用方法がこれらと類似しており、F群とS群との技術が複合した結果生み出されたものと理解される。

後述するが、茶園遺跡の層位的事例からS群はN群よりも後出の存在と見られ、西北九州から中九州においては、土器と共伴する石器群は全てS群である。例えば福岡県門田遺跡、長崎県福井洞穴、泉福寺洞穴、小ヶ倉A遺跡、熊本県高畑乙ノ原遺跡、河陽F遺跡、宮崎県阿蘇原上遺跡が挙げられる。

第3節 各石器群間の関係

1. 各石器群の関係

ではこれらの石器群の関係性はどのように考えられるか。なお、第2表には、九州の各石器群の分類を示し、あわせて土器や槍先形尖頭器や局部磨製石斧など共伴する可能性のあるものも示した。

(1) N群とI・S群との関係

茶園遺跡の層位的事例を根拠とすれば時間的差異と考えるのが妥当である。本遺跡では間層を挟んでいないものの、典型的なN群であるV層石器群とS群であるIV層石器群の両方で平面分布が異なる(川道 1998) (第24図)。加えてIV層では槍先形尖頭器や局部磨製石斧が出土しており、共伴遺物からもV層とIV層との時間差が想定できる。この編年的関係は、後に述べる放射性炭素年代値からも裏付けられる。

ただし、剥片素材利用や打面転移が行われる野岳・休場型(II型)に関しては、S群と伴う例がある。これらはS群と石材(素材)利用や石器製作技術において類似性があり、両群を分離させて考えることが困難である。上述のように、百花台遺跡や吉武高木遺跡の分析によれば、むしろ素材利用への柔軟な対応によるものと評価される。ここではこれらの石器群をN-S群と呼ぶ。時間的にはS群成立以後のものと見なされる。問題となるのは、N群とF群、F群とI・S群との関係である。

(2) N群とF群との関係

両群との関係に関しては、中九州東西での石器群を検討することによって有益な示唆が得られる。中九州西部に位置するN群に、貫入的にF群が存在する。これとは反対に中九州東部の石器群はそのほとんどがF群であり、その中に少数のN群が存在している。こうした状況をどのように理解するかという問題である。

ここでは、典型的なN群である亀石山遺跡の石器群ブロックを検討して、両者の関係を追及する。

a. 亀石山遺跡におけるN群とF群とのブロック間関係

石器群は、多数のブロックで構成される。これらのブロックは、そのほとんどが腰岳系黒曜石製石器によって形成されるが、調査区の北側に流紋岩ブロックが存在する。視覚的に腰岳系黒曜石ブロックは11に、流紋岩ブロックは2つに区分される(第25図)。ここで用いる接合資料の分類(以下、接合類型)は、I・II種(剥片同士)、MI・II種(細石刃同士)の4つである。

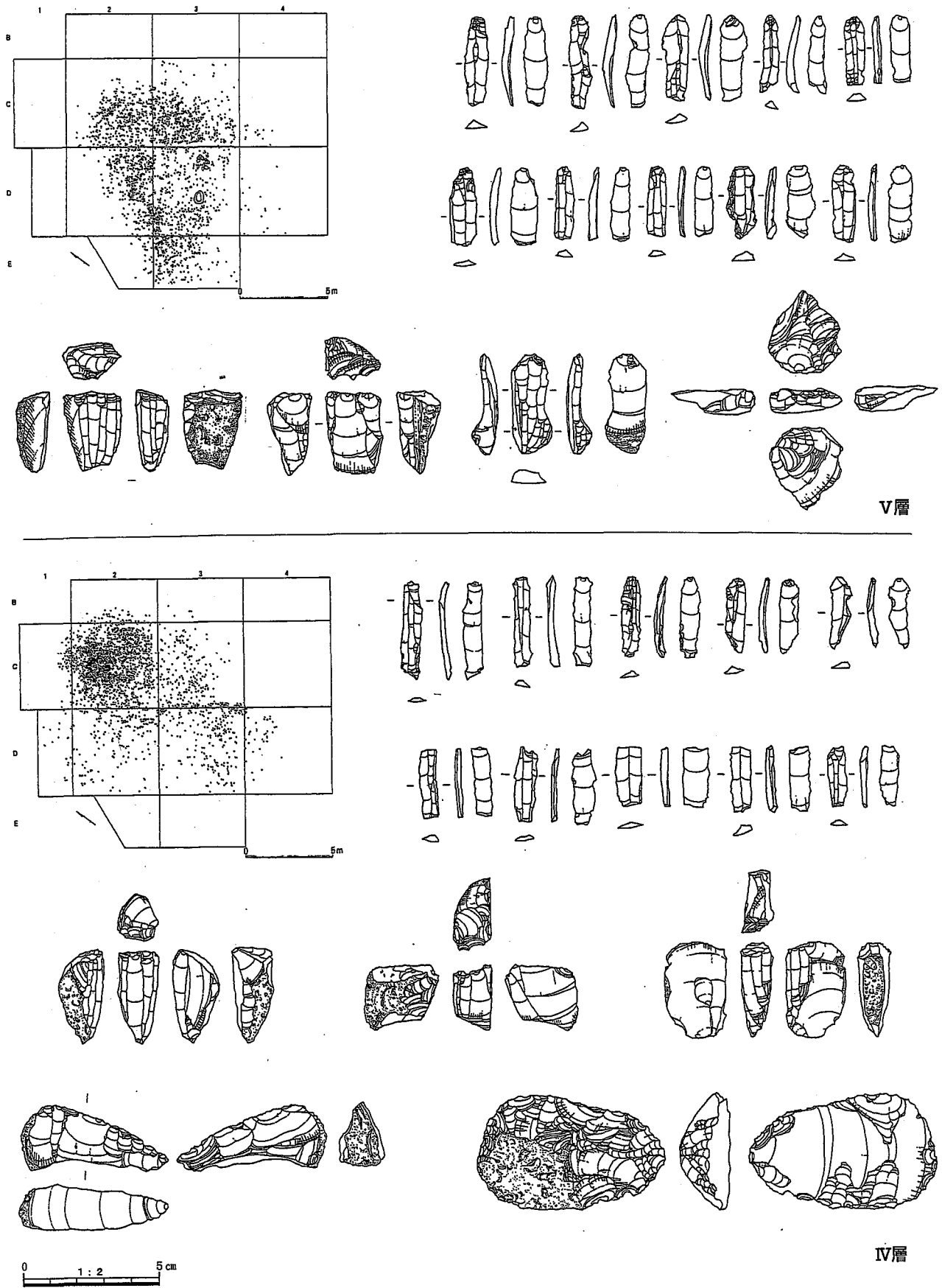
腰岳系黒曜石製石器群ブロック(接合219例)(第27図上・中) 本ブロックにおける接合関係は、ブロック内で完結するものとブロックを超えて接合するものなど多様なあり方を示す。しかし、ブロック1～11を石器の接合関係と照合させると、おおむねその両者は合致する。接合類型別ではMII種接合が多い。さらにMII種接合は、他の接合類型と比較してブロックを超えることが多い(第27図中)。これは細石刃が折断されて頻繁に搬出されたことを示している。一方で、I種接合の多くはブロック内にとどまる傾向があり、ほとんどのブロックで細石刃製作が完結している。

第2表 九州細石刃石器群の技術類型 (石器群別)

遺跡名	MC数	N	F	I	S	分類	POT	A	P
<五島列島>									
城ヶ岳平子	28				●	S	○		
茶園 (V層)	28	●				N			
茶園 (IV層)	14				●	S	○	○	○
<平戸島>									
中の原	2	●				N			
<北松浦半島>									
福井洞穴4層	○		●			F?		○	
福井洞穴3層	○				●	S	隆		
福井洞穴2層	○				●	S	爪		
泉福寺洞穴11層	15				●	S			
泉福寺洞穴10層	307				●	S	豆		
泉福寺洞穴9層	128				●	S	隆		
泉福寺洞穴8層	206				●	S	隆		
泉福寺洞穴7層	7				●	S	隆		
泉福寺洞穴6層	28				●	S	爪		
泉福寺洞穴5層	30				●	S	押		○
<東彼杵・島原半島>									
野岳	○	●				N			
柿泊	1				●	S			
松山A	6				●	S			
鷹野A	5	●				N			
西輪久道 (西)	20	●	●		●	N-F			
西輪久道 (東)	2	●			●	N-F			
百花台	136	●			●	N-S			
小ヶ倉A	2				●	S	押		
小ヶ倉B	1	●				N			
<上場台地>									
川原田	3	●				N			
菅平田黒龍	1	●				N			
荒平	3	●				N			
竹木場前田	3	●	●			N-F			
原A	3	●				N			
原B	3			●		I			
馬川谷口1・2	9			●		I			
石ヶ元下道	9			●		I			
馬部基蔵山	5			●		I			
中尾ニツ枝	15			●		I			
枝去木山中	1			●		I			
東山I	4			●		I			
<福岡平野>									
乙植木山城戸	11				●	S			
野黒坂	5	●				N			
門田 (包含層)	5				●	S	爪		
門田 (門田)	9				●	S		○	
門田 (谷)	97				●	S			
門田 (辻田)	23				●	S			
井尻B	3	●				N			
吉武高木	29	●			●	N-S			
大原D	14			●		I		○	
峠山	2	●				N			
<筑後川流域>									
春園	2	●				N			
大草平	9	●				N			
龜石山	19	●	○			N+F			
五馬大坪	5	●	○			N+F			
平草	3	●				N			
宇土	3	●				N			
<大野川流域>									
松山	15	●	○			F+N			
上下田	14		○			F		○	
市ノ久保	120		○			F		○	
牟礼越	9		○			F			
宮尾原	3	●	○			N+F			
政所馬渡	3				●	S	無		
<阿蘇外輪>									
河原第3・1B	23	●				N			
高畑乙ノ原	4				○	S	爪		
<球磨川上流域>									
城・馬場2	27	●				N			
白島平A	11	●				N			
狸谷	3	●				N?	○?		
<五ヶ瀬川流域>									
阿蘇原上	24				○	S	爪・隆		○
赤木	7		○			F			
<宮崎平野部>									
仲野原	44	●	○		●	F-S			
向原第3	3	●	○			N+F			
霧島	5	●				N			
立野第5	33	●	○			N+F			
野首第2	26	●	○			F			
小並第1	19	●	○			N-F+U			
永牟田第2	7	●	○			N+F			

遺跡名	MC数	N	F	I	S	分類	POT	A	P
朝草原	5		○			F			
尾立第3	4		○			F			
老瀬坂上第3	16	●				N			
唐木戸第4・北	26	●				N			
唐木戸第4・南	5		○		○	F-S			
唐木戸第3	20	●	○		○	N+F+U			
北牛牧第5	1	●				N			
音明寺第1	18	●	○			N+F+U			
東畦原第1	4	●				N			
塚原	8		○		●	F+U			
船野第1地点	28	●	○			N+F+U			
船野第2地点	11		○			F			
上ノ原	5	●	○			N-F			
下屋敷	14		●			F			
白ヶ野第2・第3	22	●			●	N-F		○	
春日地区第2地点	21	●	○			N+F			
長園原	13		○			F+U			
木脇A区	6	●				N			
木脇E区	2		○			F			
下星野	13	●				N			
<大淀川中流域>									
小田元第2	24	●	○			N+F+U			
<川内川流域>									
上場2層	22	●			●	N-S		爪	
上場3層	23	●	●		●	N-S		爪	
上場4層	3	●				N			
木場A	3	●				N			
床並B	27		●			F			
鹿村ヶ追	12		●			F			
成岡Aユニット	7	○				N			
成岡Bユニット	12		●			N			
成岡Cユニット	155	●			●	N-S			
大原野	19					N			
新開原	7	●				N			
星塚	5	●	○			N-F+U			
石峰	23	●	●			N-F			
<薩摩半島北部>									
戸堀北側ブロック群	9				●	S			
戸堀南側ブロック群	11		●		●	F-S			
西ノ原B	7	●				N			
今里	101	●				N			
伏野	2				●	S			
泉仁田尾Cブロック	18		○		○	F-S			
泉仁田尾Gブロック	25		○		●	F-S+K			
泉仁田尾Nブロック	7		○			F+K			
御飯屋跡	28	○	○			N-F			
前山2ブロック	7		●			F			
前山3ブロック	3	●				N			
横井竹ノ山 (市)	20				●	S		○	
横井竹ノ山 (県)	202				●	S			
宮ヶ迫	28	●	○			N-F			
加治屋園	343		○			F+U・K		○	
加果山22ユニット	16		○			F			
加果山29ユニット	113		○		●	F-S			
加果山30ユニット	51		○			F+K		○	
<薩摩半島南部>									
帖地1A・B区	23		○		○	F-S		○	○
帖地2A区	61		○		○	F-S		○	○
格ノ原	5	●				F			
平田尻 (第2次)	9					F			
志風頭	79	●	○			N-F			
小牧3A	15	○	○			N-F			
水迫9層	7	●				N			
登立	102	○	○			N-F			
<大淀川上流域>									
前原和田	35	●	●			N-F			
城ヶ尾IV文・5ブロック	8	●				N			
桐木耳取Ⅲ文・9A	6	●				N			
桐木耳取Ⅲ文・18A	14	●	●		●	F-S		隆?	
桐木耳取Ⅲ文・22A・26	9	●			●	N-S			
桐木耳取Ⅲ文・24A・37	6	●	●			N-F			
桐木耳取Ⅲ文・24A・40	9	●	●		●	F-S			
桐木耳取Ⅲ文・27A	11	●				N		○	
<鹿屋原台地>									
西丸尾・Aブロック	20	○	○			N-F			
西丸尾・Bブロック	16	○				N			
榎崎A・Bブロック	4	●	●			N-F+U			
榎崎A・Cブロック	11	●	○			N-F+U			
榎崎B・Aブロック	19	●	●			N-F			
榎崎B・Bブロック	2		○			F		○	
榎崎B・Cブロック	12	●	●		●	F-S		○	
<種子島>									
銭亀	17		○			F			

●: 黒曜石利用 ○: 非黒曜石利用 ◎: 両者利用 トーンは同一石材が利用されている石器群

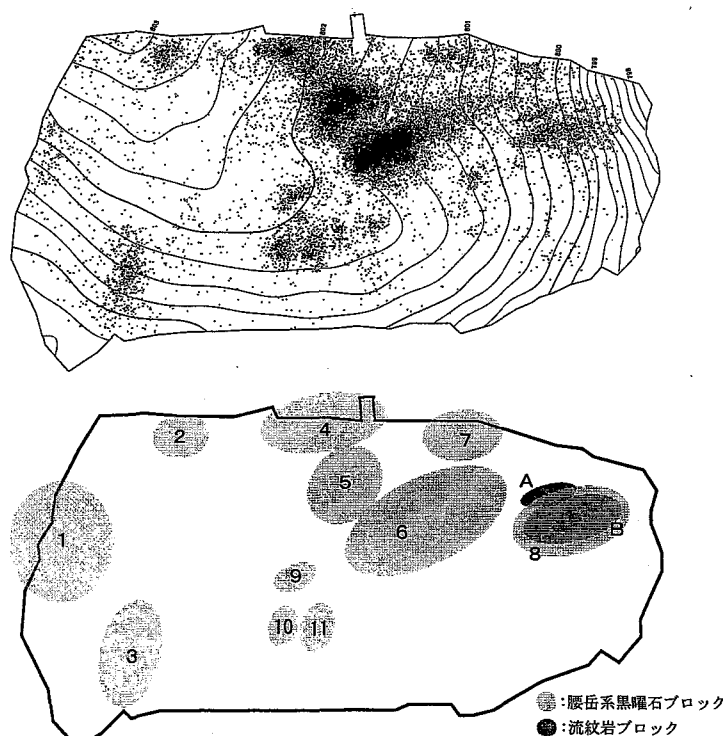


第 24 図 茶園遺跡における細石刃石器群の層位的事例 (川道 1998)

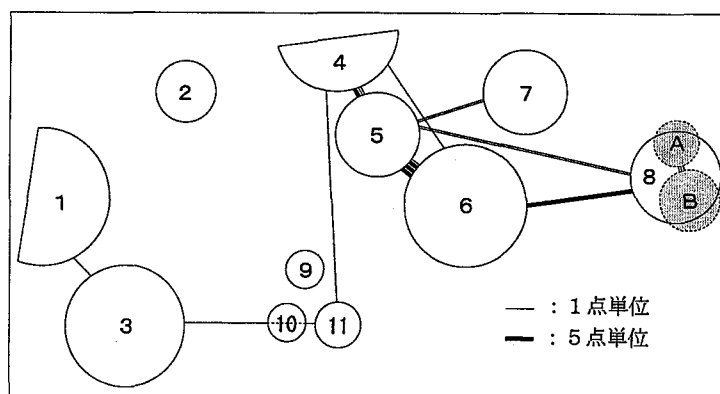
ブロックを飛び越える接合関係からブロック間関係を見ていくと、最も有機的な関連性をもつブロックは、ブロック5と6である。MII種接合が11例で最も多く、MI種接合も4例存在する（第26図）。ブロック4～6に関しては、石器分布においてその境界が不鮮明であるように、ブロック間関係もきわめて密接なものである。一方で、このブロック4～6との関係において、その区分が比較的明瞭である調査区北側の2つのブロック（7・8）との間でもブロックを超えた接合関係が成立していることは注意が必要である。ブロック4～6と7・8との接合関係は細石刃の接合だけでなく、剥片の接合関係も成立している。これらの調査区北側のブロックが相互に関連している。

流紋岩製石器群ブロック（接合19例）（第27図下） 接合関係からみて2つに分離可能である。接合関係はこの2つのブロック内で完結しており、細石刃製作の痕跡もこの2つのブロックにしか認められない。注目されるのは、数点の細石刃・剥片類がブロック外に存在していることである。これらは、流紋岩製石器群ブロックとはほとんど関係なく分布しており、腰岳系黒曜石ブロック内にも分布している。これら両者は、垂直分布においても同一平面上に分布している。重要なのは、この中に微細剥離痕のある剥片・細石刃が一定量存在していることである。これは、遺跡内製作されたものかどうかは不明だが、他所で製作されて搬入されたものであると考えられる。

以上の検討から明らかなことは、



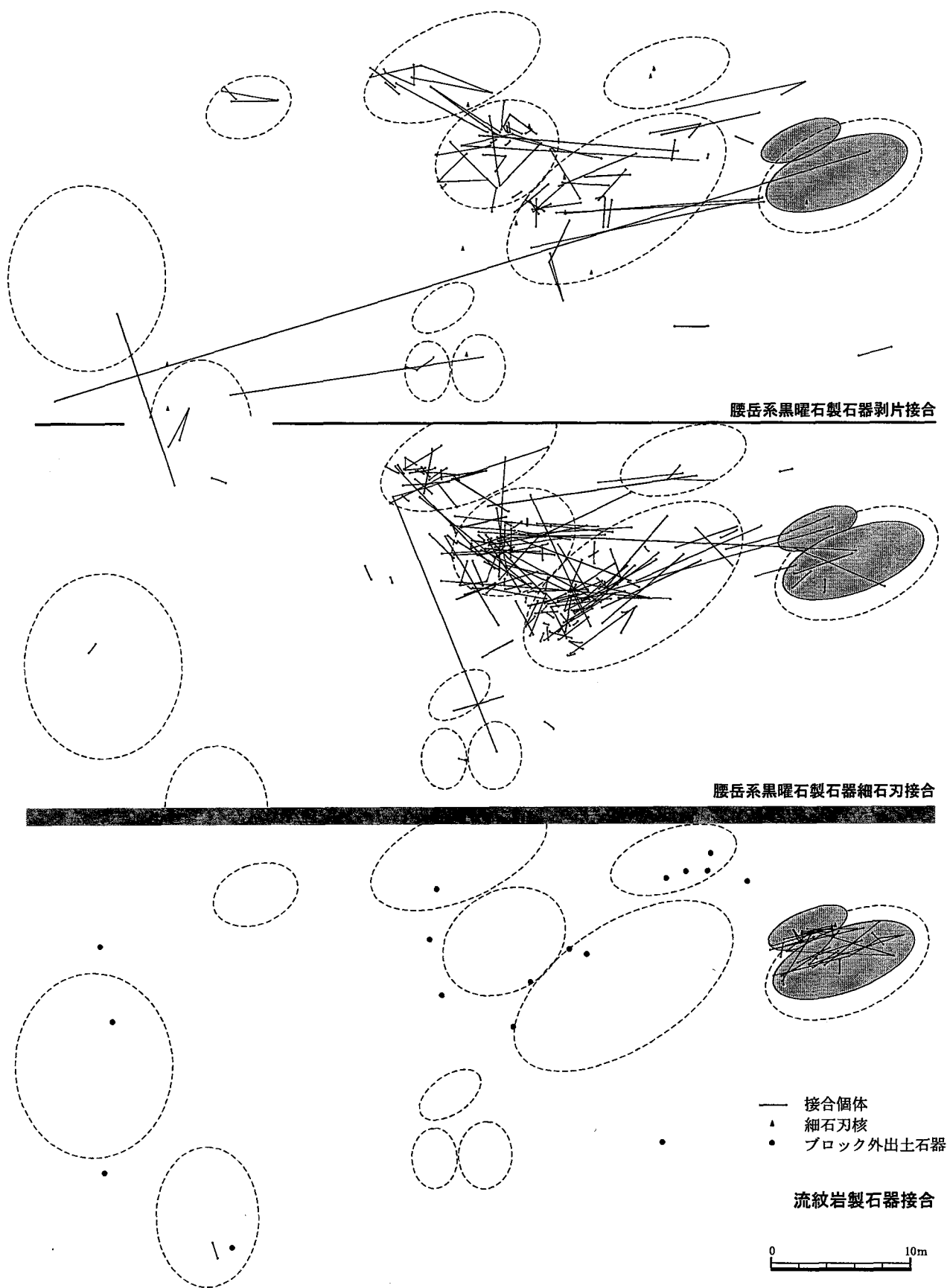
第25図 亀石山遺跡における細石刃石器群の平面分布



第26図 亀石山遺跡におけるブロック関係

第3表 亀石山遺跡における接合資料一覧

石器集中		接合資料No.								細石刃		剥片	
										I	II	I	II
1	3	181										1	
3	11	44										1	
4	5	26	64	121	216	219	47	183	4	1	2		
4	11	116								1			
5	6	25	67	80	85	87	109	151					
		153	157	180	205	206			11	1	2	2	
		32	34	46	174								
5	7	24	99						2				
6	8	98	106	207	15	49			3		2		
総数										20	2	8	2



第27図 亀石山遺跡細石刃石器群の平面分布と接合状況
(破線は腰岳系黒曜石ブロック、トーン部は流紋岩ブロック)

ブロック間関係において、流紋岩ブロックを含む調査区北側の7つのブロック間で接合関係が認められることである。このブロック間関係を見る限り、流紋岩ブロックは独立した存在ではない。さらに、流紋岩製石器の一部が腰岳系黒曜石ブロックに分布していることも重要である。一方で、野岳・休場型のメルクマールになる打面再生（調整）剥片は流紋岩ブロックにも重なっている。

以上を踏まえれば、腰岳系黒曜石製石器群と流紋岩製石器群は、接合関係やブロック外出土遺物の分布から見て、相互に関連性を有しているといえることができる。つまり、これらの両石器群には時間的な並行関係を認めてもよいと考えられるのである。

b. 周辺遺跡との比較検討（第28図）

<中九州西部>

大分県日田市五馬大坪遺跡 本遺跡は、亀石山遺跡と同じ筑後川上流域に立地している。細石刃石器群は細石刃、細石刃核で構成され、それらの利用石材は、ほぼ腰岳系黒曜石と推定される漆黒色黒曜石が大半を占める。このほかに流紋岩製細石刃核1点、阿蘇象ヶ鼻産ガラス質溶結凝灰岩製の細石刃核1点および細石刃、針尾産黒曜石製の細石刃が存在している。腰岳系黒曜石における細石刃製作技術は、亀石山遺跡と類似しておりその細石刃核は野岳・休場型である。これに対して、流紋岩製の細石刃核は、分割礫の平坦面を打面とし、そこから側面調整が行われる船野型である。細石刃核以外の流紋岩製石器は出土していない。この船野型は、腰岳系黒曜石製細石刃核とは離れた場所出土しているが、その周辺からは腰岳系黒曜石製細石刃が数点出土している。

熊本県西原村河原第3遺跡 本石器群では、流紋岩による細石刃製作の痕跡は認められないが、流紋岩製の削器や大ぶりの剥片が出土している。流紋岩製石器は7点のみで、遺跡内での製作痕跡はきわめて乏しい。これらは全て腰岳系黒曜石ブロックの中で出土している。

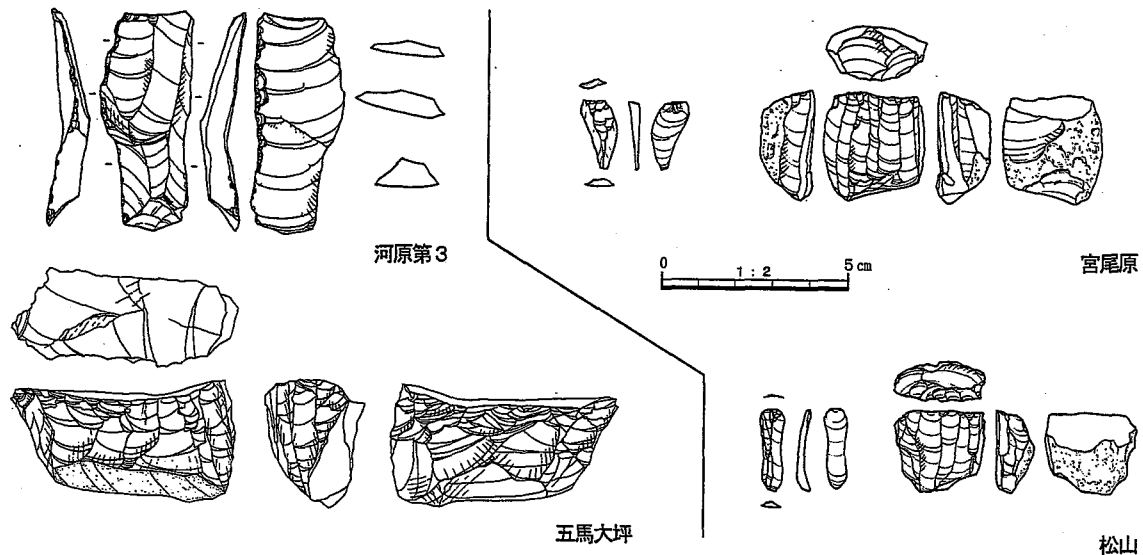
<中九州東部>

それでは流紋岩の原産地を背後に置く、中九州東部の大野川流域の石器群を見ていく。

大分県豊後大野市宮尾原遺跡 本遺跡は大野川流域の河岸段丘上に位置する。旧石器はⅢ層下部よりローム層であるⅣ層直上にかけて出土し、それよりも下位での出土はない（諸岡 2003）。これらは、出土石器の形態や製作技術から見て、全て細石刃石器群のものと判断できる。さて、細石刃石器群は細石刃14点、細石刃核3点のほか、石核、剥片、碎片類で構成される。利用される石材は、細石刃核はチャート製2点、腰岳系黒曜石製1点である。しかし、細石刃の石材構成はこれとはやや異なる。14点の細石刃のうちチャート製7点、流紋岩製6点、黒曜石製1点で、細石刃核の認められない流紋岩製のものがほぼ半数を占めている。出土石器全体のうち、70%以上が流紋岩製石器である。流紋岩製の細石刃核は存在しないが、ブランクは認められる。このブランクは平坦面を打面とし、そこから側面調整がなされるもので、船野型に近いものである。こうしたブランクは、細石刃とともに細石刃核の存在を暗示しており、剥片や碎片の存在から遺跡内で製作された可能性が高い。一方の腰岳系黒曜石製石器は細石刃核を含めて3点のみで、遺跡内製作の痕跡はきわめて乏しい。

大分県豊後大野市松山遺跡 本遺跡は大野川流域の河岸段丘上に位置する。本遺跡における主な細石刃製作技術は、分割面などの平坦面を打面とし、側面調整を行った後に細石刃を剥離するもので、細石刃核は船野型である。利用される石材の主体は流紋岩で、全体の90%以上にもぼる。この中に腰岳系黒曜石製の細石刃核および細石刃数点が組成されている。黒曜石製の剥片等はほとんど見られないため、細石刃核の観察から細石刃製作技術を検討すると、黒曜石製細石刃核は野岳・休場型の特徴を備えるものである。黒曜石製の細石刃の頭部には頭部調整が見られる。

大分県豊後大野市上下田遺跡 本遺跡も大野川中流域の河岸段丘上に位置している。本遺跡の状況



第 28 図 中部九州東西の細石刃石器群における単体搬入石器

は松山遺跡と類似するが、細石刃製作技術の点で、主要剥離面を側面に設定する「上下田型」が特徴的に認められる。石材利用という点においては、流紋岩製石器卓越し、腰岳系黒曜石製石器が少量組成されるという松山遺跡の状況に類似している。黒曜石製石器は細石刃のみであるため、細石刃製作技術は不明である。

c. 両地域石器群の関連性

中九州西部の細石刃石器群において、N群の中に、少量ながら流紋岩製の船野型細石刃核や石器が組成される。これに対して、中九州東部の石器群では、F群の中に少量の腰岳系黒曜石製石器が組成される（第 28 図）。しかも、それらの石器は、細石刃か細石刃核といういずれも単体での搬入である。

これらの現象は、亀石山遺跡におけるブロック間関係とは質的には異なる。しかし、中九州西部における流紋岩製石器の少量組成、中九州東部における腰岳系黒曜石製石器の少量組成という対照的な現象が認められることは事実である。こうした中九州東西の石器群のあり方から、筆者は両群の時間的並行関係を認める。しかし、少なくともこの段階において両群の石材が異なっており、この要因として石材による技術運用の相違もしくは、集団差が考えられる。この問題に関しては、次章で取り扱うこととする。これらの石器群をここではN+F群とする。

ただし、N群とF群が伴う事例においても、同一石材で両技術が適用されている石器群が存在する。特に南九州にそうした石器群が認められ、本来非黒曜石に適用されたF群技術が黒曜石石材に適用されている。同一ブロック内に存在していることから明確な時間差は考えられず、技術の石材置換された結果と見なされる。ここでは、これらをN-F群とする。

(3) F群とI・S群との関係

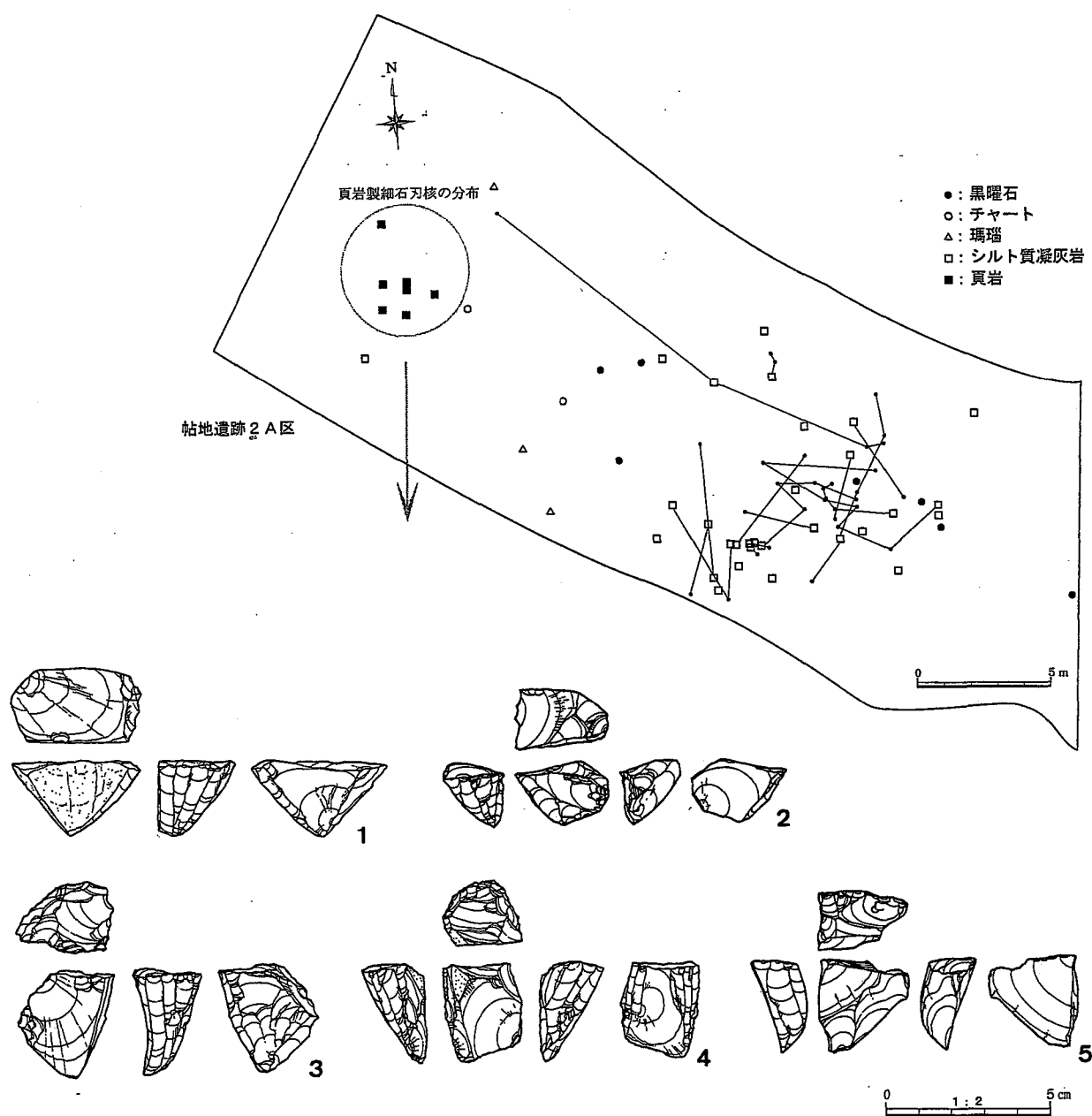
最後に、F群とI・S群との関係であるが、西北九州ではこれらの共伴事例はほとんどない。一方で、南九州の石器群では、これらの共伴事例が見られる。帖地遺跡、加栗山遺跡 29 ユニット、県道仁田尾遺跡Cブロック、桐木耳取遺跡 18 エリアなどがこれらの事例になる。

帖地遺跡では、多種多様な石材によって細石刃製作が行われている。本遺跡 2 A 区では、47 点の細石刃核が出土しており、技術的に見てほとんどのものがF群技術に属する。このうち、遺跡近傍で採取されると考えられる頁岩においては両群技術が適用されている。すなわち、薄い剥片にはS群技術が適用され（第 29 図 3～5）、厚みのある剥片には主要剥離面を細石刃核の打面に設定し打面調整を

施さないF群の技術が適用されている（第29図1・2）。しかもこれらの頁岩製細石刃核は4m前後の範囲に密集して分布している（第29図上）。石材、分布から見て、この両者を切り離して考えることが出来ない。同様な状況は、特に鹿児島県薩摩半島地域に多く認められる傾向がある（第2表）。ここでは、これをF-S群とする。

これらの石器群では、加治屋園型が組成されることが多い。宮田栄二は、加治屋園型を2つに区分し、このうち下縁調整が施される一群をB型とし、福井型の影響と捉えた（宮田 1989）。加治屋園型の成立は、F群技術の石材適応の結果と捉えられることは先に述べたが、F-S群においては各技術類型が複合したような状況を示していることから、加治屋園型もその例外ではなく、S群技術の要素が取りこまれたようなもの（宮田のいう加治屋園B型）が成立するものと考えられる。

以上のように、九州の細石刃石器群には、単一の技術類型を有する石器群と、複数の技術類型が共



第29図 帖地遺跡2A区におけるF群とS群との共存

存している石器群とが存在している。また、複数の技術類型が共存している石器群には、石材が異なる場合と同一の場合があることが確認された。これらは、地域ごとにまとまる傾向があることも事実で、例えば、N-F群やF-S群は南九州に分布する傾向がある（第2表）。総じて南九州では、単一の技術類型を有する石器群は少数で、逆に数多くの技術類型と共存関係を有する。このように本来的には、異なる技術と考えられるものが融合している状況は、単純に技術差を時期差として解釈することを困難としている。南九州におけるこうした状況は、良質の黒曜石を主体とする北部九州と多種多様な黒曜石と非黒曜石とが共存する南部九州の石材環境の差異に起因するものと考えられる。南九州における技術的多様性は石材に対する技術的適応を示していると考えられる。

2. 「神子柴系石器群」との関係

先行研究における論点の1つに、いわゆる「神子柴石器群」と細石刃石器群との関係がある。これまで、船野型（岩土原型）など特定の細石刃技術に結びつくとされてきた（栗島 1991、綿貫 1992 など）。確かに、細石刃石器群との共伴関係に関しては否定できない。しかし、東北日本では湧別技法との結びつきが強い（稲田 2000）。九州においては、特定の細石刃技術に結びつくとは必ずしも言えない（岡本 1999）（第2表）。また、細石刃石器群と「共伴」関係にある槍先形尖頭器や局部磨製石斧自体が非常に少ない。これらの点で、九州において細石刃石器群と槍先型尖頭器や局部磨製石斧との関連について、先行研究を含めて事実関係を以下にまとめる。

①F群、S群との「共伴」関係が認められるが、少なくとも単一技術に結びつかない。

②それぞれの石器の形態に差異が大き（杉原 2000）。

③槍先形尖頭器と局部磨製石斧とで石材利用でも地域差が明瞭である（村崎 2000）。

これらのことから、細石刃石器群と神子柴系石器群とが同時に、九州に技術伝播したような状況ではないことが分かる。典型的なN群（野岳・休場Ⅰ型）と伴うことはなく、細石刃期のより新しい段階に位置づけられる石器群に伴うことは確実である。本石器群と細石刃石器群との関連に関しては、石材利用を含めて検討する必要があるが、資料数の制約があるため今後の資料の蓄積に期待したい。

第4節 九州細石刃石器群の編年と変化の背景

1. 九州細石刃石器群の編年—細石刃技術の変遷—

初期段階の細石刃石器群に位置づけられるのは、亀石山遺跡、河原第3遺跡、茶園遺跡Ⅴ層に代表されるN群と考えられる。細石刃製作技術の大きな特徴は、打面再生を基本とする細石刃製作の継続である。野岳・休場Ⅰ型が特徴的に認められる。本群が最も先行する根拠としては、¹⁴C年代で最も古い値を示すこと、土器との共伴事例がないことにある。これはその後の型式変遷から見ても妥当である。ただし、これとほぼ同時期にF群も展開している。F群技術の出自は問題点も残るが、N群との共存関係を認めるならば、おそらくN群技術の石材置換によって生み出された産物であろう。N群とF群は南九州において共伴することは一般的であり、「黒曜石＝N群、非黒曜石＝F群」という対応関係がある。しばしばこれらの石器群には遺跡近傍産石材を利用した畦原型が共伴する。畦原型は、技術的にF群技術の在地産石材（砂岩・珪質頁岩）への運用の結果であると考えられる。

これとは時間的に後出と考えられるのが、Ⅰ群およびS群である。Ⅰ群の編年の位置づけに関しては、先述のとおり2つの考え方があるが、筆者は、福井型の横打打面形成との違いと、Ⅰ群に土器が伴出しないことを重視して、S群成立以前に位置づけたい。S群成立以後、北部九州一帯にS群技術

が浸透するものと考えられる。S群の成立に関しては、周辺石器群の状況を考慮する必要もあるが、I群と素材利用の方法が類似している点からI群との関連性の中で成立したと考えられる。ただ、この成立が土器出現後かどうかは検討の余地がある⁽⁵⁾。豆粒文～隆起線文段階における石器群の存在が不明瞭である。北部九州において、爪形文土器段階では、門田遺跡、河陽F遺跡、高畑乙ノ原遺跡、阿蘇原上遺跡など一定の遺跡数が見られる。これらの遺跡では共通して、S群技術による細石刃生産が行われ、もはやN、F群技術は認められない。注意されるのは、高畑乙ノ原遺跡や阿蘇原上遺跡における遺跡近傍産石材の利用である。高畑乙ノ原遺跡では、それまで阿蘇周辺において細石刃製作にほとんど利用されない象ヶ鼻産凝灰岩や阿蘇4系黒曜石が利用されている⁽⁶⁾。

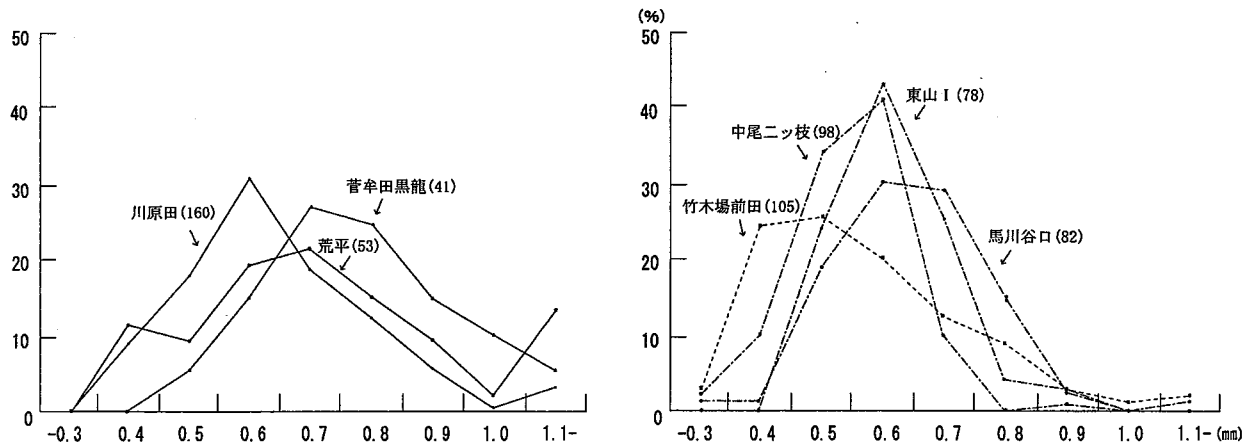
一方、南九州石器群では様相がやや異なる。南九州におけるS群は、純粋な形では薩摩半島北部の杵堀遺跡北側ブロックに見られる（長野ほか 2006）。針尾産黒曜石製の細石刃、細石刃核が出土しており、横打による打面再生剥片と細石刃核の接合資料も存在する。しかし、S群技術は、ほとんどの石器群において南九州産石材に適用されている。しかも帖地遺跡、加栗山遺跡などでは、F群技術と共存しており素材形態に応じて異なる技術運用が認められる。南九州において、S群の単層的な遺跡はごく少数であるが、こうした石器群は西北九州産石材利用が顕著である（杵堀遺跡）。多くの遺跡ではF群が主体であり、先に述べたように、これとS群技術が複合したF-S群が特徴的である。加治屋園型がこれに伴う場合もある。以上のように、南九州の細石刃期後半段階の主要な技術基盤はF群であったと想定される。

以上から明らかのように、九州細石刃石器群の技術変遷は決して単線的なものではない。本来的には、きわめて固定的な技術が認められるが、時間の流れに伴って、各技術が相互に関連しあいながら技術複合（木村 1995 の文言を借用すればテクノロジカル・コンプレックス）を形成しつつ変遷しているのである（第 31 図）。

2. 細石刃形態の変化

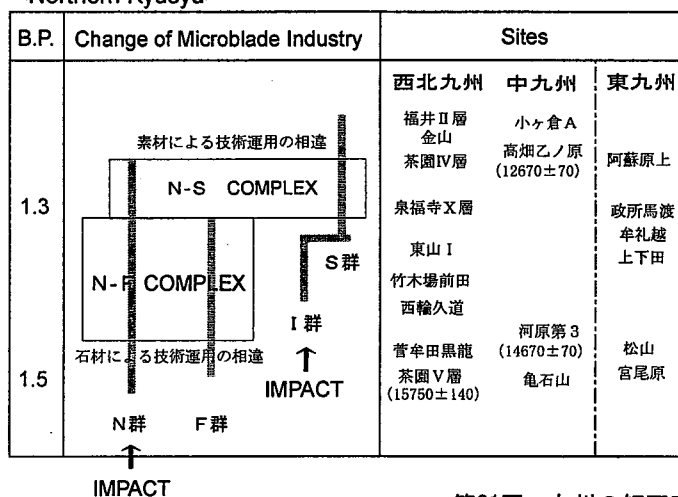
さて、では以上のような細石刃技術の変化は単なる技術変化にとどまるものであろうか。細石刃核の整形技術に関わる諸属性も重要であるが、細石刃製作技術の変化は、細石刃の形態に反映されて然るべきであり、したがってそのものの自体の検討も重要である。細石刃の機能は、多様な使用方法が明らかにされている（堤 1995、美安 1996、米田 2003）が、シベリアなどの例（小畑 2001）から推測して、その多くは植刃器（特に槍）の刃部の一部として複数の細石刃が組み合われて機能していた可能性が高い。とすれば、細石刃の長さよりもむしろ幅が重要である。細石刃の幅に着目した研究は比較的多く、これまで幾人かの研究者によって触れられている（藤本 1982、織笠 1983、雨宮ほか 2002 など）。南九州の細石刃石器群における細石刃の幅を石材ごとに検討した雨宮らは、細石刃幅が時期によって狭小化することを明らかにしている（雨宮ほか 2002）。また、細石刃石器群が層位的に出土した茶園遺跡においても、V層とIV層では後者において幅狭化の傾向が認められることが指摘されている（川道 1998）。両分析において細石刃幅の幅狭化という同様の結果が導出されていることは注目される。この傾向は同一の石材環境下にある石器群でも同様であろうか。

ここで佐賀県上場台地における細石刃幅の変化を検討する（第 30 図）。すると、N群である川原田遺跡、菅牟田黒龍遺跡、荒平遺跡では、ピークが 0.6～0.8 cm であり、グラフが低い山をなすのに対して、I群である中尾ニツ枝遺跡、東山 I 遺跡、馬川谷口遺跡ではピークがほぼ 0.6 cm に収斂し、かつ高い山をなす。つまり、N群では幅広であるが斉一性に欠け、I群では幅狭でかつ斉一性が高いという傾向がある。幅狭化と斉一化は、細石刃製作技術と対応している。やや異なるのが、N-F群である竹木

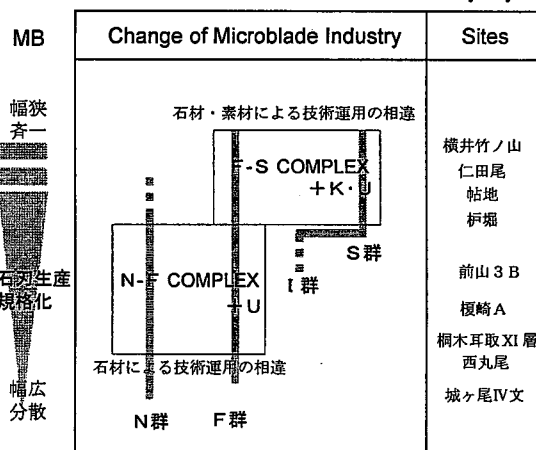


第30図 上場台地における細石刃幅の変異 (左: N群、右: F・I群)

<Northern Kyusyu>



<Southern Kyusyu>



第31図 九州の細石刃石器群編年

場前田遺跡の細石刃で、幅狭の細石刃の比率が非常に高い。以上のように細石刃の幅に3つのあり方があることが確認された。細石刃製作技術にみられる技術基盤の変化に対応していることは重要である。

3. 変化の背景

(1) 細石刃石器群技術の成立の背景

九州の細石刃石器群の成立に関して、1度目のインパクトはN群技術の成立に関わる。問題は、このインパクトの実態であるが、この起源論に関しては、朝鮮半島や中国などの隣接諸地域の細石刃石器群の理解が不可欠である。しかし、現在のところ韓国において半円錐形や扁平形の細石刃石器群は存在しているものの、安定的なものではなく、多くは削片系細石刃石器群である (小畑 2003)。中国においては、羊角山や孟家泉、霊井遺跡などで出土した細石刃核との類似性は指摘できる (加藤 2000)。九州でいうN群とF群とが共存するようなあり方を示すが、細石刃以外の共通性が見出すことはできないため、安易に結び付けることが出来ない。少なくとも、九州の細石刃期初期に認められるN群そのものを、隣接諸地域から見出すことは現状では困難である。逆に自生説 (下川・萩原 1983 など) に関しても、既存の石器群との技術的なヒアタスが大きく容易に受け入れられるものではない。両説の二者択一的な議論では解決できそうになく、解決のためには、九州における後期旧石器時代後半期の

石器群構造変化を捉える必要があろう。

2度目のインパクトに関わるI群は、西北九州産黒曜石を素材とするものが主体であり、西北九州を窓口として技術が流入したとみるのが妥当であろう。小畑のいう朝鮮半島からの集団の南下（小畑2005）、もしくは北方系細石刃石器群との関連性の中で捉えられる可能性はあるが、石器の技術構造上の相違があり、人間集団が移入してきたような状況は描けない。こうした起源論に対して、現時点で不用意な結論は避けるが、九州の細石刃石器群の最初期段階にはN群が存在していることは事実である。今後、南関東などで試みられているような先行石器群からの構造的変化を読み取る必要（仲田2006）があろう。

4. まとめ

九州における細石刃石器群には4つの細石刃製作技術基盤があり、これらが時間的前後関係を持ちつつ変遷している。しかし、その後の変遷は決して単層的なものではない。石材に対する柔軟性を高め、斉一性をもつ細石刃が生産される。大きな変遷過程が変わらないが、細かく見れば北部九州と南九州での技術適応に差異が認められる。おそらく、両地域での石材環境の差がこれに関わると思われる。石材環境が複雑さであればあるほど見かけ上の差異が顕在化していくことになる。

さて、細石刃石器群の変遷に際して生じる変化のうち、石器の技術的变化は、①初期段階の技術的一貫性→細石刃核素材や細石刃剥離技術における柔軟性の高まり②それに伴う細石刃の幅狭・斉一化である。また、後出するS群では、石材利用として③ローカル石材の利用が顕著になる傾向がある（杉原2003）。当初一貫した細石刃技術を運用していた集団が、細石刃の形態的要請に規制されつつ、素材利用と技術運用を多様化させることで細石刃生産の効率性を高めていったと評価されよう。

以上のように、九州の細石刃石器群は大きく2つの時期に分けることができよう。それは、N群とF群が互いに石材を異にしつつ、技術的に斉一性が高い前半期、I・S群の技術的流入とともに、素材に対応しつつ技術的柔軟性を増した後半期である。

細石刃石器群の年代は、¹⁴C年代から想定すると15,500B.P.前後（茶園V層）～12,500B.P.（高畑乙ノ原）前後（較正年代では約18,500B.P.～15,500B.P.）であり、存続年代は約3000年間であったと考えられ、年代から見て、更新世末の気候変動の変化が著しい時期に相当している。石器群の変化の背景を考えるには、こうした背後の環境や資源開発活動（居住システム）との関連性について考える必要がある。次章では、石器群を行動論的視点から分析し、当該期の集団が有する石器技術と行動がどのように関連するかを考察する。